
約束の詩

椿牡丹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束の詩

【Nコード】

N8717U

【作者名】

椿牡丹

【あらすじ】

光の中にいる人達は分かっているだけだ。

落ち続けるしかないと人生を送っている人間がいることを。

頑張れば出来る？

努力は報われる？

そんなものはただの戯言だ。

だってそれは、いつだって勝者の言葉だから。

僕は、そんな風に考える自分を変えたかった？

いつだって一人だった。

かけられる言葉は罵詈雑言。

私は何も悪くない。ただ皆と同じように話したかっただけ、遊びたかっただけ、笑いあいたかっただけ。

だから私は謝る。気を配る。周りを見る。

そうすれば、皆が優しくしてくれるから。

私は、皆と同じように生きたい。

二人はあまりにも違っていた。

一人は残酷な世界の中で生き、一人は残酷な世界そのもの。

出会いは偶然、しかしとった行動は必然。

二人の物語が今、始まる。

プロローグ

五月。

ゴールデンウィークも過ぎ去り、学校に通う毎日が戻ってくる。

梅雨にはまだ早く、しかし春の涼しさはどこかに消えてしまった今日この頃。

僕、ひとなしゆうま斉梨優真にも同じように日の光は注いでくる。

正直に言うと暑い。

未だ冬服のブレザーを着用しなければならないという校則のせいで、朝にも関わらず僕の額にはうっすらと汗が出ている。

けど、そんな事はあまり苦痛にはならない。

僕に通う高校がそういう校則であることは入学前に調べていたし、もともと暑さには強い方だ。

それよりも大切な事、とは言えないかもしれないけれど、暑さよりも僕が不快に思う事は他にある。

そう……学校だ。

僕に通う、市立駒木高校は至って普通の高校だ。校舎が綺麗なわけではないが、特別汚いわけでも、古いわけでもない。

ただ中の人間が腐っている。

どいつもこいつもくだらない人間ばかり。

僕がいい人間だと主張する気なんてこれっぽっちもないけれど、それでもこの学校は最低だ。

出席数が欲しいのか学校には来ているものの、授業なんてまるで聞いていない。

教師は教師で、我関せずといった様子で五十分間の授業後はそそくさと出ていく。

一体どこまで崩れていくのだろう。

いや、一年間ここで過ごして僕はその答えを分かっている。

これ以上崩れることはない。もう崩すところなんて何もないのだから。

『最低までいったら後は上がるだけ』

そんなことを言う人がいるかもしれない。でもそんな人は分かっているだけだ。

最低はどこまでいっても最低でしかなく、一度落ちれば落ち続けるしかないと言うことを。

光の中にいる人達には言っても理解できないことだとは思う。

落ちてしまった、落ち続けている僕だからこそ分かることで、別に分かってほしいとは思わない。

「つと……すみません。余所見をしていて……」

家を出て五分。どこにでもある平凡な十字路で僕は人とぶつかってしまう。

生徒を会いたくないと言う理由で朝早く出ている僕は、この時間帯に人と会うことが初めてだったせいかな、飛び出してくる人を避けることが出来なかった。

「こちらこそすみませんでした!! あのだ……お怪我は大丈夫ですか?」

平均的な男子高校生である僕とほとんど変わらない身長。

でも、僕が彼女の――声で性別は判断することが出来た――顔を見ることが出来なかった。

何故なら彼女は、顔を隠してしまうほど大きな帽子を被っていたのだ。

こんな大きな帽子を被っていたら、たとえ僕が注意していても結果は同じだったのではないだろうか。

そんな事が頭に咄嗟に浮かんだけども、そこはぐつと堪えて口を閉じる。

他人の趣味に干渉できるほど僕は出来た人間ではないし、何より相手の必死さに驚いてしまったからだ。

「私……その、何て言ったらいいか」

「気にしないでください。僕の不注意ですから」

一言だけ言葉をかけると僕はその場を離れようと進むことに決めた。

他人と馴れ合うのは好きじゃないし、早くしないと生徒達が登校してきてしまう。あんな奴等と同じ空気を吸うのは授業中だけにしたい。

「本当にすみませんでした!!」

そんな僕の後ろから再び謝る声が聞こえてくる。

正直鬱陶しい。一度言えば分かることを何度も繰り返されるのは好きじゃない。

「もう本当に大丈夫ですから。僕に関わら……ないで」

初対面の人に対して、精一杯の抵抗を試みようとした僕だったが、結果としてそれが成されることはなかった。

僕の後ろで、たった今ぶつかっただけの女性が倒れていたからだ。染めているであろう茶色く長い髪が俯せに倒れている彼女の背中を覆っている。

そして彼女が被っていた帽子は僕の足元に落ちていた。

プロローグ（後書き）

初めまして。

椿 牡丹と言います。

正直、全く文才はありませんが、少しでも楽しんでいただければ嬉しいです。

頑張るんでこれからもよろしくお願いいたします。

幸せな日常

僕の背後で突如倒れた女性。

音もなく、初めからそうだったかのようなその光景に僕は思わず固まってしまった。

しかし幸か不幸か、その間のせいで僕は彼女の姿を観察することが出来てしまったのだから、どちらかと言えばやはり不幸の部類なのかもしれない。

ボロボロのワンピース。黒色にもかかわらず目立っている汚れきったその布地は、一体いつから洗われていないのだろう。

靴の履かれていないその足は、傷はないように見えるものの裸足であることに変わりはない。

そして僕の足元に落ちている大きな帽子。あまりにも大きく、被れば肩まで日射しから守ってくれそうな帽子にも痛みが見え、それが隠されることはない。

「……………」

固まったままの僕は彼女を見下ろす。

正直こんなこと誰が予想できたと言うんだ。

ただ人とぶつかって、声をかけて別れようとしたら既に倒れているなんて。

「……大丈夫ですか？」

とりあえず帽子を拾い上げゆっくりと近づいていく。

この状況じゃ、警戒してし過ぎると思うことはないはずだ。面倒だけれど、さすがに見捨てて学校には行けない。

すぐ近くまで寄っていく僕だが、彼女が起き上がる様子はなく俯せに倒れた状態を保っている。

この場にいたら駄目だ。この状況、誰がどう見ても僕が何かをしたと思われてしまう。こんな見ず知らずの人間のために僕が批難される謂れはない。

この帽子を返して学校へ向かおう。学校に入ってしまったばこちらのものだ。崩れたような所かもしれないが、世間の目からは外れることが出来る。

そう思つての行動だった。

事実、僕の頭の中には自分を正当化させるための事しかなかったし、知らぬ存ぜぬで貫き通そうとしていたのだから。

でも人生は、運命は上手くは働かないものなのかもしれない。

何故なら、彼女が急に起き上がったのだ。

それまでの行為——俯せで倒れていると言う状態を自発的な行為と呼んでいいのかは、些か疑問ではあるが——は全く関係なかったかのように、元気よく起き上がる。

「すみません！！ 私、ちょっと貧血気味で……。ご迷惑をおかけ

しました」

「……そうですか」

僕が被せたのだから文句を言うつもりはないけれど、大きすぎる帽子のせいで彼女の顔が見えることはなかった。まあ別に見たいとも思わないし、こちらから見えないと言うことはあちらから見えないと言うことで僕には好都合だ。

こんな事で変な縁が出来てしまつては、それこそ不幸というもの。だから明らかにおかしい貧血という理由には、特にコメントを返すことはしない。

「本当にすみませんでした!!」

「構いませんよ。……ああそれと」

必死で何度も頭を下げる彼女を見ると、本気で鬱陶しくなってくる。

だから僕は今度こそ学校へと歩き出そうと思ったのだ。早くしないと他の生徒が登校してきてしまう。そんな事は絶対に嫌なことだ。

にもかかわらず、僕は自分から彼女に話を振っていた。

話題は勿論、彼女の服装等についてだ。あまりにもみすばらしい彼女の格好に僕の何かが反応したのかもしれない。

が、それ以上僕の口から言葉が出てくることはない。彼女はその場で立ち尽くし、僕の言葉を待っているにもかかわらず、僕は話すこ

とが出来なかった。

だって答えが分かりきっていたから。

それを言ったところで、何も変わらないことは目に見えていたから。

自分の靴を貸してあげる気も、服を貸してあげる気も、風呂を貸してあげる気も、何かをする気なんて、何かをしてあげる気なんて、これっぽっちもないくせに、それを指摘しようとしている。

彼女だって自分がどんな格好をしているかぐらい分かっているはずだ。

それをわざわざ指摘して一体何になるんだ。

家が近いから帰ってあげるのか？

心配して面倒を見てやるのか？

馬鹿馬鹿しい。そんなものはただの自己満足じゃないか。ただの偽善じゃないか。

それをして僕に何か良いことがあるのか？

そんな事をしたって何も変わらない。僕がするべき事はそんな無意味な事じゃないはずだ。

「……すみません。何でもないです。それじゃあ」

だから僕はすぐに再び学校へ向かうことにする。

後ろで何かを言っているような気がするけど、そんなものは無視した。

理由なんて簡単だ。とりあえずその場から離れたかった。

あんなに謝り続けている彼女を見ると、こっちの気がおかしくなってしまう。

認めているはずの欠点を、開き直っているはずの自分自身の事を、事細かく批難されているようで、全てを否定されているようで、とても耐えられなかった。

何で朝からこんな気分にならなきゃいけないんだ。

朝は数少ない僕の安らぎの時間であったはずなのに、今日に限っては学校にいる時のように、否、それ以上の苛つきを感じる。

「……苛ついている、か。それこそ馬鹿馬鹿しい」

頭に浮かんでくる様々な言葉を全て消し去り、学校への道を急ぐ。

駒木高校は比較的僕の家から近い。十分も自転車で走れば着く距離だ。

尤も、自転車が家には僕には必要のない情報であり、実際は二十分弱もの時間を歩く必要がある。

これを去年、学校のクラスメートに話したことがあるけれど、見事に僕が自転車を乗れないと勘違いされた。別にどうでもいいことだけど、一応弁解させてもらおうと僕は自転車を乗ることが出来る。必要がないから自転車は家にはいけれど。

それを指摘してきた生徒の顔は忘れてしまったし、名前は覚えていないけれど、その出来事だけは覚えている。

他人から与えられたものでしか生きていけないくせに、少しでも自分より下な人間を見つけた途端にそれらを馬鹿にする。

一体彼——もしかしたら彼女かもしれないけれど、全く覚えていないので訂正の仕様が——がどれ程偉いと言うのだ。たかが十数年生きただけで、あたかも自分が大人だと言わんばかりの態度をとる。

何かをしたわけでも、しようとしているわけでもせず、どころか、まともに一人で暮らしていけないくせに我が物顔で生活している。

僕が偉い人間だ。賢い生き方をしている。なんて思いはしないけど、だからって馬鹿にされる意味がわからない。

だって彼が指摘したことは、朝起きられない人が夜更かしをしていると決め付けているようなものじゃないか。
そんなもの、パンを食べないからって小麦アレルギーだと決め付けているようなものじゃないか。

閑話休題。

結局何が言いたいかというと、『やらない＝出来ない』という方程式は必ずしも成り立つわけじゃないって事だ。

僕は必要なことは極力しない。だからその時も特別弁明した覚えはないけれど気にしていない。まあ僕が自転車に乗れるという事実は変わらないわけだし。

そんな一年も昔の、とるに足らないどうでもいい記憶を思い出しながら高校に着く。

慣れた手つきで上履きに履き替え、誰もいない廊下を歩き教室へと向かっていく。

僕のクラスは二年二組。
二年の四クラスが一行に並んでいる二階の、手前から二番目の教室。

「やあ優真君、おはようだね。今日もいい天気だ」

教室へ入った瞬間に僕に声がかかる。

クラスメートを、というよりは学校の人間全員を嫌っている僕に話しかけてくる人間はほとんどいない。彼女はその中の一人。

名前は天童寺てんどうじなでしこ 撫子。

艶のある黒髪を肩甲骨の辺りまで伸ばしていて、所謂大和撫子だ。
名前に負けていないその容姿は、見た者に強烈な印象を植え付ける。

しかしそれは見た目だけの問題ではない。

彼女はその容姿もさることながら、人としての格が違う。

『成績優秀』『スポーツ万能』『容姿端麗』という特性を当たり前のように持ち、誰に対しても気さくに接し、誰かを下に見たりなどもちろんしない。

テストを受ければ校内ではぶっちぎりのトップ。全国を対象とした順位でも上位に入っているらしい。

スポーツの大会、残念ながら僕は彼女が何のスポーツをしているのかを知らないけれど——知りたいとも思わない——トップクラスの

選手だそうだ。

そんな彼女は当然のように駒木高校の生徒会長を一年から勤めており、今年も続投している。

彼女に勝てる者などいないのだから、今年は立候補者すら出てこなかったというのも必然だろう。

そんな彼女、天童寺撫子はその性格の良さからか僕にも平然と話しかけてくる。

あからさまに周りに対して嫌悪感を振り撒いている僕にだ。

そして僕は彼女の事が嫌いだ。

「……おはようございます」

「優真君、もう少し碎けても良いんじゃないかい？　せっかくクラスメートになれたのだし」

「……そうですね」

一応挨拶は返すものの、すぐに会話は終わらせて自分の席へと移動する。

時間は午前八時前。登校している生徒は精々僕と、この完璧生徒會長ぐらいだ。

「そうだね。いつも言っていることだけど、まずはその敬語をやめてみよう。そうすれば私たちはもっと仲良くなれる」

僕が彼女を嫌う理由は色々ある。

基本的に『生理的に合わない』なんて幼稚な理由を挙げる気はない僕だけど、彼女が嫌いな一番の理由はまさにそれだった。

彼女には、恐怖の念を拭いきれない。

「優真君、今日は一段と連れられないね。まるで今朝、何かのトラブルに会ったみたいだ。そうだね、女の子でも倒れていたのかい？」

「……いえ。そんな愉快な事は何一つ起きてませんよ」

咄嗟に嘘をつく。

が、彼女の崩れることのない笑顔には全てを見透かされているように感じる。

そう、彼女は気持ちの悪いくらいこちらの心を読んできくるのだ。

いや、実際には思ったことを口に出しているだけかもしれない。たまたま、偶然当たっているだけなのかもしれない。

しかし僕にその真実を知る術はない。

そしてたとえそれが偶然なのだとしても、外した事がないのなら、それはもう言い当てていると言って、心を読んでいると言っているだろう。

そんな彼女が、何故僕に話しかけてくるのか。
理由は簡単。彼女にもそうするだけの目的があるからだ。

「それで、生徒会入りの話は考えてくれたかい？」

「……何度もお断りしているはずです。僕は何かに属する気はありません。いい加減に諦めてください」

これが彼女の理由。僕の生徒会への勧誘だ。

三日に一度は返事を聞いてくる。正直うんざりだ。

自分で言うことじゃないけど、僕はただの凡人だ。成績だって悪くはないものの、完璧な生徒会長から見ればそこらの一般の生徒と何ら大差ない。

本当に、僕に何を期待しているのやら……。

彼女が声をかければ誰でも協力してもらえるだろうに。
わざわざ僕に目をつける意味が分からないし、ここまでしつこいと何か意図があるとしたか、裏があるとしたか思いようがない。

「君もなかなか頑固な人間だね。尤も、そういうところも含めて評価してるんだけど」

彼女はそう言って笑う。

まあもともとが笑っている人だから、特別何かが変わったわけではないんだけど。

この彼女との不毛な、そして非生産的な会話は二年に進級してから
の一種の行事みたいになっている。僕としてはさっさと止めてしま
いたいところなんだけど、僕は話しかけられてそれを無視し続ける
といった強い精神力があるわけでもなく、ずるずるとこの行事は続
いている。

いや、行事というよりはむしろ精神力のトレーニングと言ってもい
いのかもしれない。もしくは拷問だ。
うん、こっちの方がしつくりとくる。特に拷問の方が。

……こんな事を考えているにもかかわらず、その拷問を受け続けて
いる僕もどうかと思うけど。

そこは諦めよう。相手は無敵で完璧で最強の生徒会長だ。

もし無視なんてしようものなら、彼女のファンに——つまりは全校
生徒だ——何かされそうだ。

それこそ校舎裏や屋上に呼び出されて……。

馬鹿馬鹿しい。

他人を理由にするなんて、酷く滑稽だ。自分でも分かってる。

僕は多分、彼女と話をしたただけなのだ。誰かと繋がりをもちたい
と思っているだけなのだ。

だって人は、誰かと完全に無関係でなんていられないのだから。

今日は本格的に頭がおかしいみたいだ。この僕が感傷に浸っているだなんて。

しかも他人との会話中に。

最早滑稽を超えて不様だとも思う。

何が面白くて僕はこんな訳の分からない事を考えているんだ？

確かに毎日、授業を受けながらも大抵は頭の中で別の事を考えている。

昨日は何を考えていたんだっけ……そうだ、人生における高校三年間という時間の大切さ、そして必要性についてだ。

我ながら頭の悪い、ただのひねくれた人間だと思うよ。でも今日よりは何倍もましなはずだ。

もうどうしたというんだ。僕はこんなキャラじゃないだろ。

僕が何かをしたのか？

一体何が原因なんだ？

「……馬鹿馬鹿しい」

理由なんて決まっている。今朝の彼女だ。

名前も顔も知らない、ただぶつかったというだけという、とても細くて弱々しい繋がりがりしかない彼女。

簡単すぎる自問自答に、思わず僕は声を出してしまっていた。

完全無欠——なんか言い方が変わってしまった気もするけど、彼女ならどんな言葉でも名前負けする事はないから別に構わない——の生徒会長の目の前で。

「『馬鹿馬鹿しい』。優真君はその言葉が好きだよね？　いつも決まって口にする。私から見れば、それは口癖じゃなくて、自分から可能性を消しにいっているように聞こえるけど、実際はどうなんだい？」

彼女が口にする疑問系は形こそ疑問系ではあるけれど、断言しているのと同じことだ。

思っている事を完璧に言われてしまうのだから。

「……口癖だと思いますよ」

「ふうん。まっ、優真君がそう言うならそうなんだろうけど、あまりいい言葉じゃないから治した方が良くないんじゃないかい？」

「……忠告、ありがとうございます」

そんなんじゃないさ。と、否定こそするものの彼女が前言を撤回することは無い。

自分の中で答えは既に出している、といった感じだ。

「……………」

「うん？ どうしたんだい優真君」

僕は彼女をじっと見つめる。

もしかしたら心で会話が出来るかもしれないと、そんな淡い幻想を抱いたのだ。

こんにちは。

心の中で呟いてみるも彼女からの返事はなし。

ただ無言の時間が過ぎていく。そういえば、こうして彼女と向き合ったのは初めてかもしれない。

「……………」

「……………」

二人ともが無言になる。まあ当たり前だよな。心を読める奴なんているわけがない。そんな奴は超能力者だ。

さて、実験も終わりにしようか。僕にしては最上級に無意味な時間の過ごし方だったけど、彼女が超能力者じゃないと分かったただけ良しと……。

「優真君、私は超能力者じゃないからね。人の心を読むなんて、ま

してや会話なんて出来やしないよ？」

出来てるじゃねえか。

と、彼女とそこまで話していると案外時間が経っていたようで、生徒が廊下を歩く音が聞こえてきた。そろそろ普通の生徒が登校してくる時間だ。そして僕の嫌いな日常が始まる。

彼女、天童寺撫子との会話もここまで。

僕が完全に沈黙すると彼女も何も言わなくなる。そうじゃなくてもすぐに彼女の周りには人ばかりが出来てしまうはずだ。

彼女はそれほどまでに輝いている。

別に羨ましいとは思わないけどね。これは強がりではなく本音。彼女は凄い人なのかもしれないが、周りが屑すぎる。

そんな取り巻きはいらない。

「優真君、そんなことをずっと続けていても何も変わりはないよ？ 生まれるのは不定調和、育まれるのは更なる確執だ。そんなのあまりにも寂しいものだよ。人は一人で生きていこうとすることは

出来るけれど、それは誰とも関わらないってわけじゃない」

「御高説ありがとうございます。それから、筋違いの同情で生徒会に誘っているのなら、尚更お断りさせていただきます」

僕は彼女の話が終わる前に教室を出た。

不定調和。確執。だったらどうしたというんだ。

そんな事、わざわざ指摘されるまでもない。自分で分かっている事だ。

だから何も動揺する必要なんてないはずなんだ。

こんなにも、胸がざわつく必要なんてないはずなんだ。

今日はもう早退してしまおうか。

授業を聞いている意味はないし、五月蠅い同級生に囲まれるだけだ。僕の席は一番後ろに位置しているから、正確には囲まれてはいないんだけど。教室という檻に入られている気分だ。

そんな事を考えながら、初めから用のなかったトイレを後にして教室へと戻る。

嫌がおうにも目に入ってくる人だかりの間を抜け、彼女を一瞥することなく席に着く。

授業開始時刻まであと少し。そうすればこの喧騒は二年二組だけの面子で再現されるわけだから、静かで穏やかなものは全く期待できない。

これが僕の日常。こんな事で、はたして生きていることに意味なんであるのだろうか。そうだ、今日の議題はこれでいこう。答えが出

るとは思わなければならない……。いや、案外五分くらいで結論まで辿り着けるかもしれない。結論に辿り着いたところで何も変わりはないけれど、授業を聞くよりは余程有意義な時間が過ごせるはずだ。

人生について、考えなくてもいいことに意味をつけたがる。実に僕らしく、不様なものだ。

さて、今日も無意味で無価値な日常を始めよう。

というものの、学校生活を語る気はあまりない。

こんな所での活動報告を聞いて面白味を見出させる人は、聖人君子か馬鹿だけだと僕は思う。

世界をこの目で見たことがない僕に、『世界には聖人君子などいない』という可能性を排除していい権利はないため一応付け足しておく。圧倒的に馬鹿が多いのは確かなんだけどな。

そもそも、この下らない世界の中に聖人君子なんているのだろうか。残念ながら十年ちょっとしか生きていない僕だけど、それなりに世の中の事は分かっているつもりだ。

と、言うよりは今の駒木高校を見ていれば分かることだ。

腐ったような人間を教育したのは、やはり腐ったような人間だろう。

そんな事は考えなくても分かることだ。そう考えれば、日本中にいる人間に同じことが言えるんじゃないだろうか。

今の日本を見ても、それはよく分かる。

内閣の支持率なんて落ちるばかり。何かとつけて色々な問題がメディアに取り上げられる。まあ少し尾ひれがついていたりするし、国民も過剰に反応し過ぎているとも思うけど。

日本でそんな状況なら、一体世界ではどうだというのだ。世界各国でも同じような状況なのだとしたら、やっぱり聖人君子はいないことになる。

だいたい何をもって聖人君子とするのかもあやふやだ。これといって明確な基準もないし、それにああいうものは自分で名乗るものじゃなくて他人から言われるものだ。

ということはやはりいないという結論に至る。

うーん。

なかなかどうして難しい問題だ。

例えば天童寺撫子。

彼女は完璧だ。完全で出来上がってるといっても過言ではない。

人間性を見ても、僕が見てきたどの人間と比べても一番出来上がっている。

けど、彼女は聖人君子ではないと思う。

彼女は笑顔を周りに振り撒いて、周りを笑顔にしている。でもそれだけだ。それ以上でもそれ以下でもない。

まあ他の人からすればどうかは知らないし、彼女の裏側には全く興味が無いから、何をしているのかも知らないけれど。

閑話休題。

えっと、何の話をしてたっけ。

……そうだ。学校の話は面白くないという話だったはずだ。

あの場所の話は本当に面白くない。

大して何か変わった事が起こったわけでもない。いつもと同じ意味のない日々を過ごしていた。

強いて言えば、授業中に今日の議題を解決できた事ぐらいだろうか。

『自分が生きている意味』

五分で結論に至るかと思ったけど、結局無理だった。

平均寿命も延びてきて、男性は女性より低いらしいけど八十年くらいは生きることが出来る。その総まとめをしようって言うんだから当たり前だ。

結論への過程として人間、そして生物の生きる意味として考えた時、やはり一番最初に思ったことは種としての生存、そして繁栄だ。

そう考えた時に、僕はどうかと一考すると恐らく種の繁栄は難しい問題だ。

僕が誰かと仲睦まじく生活している未来など、想像するだけで胸焼けどころか吐き気がする。

そんな僕が種を残すことが出来るのか。答えは否だ。

結局至った結果として、僕の生きている意味は半分はないってことになってしまった。

少しだけ自己嫌悪。まあ気にしていないけど。

生きている意味が半分なくなってしまったからといって、自殺しようという気はない。だって死ぬのは怖いから。
誰だって痛いのは嫌なもんだ。

閑話休題。

学校の話だった。何故だろう、脱線が多くなってしまふ。
まあどうでもいいか。

もういいだろう。学校の事は別にいい。

学校も終わったわけだし、その話題には触れたくない。

朝と同じ道を歩いて帰宅する。

朝には朝日があるけれど、夕方には夕日がある。僕はその日を浴びるのは好きだ。でも僕と同じ帰宅部である人間は多い。そのせいで、帰宅路には必然的に生徒が歩いている。

それについて考えることは色々あるけれど、仕様がなない。

朝の彼女の言葉を借りるのならば、『誰とも関わらないってわけじゃない』だろう。

約二十分。学校からの道を歩き、家に着く。

「ただいま」

扉を開け、返事が返ってこない事は理解していたけれど、形だけの挨拶をする。

僕は独り暮らしをしている。

別に両親がいないわけではない。生活費は毎月しつかりと振り込まれているから、一応元気でやってるのだと思う。もう一年以上連絡を取っていないから、本当に元気かどうか知らないけど。

中学までは両親と一緒に暮らしていたけど、その時から親に疎まれていたと思う。僕みたいなひねくれた人間が初めの子供だったからか兄弟はいない。

両親からすれば、義務教育を終えて少なからず解放された気分なのだろう。僕が提案した独り暮らしも簡単に了承していたし。

ひょっとしてひょっとしたら、僕が大学生になる頃には弟か妹が出来てるかもしれない。

馬鹿馬鹿しい。

今さら弟、妹が増える可能性が出来たからといってなんだ。僕が生命の誕生に感動するとても？

生憎だが、そんな心優しい感性は持ち合わせていない。

まだ見ぬ、というより可能性の存在でしかない新たな家族の事はまた今度考えるとして、とりあえず夕食の準備に取りかかるとしよう。
今日は何を食べようか。

「……迂闊だった」

冷蔵庫の中には何もなかった。そういえば、今日の弁当もギリギリだったわけ。

完全に忘れてた。学校帰りにスーパーにでも寄ろうと思っていたのに。

どうしよう……。

ご飯はあるけれど、それだけじゃなんか寂しいな。せめて卵があればどうにかなったのに。

って面倒臭いけど、朝と昼のご飯をを犠牲にしてまで楽をしたいとは思わないよな。

馬鹿馬鹿しい。

こんな事を考えている暇があったらさっさと行くべきだ。夕方の主婦をなめていると、行ったはいいけどおかずがない、なんて事が本当に起こりかねない。

特に服を着替えるでもなく、制服のまま財布だけを持って家を出る。今日は西日がやけに強い。思わず手で顔に当たっている光を防ぐ。

「今日は……」

僕は独り言を呟きながら適当に歩き出す。

こんな毎日にずっと絶望していて、今でもそう思っている僕だけど、いつか何かが変わる時があるのだろうか。

彼女の言葉がふと頭をよぎる。

馬鹿馬鹿しい。

変わる気もないくせに、こんな事を考えるなんて……。
本当に今日の僕はどうかしている。

それでも僕は、こんな日々がずっと続くと思っていた。

『絶対』なんてものが簡単に崩れ去ることくらい分かっていたのに、これから何かが起こるなんて思いもしなかった。

幸せな日常（後書き）

さて、ようやく更新できました。ページ数が少なくてすみません。

物語も順調に進んでいくと思うんで、これからよろしくお願いします。

感想やアドバイス、その他もろもろ何でも良いんで貰えると嬉しいです。

初めの一歩

西日が強いと感じていた僕だけど、太陽の偉大さを改めて痛感した。何故なら、急に雲行きが怪しくなり完全に太陽の光が遮られてしまったからだ。風も少し強く感じ、先程までの暖かさ、もとい暑さはどこかへ消えてしまっていた。

おかしいな。

『今日の天気は全国的に晴れ。雨の心配は全くありません』

なんて言うから、アナウンサーさんを全面的に信用し、傘は持ってきていないというのに。

天気予報は、あくまで大気の流れを予想しているだけなんだから外れる時があるかもしれないけれど、こんなんじゃないからテレビとの付き合い方を考えなくちゃならない。

なんて信用のならないんだ。

こんな世の中だから、僕のような人間不信が増えてしまうんだということを彼らは自覚した方がいい。

まあ、全部嘘なんだけど。

うん、ありえないよね。少し想像してみたけれど、急に天気が崩れるという状況に陥ることは難しいみたいだ。

この地域には大して高い山もないし、もともと無理な話だ。

それに僕は、どんだけ晴れていたとしても鞆の中には折りたたみ傘が入っているから安心だ。

アナウンサーを信用したことなんて一度もない。

……今はその鞆を持っていないから、結局忘れたことと同じなんだけど。

そこはもう、開き直るしかないだろう。

仕方がない事もある。

夕方のセールを勝ち抜くためには――僕が特別節約家というわけじゃないんだけど、この時間はなぜかスーパー内はごった返している

——余計な荷物を持つわけにはいかないんだ。

ぶつかる回数は増えてしまうし、なにより鞆が邪魔で前に進めない。

この時間帯の主婦は目が血走っている。

そんなに安く買いたいなら、自家栽培すればいいのに。なんて思ったりもするけど……。

僕が言いたいことは一つだけ。

『他人の邪魔をするな』

結局、人間は群れを成さないと生存できない生物なんだから手を取り合うべきだ。

たかが十円安い野菜のためにいがみ合うなんて馬鹿みたいじゃないか。

まあそういう僕は、その十円安い野菜に手を伸ばすんだけどね。

だって安いし。

仕送りだってそんなに多いわけじゃないから、節約出来るなら少しでもしないと。

そうして僕が今日手に入れることの出来たセールス品は、一パック五十円の卵。そして、二袋で百円のウィンナーだ。

まあ野菜類が何一つ手に入れることは出来なかったけど、卵を買えるんだから良いだろう。

さてと、買い物もそろそろ終えて帰らないと。

僕の目的はあくまで食事をすることであり、買い物をするのではない。

目的と手段がごっちゃになっては駄目だ。

それから一通り店内を回り、僕が通ることを待っていたかのように差し出された、焼いたハムの試食を食べた。

「うわー。美味しいな」

もう一周し、にこやかな店員さんに差し出された、目の前で焼いてくれているハムを食べた。

「このハム、凄く美味しいですねー」

最後にもう一度だけ店内を回り、丁度僕が通った時に焼き上がった試食のハムを『仕方がなく』食べた後、会計を済ませて店を出る。

「ありがとうございます」

ちなみに、このレジ袋の中には試食で食べたハムは入っていない。

味がイマイチだった。というより、普通過ぎたせいだ。

せめてタレがあれば一緒に買ったかもしれないけど、ただ焼いてあるだけのハムを食べて評価出来る程、僕の舌は肥えていない

というか、僕が焼いても同じように焼けると思う。

そういうのを売りにしていたのかもしれないけれど、僕に言わせればそれは間違っている。

『この値段でも、工夫をすればこんなに美味しくなるんだぞ』と、味と値段のギャップを狙うべきだ。

それなら、その工夫の仕方を真似するために本来なら余分な物まで売ることが出来る。

サクラを使えばフライパンだって売れるんじゃないか？

片方は適当に焼いておいて、もう片方は美味しく焼く。

うん。なかなかいい経営戦略だ。

ハムよりフライパンの方が単価も高いし、利益に結び付くだろう。

まあ二回目は流石にあからさま過ぎたかもしれないけど、これも嘘だ。

卵とウィンナーは本当に手に入れたけど。

何度も言ってるけど——もしかしたら一度も言ったことはないかもしれないけど、今言うから許してほしい——僕はそんなに強い人間じゃない。

試食を三回も食べて――わざわざ一回食べる毎に店内を一周した――その商品を買わない、なんて事が出来る程図太い神経はしていない。

しかし、店員さんが笑っていたのも二回目までだったな。

最後は頬が引き攣っていたし。

もしかしたら全部食べられるとでも思ったのだろうか？

一応『僕、初めて食べてます』みたいな態度は取ってたつもりなんだけど。

同じ人間が三回も来れば、流石の僕でも覚えるしね。店員さんに顔を覚えられたのは必然だろう。

うん。反省だ。

今回はちよつと失敗。

でも少し楽しくて美味しい食事が出来るんだから、この失敗も無くしてしまっただけいいだろう。

だいたい、大きい豆ぐらいのサイズに切り分けられたハムを食べて味が分かるわけがない。

やっぱり肉類はしっかり食べないと。

それはそうと、このハムを買ってしまった事で、僅かながらに、と
いうか完全にウィンナーの存在価値が無くなってしまった。

どうせ両方豚肉だろうし……。

まあ、牛肉だろうと鶏肉だろうと同じ事を言うけれど。

……これは難しいな。

いや、使用方法はいくらでもある。

明日の朝も昼も食べなきゃいけないし、使う事自体には問題にならない。

ただ、どちらを今日の夕食として食べるかだ。

別に買ったものは他にもあるわけだから、そちらを食べて両方食べ
ないっていう選択肢もあるんだけど……。

これは却下だよね。

折角、主婦の間をすり抜けて、そして店員さんを困らせながら手に入れたウィンナーとハムだ。

どちらかは夕食として食べるのが筋だろう。

今日の夕食に使おうと必死だった主婦や、ハムを宣伝しようとしていた店員さんに失礼だ。

なんて、今思いついたばかりの真面目っぽい言葉を言ってみたりして。

ふう。まあその辺りは家に帰ってから考えるとしよう。

って、今日の僕は本当に何をしているんだ？

意味もなく嘘をついたり、試食を三回も食べたり、揚げ句の果てには会計を済ませているにもかかわらず、袋を持ったままお菓子売場を眺めているなんて。

頭がおかしくなってしまったのだろうか？

この状態だと、どんな奇行に走るか分かったもんじゃない。

自分の事ながら、想像すると気持ち悪くなってきた。

馬鹿馬鹿しい。

こんな所とはさっさとおさらばするべきだ。

家で何かをしている方が、余程時間の有効活用と言えるだろう。

「……………」

そう思い、僕は足早に店内を後にする。

けど、僕の決意はすぐに崩れ去り、思わず僕は絶句してしまう。

でもそれは、少し周りを見て考えてみれば分かることだったんだ。

例えば、今日はやけにスーパー内の客が多い事。

例えば、その客達が諦めたような苦笑いを浮かべている事。

例えば、梅雨でもないのになぜか雨具が売り切れていた事。

外は嵐のように雨が降っていた。

風も強く、そのせいでただの強い雨ではなく横殴りの雨となっている。

あー。

とても複雑な気分だ。

どうしてこんな事になってしまったらう。

神様の存在、なんてあやふやなものは信じていない僕だけど、今なら少しはその存在を認知出来るんじゃないだろうかと思ってしまう。

風神、雷神、出てこい！！

ちょっと待てよ。呼ぶ相手は合ってるのか？

風神は風って字が入ってるからいいとして、雷神って雨を降らせる事が出来るのか？

まあ雷の字が入ってるから出来そうだけど、なんで雨神じゃないんだろう。

そもそも、この二つは神様なのか？

八百万の神。なんてものが日本にはあるみたいだし、天候の神様もいるんだろうけど、生憎僕はそっち方面の知識は詳しく知らない。

まあ『それじゃあ何を知ってるんだ？』と問われても、何も知らないと答えるしかないんだけど。

閑話休題。

僕は、なんて意味のないことをしているんだろう。

存在自体があやしい神様の事を雨に濡れながら考えているなんて。

馬鹿馬鹿しい。

さっさと店内に戻る。

でも、これからどうしよう。

店内に戻ったはいいけど、何か考えがあるわけじゃない。
ただの雨宿りだ。

店内を再び一周するも——もちろん精肉コーナーでは、ハムの試食
を頂いた——雨具に代わりそうなものは何もない。

ビニール袋を被って帰るのは嫌だな……。
そんな事をするくらいなら、いっそ天然のシャワーを浴びた方がマ
シだ。

あまりにも格好悪い。

こんな事なら、ちゃんと鞆を持ってくるべきだった。

得意げに節約について語っていた自分が恥ずかしい。

はあ……。。

雨という天気が比較的好きな僕だけど、ここまでくるとさすがに嫌
いになりそうだ。

とりあえず閉店時間までは粘ってみよう。
夕食の時間かなり遅くなってしまうけど、それは仕方がない。

普段着なら雨なんて気にせず帰るところなんだけど、残念ながら今の僕は制服だ。

明日も学校があるため、極力濡らしたくない。

さっき少し濡らしちゃったけど。

でもあの時濡らしてしまったこの制服は、店内の空調によって見事に乾いている。

だから今となっては問題ない。

ズボンもカッターシャツも代わりはある。今日濡らしてしまったも、明日学校に行くのに困ることはない。

でもブレザーとネクタイは一着ずつしか持っていないんだよねー。

いや、ネクタイの数え方は一本だったっけ？

まあそれは置いておくとして。

問題はこの二つだ。

どうしよう。時間を潰してはいるものの、雨が止む気配は全くない。というか、更に強くなっているような気がする。

もうすぐ夜の八時。閉店時間も目前だ。

店内に残っていた客も随分と減っている。皆、知り合いに連絡して何かしらの対策を取ったんだろう。

しかし残念なことに、僕は携帯電話を持っていない。かける相手もないのだから当たり前だ。

仮に持っている姿を想像しても、その携帯電話のアドレス帳には両親の番号が登録されているだけだろう。

合計で二件。

携帯電話が一体どれだけの件数を登録できるかは知らないけど、これで一杯になってしまうほど機能は低くないはずだ。

それに、両親にかけるなら家の電話で事足りる。実際、一年間離れて暮らしたけれど、電話がかかってきた事はなかったし。

なら、やっぱり必要がない。

必要ないなら、そんなものは持たない。

閑話休題。

僕に真剣さがないから駄目なのだろうか？

もつと他に考えることがあるだろうと、神様は言いたいのだろうか？

まあ確かに、携帯電話を持つことの必要性なんてももの、語られたところでは何の役にも立たないし。

本当にどうしよう。

と、視線を落としたところで、ふと自分の買った食材が目に残った。

いや、実際にはそれらを入れている袋だ。

「あー。僕って頭悪いなあ」

言いたくない事だけど、思わず言葉が口から出てしまっていた。

そうだ。袋に入れば良いんじゃないか。そうすれば、少し荷物は多くなってしまうけどブレザーとネクタイは濡れずに済む。

僕自信は濡れても平気なわけだし、これで万事解決だ。

ビニール袋だし、三重くらいにすれば雨が入ってくる事はないだろう。

だけど、人生は手遅れであることが多いことを思い知る。
僕はこの結論に至るまでに、時間をかけ過ぎてしまったんだ。

「申し訳ございません。大きいサイズの袋は無くなってしまいました
て……」

ブレザーを入れる袋がなかった。
結局、行き着くところは皆同じというわけだ。

これで僕の道は絶たれてしまった。

はあ。袋の在庫が無くなるなんて、運がない。

これなら漫画雑誌を読む前に荷物を見ればよかった。
そうすれば、一枚ぐらいは手に入れることが出来たかもしれ
ないに……。

文句を言っても良さそうな状況だとは思うけど、言ったところで袋
が貰えるわけじゃない。

無難に「そうですか」と一言だけ返して、店から出た。

雨が止んでいたからじゃない。店にいる意味がないからだ。

もうブレザーやネクタイなんてどうでもいいや。

こんな馬鹿馬鹿しい事で悩んでいたなんて、自分に対して怒りが込み上げてくる。

ドライヤーでも使って乾かせばいいだけじゃないか。

あのスーパーに二時間近くいたけれど、やったことといえば漫画雑誌を読んだ事と、ハムを食べた事ぐらいだ。

もしかしたら、僕はもう試食を食べさせてもらえないかもしれないな。

店員さんの表情が「またか……」から「食わしてやるから早く帰れ」みたいに変わっていったし。

それにしても、雨に濡れるという行為は案外気持ちがいい。

雨の度にこうしようとは思わないけど、今日ぐらいは許してもいいと思えてくる。

それにしても静かだな。

そんな暢気な事を考えながら、雨の音しかない中を僕は歩く。

雨が世界の全てを支配しているようにも感じる。

その厚い雲のせいか普段の夜よりも暗く、そして重い。

「……遠いなあ」

走る気にはならないし歩いているけど、家にはもう少しかかりそう
だ。

しかし本当に静か過ぎないか？

外を歩いている人がいないことは理解できる。僕もこんな天気には
外を歩く気にはならない。

しかし、それにしても音が雨で消されすぎだ。

全くといっていい程、人の気配がない。

今日の僕は少しおかしいところがあるから、きっとそのせいだろう。

そう思った矢先、一人の男性が立っていた。

その男性との間に距離はある。目算でしかないけれど、およそ五十メートルといったところだろう。

そんなに離れているにもかかわらず、僕はその姿をはっきりと捉えることが出来た。

けど、それだけだった。

闇に輝く金の髪を目にしたその瞬間、既に僕の左腕は失われていた。

初めの一歩（後書き）

三連休の中で更新出来て良かったです。

後書きって何を書けばいいんですかね？

あんまりよく分からないです……。

さて、本編の方ですが……。
相変わらず文才がなくてすみません。

話にセンスが感じられませんが、頑張って成長していきますんでよろしく願います。

時間的にもあまり進んでいない本編ですが、次は結構早く進んでいく気がします。

……何となくですが。

まあ無理せず頑張りたいと思います。

意味

「はぁ……はぁ……」

僕は走る。

息を切らしながら、雨の中を走る。

左腕を失い、大量に出血しながら走る。

どうしてこんな事になってしまったのだろう。

僕には何一つ分かることがなかったけれど、それでも僕は走っていた。

「貴様、俺から逃げられるとも思っているのか？ さっさと答えろ」

走っている僕の目の前に、先程の男性が突如現れる。

一体どういう事なんだ？

彼からは反対方向——それに加えて角は幾つも曲がっていた——に走っていたはずなのに。

それにさっきから色々と聞かれているけど、僕には身に覚えのない

ものばかりだ。

こんな事を考えながら、それでいて体は必死に走っている。

腕を失った瞬間、僕は痛みを感じなかった。

あまりにも突然の出来事で、脳が反応しきれなかったんだろう。

世の中には、熱くないストーブに触って火傷をする人もいるみたいだし、その逆の事が起こったとしてもおかしい事じゃない。

というか、自分が案外冷静であることに驚きを隠せない。

うろたえる事なく、咄嗟に走り出すことも出来ているし、僕は思っていたよりも凄い人間なのかもしれない。

なんて、馬鹿馬鹿しい。

勘違いもいいとこだ。

まあ余計な事を考えるのは止めておこう。

余計に頭がふらつく。

足元が覚束ない。

今にも意識が飛んでしまいそうだけど、奴何せん傷の痛みが酷すぎて、気を失う事はないみたいだ。

激痛ってこういうものの事を言うんだな、と初めて理解した。

余計な事は考えずに、彼の言っていたことを思い出すべきだ。もしかしたら、命だけは助けてくれるかもしれない。

こんな状況で生きる事が出来るかも、なんていよいよ僕も馬鹿になっってしまったようだけど。

この傷で、この出血量で、生き残るわけがない。

ああそうか。この血を目印に追われているのか。

いくら雨で流れていくといっても、流れるだけで消えるわけじゃない。

元を辿れば僕に行き着くわけだし、こんな小さな町の中じゃ先回りされてもおかしくない。

参ったなあ。これじゃあ逃げ道がない。家に逃げ込んだところで結果は同じだし……。

呑気な言葉に聞こえるかもしれないから一応言っておくと、僕は本当に焦っている。

それこそ今まで生きてきた中で、これ以上の事はないと言っているほど。

さて、考えを戻さないと。

確か彼は「今を見たのか？」と聞いてきた。

ということは僕が何かを見ている可能性があるわけだ。それもこの雨の中ではっきりと見える事なのだろう。

一体なんだろう。

見たって言うからには、何かしら形のあるものだろう。何かの物だったり、或は行動だったり。

うん、妥当なところだな。

でも僕は本当に何も見てないし……。

雨で前髪が張り付いて、ちょっと気持ち悪いなーとか考えながら歩いていただけなのに。

僕が唯一、彼の何かを見たという自覚があるものは一つだけある。彼の髪だ。地毛なのか、染めているのかは判断できないけど、彼の髪は金色だった。

この曇天の中でも輝きを放ち煌めくその髪は、誰であろうと見入っ
てしまい、魅了されてしまうだろう。

しかし髪の毛を見られたからといって、いきなり襲い掛かってくる
だろうか。

ちらっとしか見えていないけど、彼の黒いコートにはフードは付い
ていなかったし、帽子を手に持っていた様子もない。

もしかしたら隠す気はあるけれど、隠し方というものを知らないの
かもしれない。

だって相手は……うん、認めたくないけど認めよう。

彼は人じゃない。確実に化物だ。

だいたい五十メートルもの距離を一瞬で詰め寄れる人間がいるなら、ボルトさんもびっくりだろう。

驚きを超えて、陸上を辞めてしまうかもしれない。

この世にそんなものはいないと断言して、またそういったものを信仰している人間を馬鹿にしていた僕だけど、これからは考えを改めないと。

だってこの目で見てしまったから。

この傷がその証明だから。

「鬼ごっこは鬼とするもの……。ふんっ、屑にしては面白い事を考える」

後ろから声が聞こえてくる。

決して大きな声ではないのに、耳元で話されているみたいだ。

もちろん、すぐに捕まった。

清々しいまでに弱いな、僕。

声が聞こえたと思ったら、既に片手で持ち上げられていた。

その手は今にも握り潰すといった雰囲気の力強さを感じ、それで首を持たれているから全然息が出来ない。

「さっさと答えろ屑が。見たのか？ 見てないのか？」

「何の……事を言って、るんですか？」

息がしづらいから、当然声も出しにくい。

途切れ途切れに言葉を発しながら、初めて僕は彼と目を合わせた。

赤い瞳。ちよつと格好よく言うのと朱色。もうちよつと格好よく言う
と紅だ。

正直、この三つの色の違いは僕には分からない。

そういえばこの間本屋さんに寄った時に、『色彩検定』なる不思議
な検定のためのテキストを見付けた。

その資格を取れば、或はこの三つの、否、一つの色のようにしか感
じられない言葉も使い分けられるのだろうか。

この話も、とりあえず生き残れたらじっくりと考えよう。

今は色よりも考えることがある。

初め、僕はこの男性は怒っているのだと思った。

でもすぐに訂正。

彼は化物、つまり僕を食らおうとしているのだ。と思った。

で、または訂正。

彼の目を見て初めて分かった。

彼は何も思っていない。

まあ実際はどうか分からないし、質問をしてきた時点で何か思うことはあったと思うけど、今はそんな話をしているんじゃない。

彼は僕の事をどうとも思っていなかった。

例えば、僕たちが知らないうちに蟻を踏み潰してしまう。

それを批難されたとしても、僕たちは蟻に対して悪いと思うかもしれないが、ただそれだけなのと同じだ。

彼は命を奪うことに対して何も思っていない。

そんな冷たい目だ。

今の彼が重要視しているのは、僕が見た——かもしれない——『それ』だけなのだ。

尤も、『それ』が何を指しているのかは未だに分からないし、本当に髪の毛である可能性もある。

「本当の事を言え。今ならまだ、ただ殺すだけで許してやる」

「……………」

僕は何も言えなかった。

だって殺すって言われちゃったし。

彼の右手で、僕の幻想はぶち殺された。

……我ながら、悲しくなるほど面白くない。

まあ実際、彼の右手は僕の首を掴んでいて、本当にぶち殺されそう
なんだけれど。

「さっさとしろ」

「あゝあゝあ！！　ぐっ、うう……」

黙っていたら、右腕を握り潰された。

右腕がだらりと力無く垂れる。出血なんて生易しい表現じゃない。
もうぐっちやぐっちやだ。

左腕の事もあり、既に痛覚は麻痺していると思っていたけれど、そ
んな事はない。

めっちゃくちゃ痛い。

バキッって大きな音が鳴ってたし、骨もいかれたかも。いや、確実
にいかれている。

本当は叫びたいところだけど、声が出せないため、ただ肺の空気が出ていってしまっただけになり、余計に苦しさが増す。

頬を流れているものも、雨なのか、涙なのか分からない。

ただ僕は泣けるんだということが今分かった。

産まれた時には確実に泣いているだろうけど、あれはカウントしなくていいだろう。

「屑が、いい加減にしろ」

彼は軽く投げたつもりなのかもしれないけど、実際投げられた方はたまったものじゃない。

家の塀に激突した僕は――僕は武術等は一切やっていないので、受け身というものはとれない――そのまま落ちて、俯せに倒れる。

あれ？

右目が見えない。

きつと今ので塀の角にぶつけてしまったのだろう。

いや、左目は何とか見えているから、顔が少し横を向いているのか。

こんな状態になっても生きている僕って……。もしかして僕も化物だったりして。

馬鹿馬鹿しい考えは消し去ろう。
もうすぐ僕自身が消し去られてしまうのだから、こんな事を考えて死ぬのはあまりにも情けない。

「! !
……っ……」

声を出そうとしたけど無理だった。
口からは空気が出ていくだけで、音として認識出来るようなものじゃない。

それでも僕はそうせずにはいられなかった。

「やめてください!!」

微かに見えている左目に、僕とも、あの男性とも違う足が映ったからだ。

雨の音が大きくなってしまい聞き取りにくいけど、僕はこの声をどこかで聞いたことがある。

どこだったかな……。

そんなに昔じゃない気がするんだけど。

「何でこんな酷いことを! !」

「屑が、退け。邪魔だ」

男性と相対しているのは女性みたいだ。声が高いから恐らく間違いないだろう。

ああそうだ。今朝ぶつかった彼女だ。

あの女性の声に似ている気がする。

うん。一度思うと、そうとしか聞こえなくなった。

何故彼女がここにいるんだ。

なんて事は頭には浮かんでこない。今はそんな事よりも大切な事がある。

つまり、早くしないと彼女が殺されてしまうということだ。

彼女の姿は、裸足である足しか見えていないけれど、彼女がそこにいるという証明はそれで十分だった。

ただ、僕が動けない。声が出せない。彼女にそれを伝える手段がない。

彼女は助けに入ってくれたのかもしれないけど、これじゃあただの犬死にだ。

この行為に意味なんて全くない。
どころか、ここで短い人生を閉じてしまうことになる。

男性の目的はあくまで僕なんだから、彼女は見逃してもらえるかもしれない。

「もう一度だけ言うぞ、屑。そこをどけ」

「どきません!!」

やめてくれ。僕なんかのために、体を張る必要はないんだ。
僕なんかのために、命を使う必要はないんだ。

「求めるは刃、切り開くは未来への道」

彼女が何かを言っている気がする。けど今の僕の耳には入ってこない。
いい。

耳もやられてしまっていたのか。

本当に、自分が情けない。

弱いことではなく、他人を巻き込んでしまったことだ。

いつも考えていた。

他人に迷惑はかけない。そんな事をしなくても生きていける。

他人に迷惑しかかけていないクラスメートは馬鹿ばかりだと。

何の事はない。僕も彼等と同じ人間だったというわけだ。

あれだけ蔑んでいた者達と同じだなんて……。

正直、今日のどの出来事よりも驚きだ。

いや、本当は分かっていたんだ。

僕こそが一番最低なんだって。

これまでも、そしてこれから。

僕には影が、闇が、不格好が、不様が、滓が、屑が、とてもよくお似合いだ。

このまま死んでいくなれば、それもいいだろう。

『近所の高校に通う男子高校生、謎の変死体』

うん、なかなかいい見出しだ。

新聞の一面は僕一色！！

まあそんな事はないけど。

よく報道されて一週間だろうな。

確かに日本は平和だけど、事件が全く起こらないわけじゃない。どころか、一日たりともニュースが休みになったことがない。

意図的に誰かが事件を起こしたりして。なんて昔は考えた僕だけど、どちらにしろ証明のしようがなくて諦めた。

まさか出会った人、一人一人に『あなたは犯罪を計画していますか？』なんて聞くわけにもいかない。

本当に犯罪者に出会ってしまうのは避けたい。

ああ、雨が降っているにもかかわらず、なんだか温かくなってきた。神様は気前がいい。僕のような人間にも迎えは出してくれるみたいだ。

死ぬ直前には周りがスローモーションに見えたり、走馬灯が見えたりすると言うけれど、全く見えなかった。

人生最後に分かったことがこれだということはなかなか幸運な事じゃないだろうか？

世の中には生まれた直後に死んでしまう子供や、それを認識する間もなく殺されてしまう人は少なからずいるはずだ。

それに、老衰だと最悪寝てしまったまま……。なんて事が起こりかねない。

だとすれば、やはり僕は幸運な方だ。

走馬灯なんてものはない。と実体験として証明してしまったんだか

ら。

まあ、それを誰かに教えてあげることが出来ないけどね。

もしかしたら、歴史に残るような頭の良い人達も僕と同じ事を思ったのかもしれない。

死ぬと分かって新たな発明の案を思いついたとか、意識が無くなる寸前に数式が解けたとか。

馬鹿馬鹿しい。

だからどうしたというんだ。

そんなもの、死んでしまっただけは意味がないじゃないか。

もういいだろう、疲れた。

人生最後の言葉が『馬鹿馬鹿しい』だなんて、何となく僕の人生を物語っているような気がする。

そんな人生は別にいらないだろう。ちょうど今日、僕の生きる意味の半分はないという事が分かったわけだし。

自殺も嫌だったんだ。

凄い偶然なんだろうけど、僕の生きたであろうこれからの人生の運を全て合わせれば、これくらいはなんともないはずだ。

というか、お釣りがこないとしたらそれはそれで……。

「――!？」

なんだが耳元で叫ばれたような気がするけれど、気にしない。

もう雨の冷たさもないんだし、ゆっくりと……。

「しっかりしてください!!」

なんだろう。

僕が呼ばれているのか？

いや、それにしても妙に心地良いし、ここは死の世界だとばかり……。

「しっかりしてください!!」

何度もかけられているのであろう声に反応して目を開ける。

僕の視界は、女性の顔と、大きすぎる帽子の一部で全てだった。

右目が見えていない。

たぶん今は仰向けになっているだろうし、それでも見えないということ、やはり潰れてしまったのか。

まあここが死後の世界ではないとしても、もうすぐそちらに行くんだし問題はないだろう。

彼女の顔を見る。

ぼやけている僕の目には細かいところまでは見えない。

「……あ、の……」

「なんですか！？　どうかしたんですか！？」

よかった。声は出せるみたいだ。

彼女にも届いたらしく、大袈裟に聞き返してくる。

本当に意識が無くなってきた。言いたいことはさっさと言わないと。

「……僕を……ろして……さい」

「そんな……」

僕はちゃんと言えたのだろうか？

道でぶつかっただけの女性に、助けようと間に入ってくれた彼女に、

『殺してくれ』なんて言ってしまったけど、大丈夫だろうか？

ああもう駄目だ。

さよなら、世界の人々。

さよなら、僕の人生。

そしてありがとう、僕の人生。



『求めるは再生、導くは闇への扉――』

なんだろう。

どこから歌声が聞こえてくる。

とても綺麗な声で、とても綺麗なリズムを刻んでいる。

『求めるは癒し、償うは罪と罰――』

そういえば、僕はなんでこんなにもひねくれてしまったんだっけ？

そう、あれは確か小学生の時だったはず。

その頃の僕は、今とは違ってもっと純粹だった。

先生に言われたことはちゃんと守っていたし、両親とも一緒に遊んだりしていた。

だんだん思い出してきた。そういえば、その頃に僕の初めての議題が浮かんだんだ。

テーマは『人間の心はどこにあるのか？』だったと思う。

確か、ふとした拍子で人体の構造が描かれている本を読み、そこに心が描かれていなかった事が理由だった。

僕はずっと考えた。

両親や、学の生や、クラスで一番頭がいい子や、近所のおばさん達など、色々な人に聞いて回ったりしたけれど、それも納得のいく答えは得られなかった。

そこで止めておけばいいのに、僕はどうしても知りたかったのだろう。考えることをやめなかった。

そんな時だ。僕が友達の家遊びに行った時に一冊の漫画を読んだのは。

それには人体を構成している物質がつらつらと並べられていた。『水が何リットル』みたいな感じだ。

そして、それを読んだ時はそれが何か分からなかった。

まあまだ年齢が一桁だったし、頭が悪いことは許してほしい。

だから僕はそれらを調べた。

リンとはなんなのか。炭素とはなんなのか。など、小学生にしては頑張っていたと思う。

そして僕が一番の愚行は、それらを全て調べ終えた後、学校の夏休みの自由研究として先生に提出してしまった事だ。

その自由研究の途中の文章は忘れてしまった。でも最後の締めだけは覚えていた。

我ながら、良い出来だと喜んでいたし。

『求めるは契約、我が眷属として我に仕えよ――』

自由研究の最後の締めはこうだ。

「調べた結果、心というものはどこにもありませんでした。

でも僕には心があります。だからきつと、心は生きている人にあるものだと思います。

死んだ人は何も喋らないし、何も感じないので心はありません。魂も調べたけどなかったです」

僕的には最高の自由研究だと思っていた。

調べるのに時間がかかってしまったけど、人体を構成する物質について出来る限り細かく書いた気がする。

でも返ってきた先生からの評価は、はなまるどころか説教だった。その時の先生の言葉は覚えていないけど、凄く怒られたことだけは

記憶に残っている。

当然、親も呼び出された。

でも両親は僕を怒らないと思っていた。

自由研究を調べている時も、堂々と親の前で図鑑を見ていたし、難しい漢字や言葉は訳してもらっていたからだ。

それに僕がこの自由研究にどれだけの時間をかけていたか、それを分かってくれているし、褒められる事はあっても、叱られる事は無いと思ったんだ。

だけど、結果として父は自由研究を読んだ後、凄く怒った。

母は泣いていた。

担任の先生を加え、僕を怒る人が一人から三人に増えた。

父にはその場で自由研究を破かれた。

『求めるは誓い、共にある覚悟を胸に――』

その時に涙はなかった。

僕の夏休み前から続けていた努力は無くなったわけじゃない。

知識は頭の中に入っていたし、もう一度書けと言われれば何度でも書けた。

そう思うことも出来たし、悪いことをしたのだと謝ることも出来た

のに、僕はもう一つの道を選んでしまった。

「内容がいけなかったのかな？ それとも結論が間違っていたのかな？ 次はもっと頑張らなきゃ」

僕は、怒っている三人、特に両親に喜んでほしかった。

だからあまり、いや全く怒られた事は気にせずに色々なものを調べ
ては、自由研究として提出した。

色々調べたなあ。

戦争のニュースを聞けば、どうすれば効率よく人が殺せるのかを考
えたし、サスペンスのテレビを観れば、人間が無意識で認めている
死という事象を考えた。

調べていた事が、総じて人間の根本だったり死だったからなあ。

最初に『死人には心がない』って自分の中で定義してしまっていた
から、どうしても褒められることはなかったけど。

まあこんな事をする度に僕は怒られていたけれど、僕は何故怒られ
ているのかが分からなかった。

だって、先生達の口から出る言葉は「こんな事を考えるのはやめな
さい」や「命は大切なものなんです」といったものばかり。

じゃあ僕の疑問の答えは何なんだと聞きたい。

そんな事を繰り返して、ついには先生も親も何も言わなくなった。褒めてくれる事は疎か、怒る事もしなくなった。

それが小学五年生。

授業参観にも運動会にも来てくれなくなった。

そうして僕は、自分が異常なのだと察した。他人とは違う人間なのだと察した。

でもその時はまだ、周りとは違うって思うだけだった。

『我が命を感じよ、我が魂を感じよ――』

自分が決定的に落ちていると感じたのは、中学に入っすぐだ。今の僕はよく喋るようになった方で、純粋をちよつとだけ外れた当時の僕は無口だった。

だから虐められた。

靴隠しから始まり、クラス全員で無視など色々な事をやられた。

でも僕は毎日学校へ行った。
平気な顔をして、一切動じずに。

「弱いものを攻撃して優越に浸るのは人間としての本能だ。そうやって楽しいのは大人も同じ事なんだよ。君達の両親だって同じことをしていると思うよ？ 他人を蹴落とし、自分が成り上がる。そんな事はここだけの話じゃない、古今東西どこでも起きていることさ。だから、クラスなんていう小さな存在が僕を標的にしていることについては、特に何かを感じることはないよ」

中学一年生。小学校を卒業したばかりのクラスメートには、その言葉が余程心に刺さったのか、この言葉を言った次の日からクラス内は静かになった。

一気に全員がぎくしゃくした。

まあ、また怒られたんだけど。
そうして遅いながらも理解した。

僕は落ちた、そして今も落ちている人間なんだと
人間として、根本的に終わっている。

そう理解した時には、もう遅かった。

家族で何かをすることは無くなった。

炊事洗濯は自分でした。

保護者印はプリントを机の上に置いておくと、次の日には押されていた。

そして去年、家を出た。

僕の人生の回想、終わり。

語るのにかかる時間はアニメより短い。

さて、と。

BGM代わりの歌も終わりそうだし、僕の語りもここまでだ。

『我が刃となり敵を討て、我が盾となり主を守れ——』

急に身体が熱くなる。

太陽で身を焦がされているような外面的な熱さではなく、内側から焼かれている感じだ。

身体全体が焼けてしまいそうになり、それに堪えられなくなる。

「私があなたを許します」

堪えられなくなり、勢いよく起き上がる。

僕の目の前には見知らぬ天井、ではなく見知った女性の姿。

茶色い髪とその女性は、僕と目が合うや否や、大粒の涙を流していた。

意味（後書き）

斉梨優真。

彼にも純粋な子供時代というものはありました。

しかし純粋すぎるがゆえに、踏み込まなくともよかった部分に入り込んでしまいます。

それを自覚するのにはあまりにも時間がかかり過ぎてしまい、そのせいで色々なものを失います。

そんな彼が何を得ていくのか。

また、何を得るべきなのか。

そんなところを深く書ければと思います。

というわけで、4話です。

よく見直すと、人物描写等が少なくて泣きそうです。

更新速度に難ありな私ですが、これからよろしくお願いします。

真実の扉

「…………あのー」

「……………」

「もしもーし」

「……………」

全く返事が返ってこない。

こちらから話しかけているにもかかわらず、彼女はずっと背中をこちらに向けている。

背中で語るのは、テレビの中の親父さんだけにしてほしい。

『父親は背中で語る』なんて言葉をよく耳にするけれど、あれは嘘だ。

僕は昔、父親の後ろについて回ったことが事があるけれど、声どころか、音さえしない。

ほんとたまに聞こえてくるのは、骨のなる音だけだ。

それで何かを伝えていると言うのなら、骨の音専用の言語講座を開

いてほしい。

誰も来ないと思うけど、本当に理解する方法を見付けられたならば
凄い賞を貰えるだろう。

骨の音で意図的に何かを伝えている事が前提となる条件だけど。

まあこういう意味でないことは、今では理解しているから、可哀想
なものを見る目で僕を見ないでほしい。

閑話休題。

彼女がどうして僕に顔を向けてくれないのか。僕にはその心当たり
がある。

というか、それしかない。

時は数十分前。

僕と目が合った彼女は、涙を流しながら僕に抱きついてきた。

至近距離で、しかも凄い勢いで抱きついて来るもんだから避けるこ
となど出来るわけもなく大人しく抱きつかれ、そして彼女は僕に抱
き着いた状態のまま泣いていた。

失ったはずの左腕や、潰れていた右腕は見事に元通りになっていて、
僕としてはあの場にいた男性の事その後の事も含めて色々聞きたい

ところだったけど、とりあえず泣かせてあげた。

抱きつきながら泣いている女性を突き放せるほど、僕は非情な人間ではないつもりだ。

決して『役得』などとは思っていない。

服越しではあるものの、当たっている感触が柔らかいなあとか。

女の子って、男と違って本当に良い匂いがするんだなあとか。

そんな非常識でやらしいことは、何一つ考えていない！！

まあ実際柔らかいし、良い匂いがするんだけど……。

これは仕方がない。所謂、不可抗力というやつだ。

そういえばこの間、世の中には『巨乳派』『貧乳派』など、様々な派があることを知った。

なんだか色々サイトを飛び回っているうちに、変な掲示板に行き着いてしまったことが事の発端。

そこでは色々な議論がなされていたけれど、全部省略しよう。

別にその人たちのやり取りを全て言ったところで面白くないだろう。それに最近はプライバシーの問題が大きく取り上げられる時代だ。

それに僕から言わせれば、女の子がいるなら……って僕は何を暴露しようとしているんだ。

馬鹿馬鹿しい。

こういうものは、他人に語るものではなく、自身の中でたぎらせておくものだ。

閑話休題。

別に僕から抱き着いたわけじゃない。彼女からなのだ。

僕からならば批難されてもおかしくないし、普通に警察を呼ばれる。

警察にお世話になる際には、是非とも一度カツ丼を頼んでみたいものだ。

代金を後で請求されるのは嫌だけど。

「腹減ったんでカツ丼くれないっすか？　あと弁護士」

うん、いかにも頭の悪そうな青年だな。これは弁護する側に同情す

る。

カツ丼なんてどうでもいい。

そう、女の子の身体の柔らかさを……じゃなくて今の状況を確認しよう。

とか考えていたら、僕は知らないうちに彼女の頭を撫でていた。

左手も後ろに回しているし。

僕は案外、積極的な人間だということだろうか？

にしても、自分でも驚くほど慣れた手つきだな。自然に撫でている。ちなみに言うと、僕がこんな行為をしたことは一度もない。つまり、『誰かでやっていたこと』というわけじゃない。

僕は人生の中で、誰か特定の女の子を好きになったことなんてないのだ。

もちろん、男を好きになったことは当然ない。

分かんと思うけど、一応だ。勘違いされては困る。

余計な話は置いておこう。話が脱線し過ぎだ。

そうして、更にそこから五分。僕は彼女の頭を撫で続け、彼女は僕

に抱き着いたまま泣き続けた。

「えっと……落ち着きました？」

「……はい」

そこで初めて顔を会わしたけど、二人の距離が物凄く近い。抱き合ったまま顔を見合わしているんだから当たり前だ。

長く茶色い髪。身長が僕と同じくらいにしては少し幼い顔立ち。綺麗と言うよりは、可愛いと表現する部類だ。

そして何より印象的なのが、その瞳。

その色は、僕が殺されかけた時の男性と同じ赤色であり、朱色であり、紅色。

今思いついたけど、紅蓮って色の名前なのかな？

日本語は類似語が多くて困る。

だいたい数を数えるにしても単位が多すぎるんだ。なんだよ『竿』って。どう見てもタンスは『個』だろう。

大昔の人の運び方なんて僕たちには関係ない。

今は蟻さんの会社がトラックで運んでくれるんだから。

まあそれは置いておいて、紅だ。
その瞳に釘付けとなり、僕は目を離すことが出来なかった。

だから僕たちの今の状況を正しく把握し、反応したのは彼女の方が早い。

考えるまでもなく分かることだけど。

僕、目を覚ます。

彼女、抱き着いてきて泣く。

僕、彼女の背中に手を回し、頭を撫でる。

彼女、抱き着いたまま泣く。

二人、抱き合ったまま見つめ合う。

何が言いたいかというと……。

めっちゃくちゃ恥ずかしい。

彼女の顔が真っ赤になっていくのが分かる。
たぶん、彼女から見た僕も同じような状態のはずだ。顔が火照って

凄く熱いし。

「す、すみません!!」

「えっと……こちらこそすみません」

びっくりするほど早く僕から離れて、部屋の隅に移動し座り込む。
僕に背中を向けて。

以上、説明終わり!!

問題は全く終わってないけれど……。

うーん。

いや、分かるよ。

知らない奴に自分が抱きついてるんだから、それに気づいた時点で離れるのは当たり前だ。

でも、それにしては彼女の反応はどうなんだろう。

僕は自分の顔を格好よくもなく不細工でもない普通の顔だと思っているけれど、ここまで拒絶されるとさすがに少し心が痛む。

まあ好かれようが、嫌われようが、そんなことはどうでもいい。

ただ、現状を確認しないといけない。

僕が生きていられるはずがないんだ。

僕がどれほど寝ていたのか。時計のないこの部屋で僕がそれを知る術はないけれど、そんなことは関係ない。

少なくとも『寝て治るような傷ではない』ということだ。

左腕なんて、肩から先が跡形もなく消し飛んでいたのに。斬られたんじゃない、消し飛ばされたのだ。

そんな僕が生きていること。それ自体がすでに異常だ。だとすれば、考えられる可能性は一つしかない。

そう、あの男性と同じ色の瞳を持つ彼女。彼女が何かをしたとしか考えようがない。

少し冷静になってきたから、周りが見えるようになってくる。

白で統一された部屋。と言うよりは、部屋の中に余計な物が何も無いと言った方が正しい。

ただ一つある布団に僕は寝かされていて、他に部屋にあるものと言えど小さなテーブルがあるだけだった。

僕の家より殺風景が広がっている。

「……説明してもらってもいいですか？」

「……はい」

布団から身体を起こした状態のまま、僕は彼女に問いかける。

彼女に背負わせるには、人の命というものはあまりにも重たいものなのかもしれない。

でも、僕はこんな事を望んでいたわけじゃない。

僕は確かに言ったはずなんだ。

——殺してくれと。

にもかかわらず、僕は生きている。両腕を取り戻し、右目も正常に見えている。

どこも悪いところはない。

それが一番の問題だった。

「僕は殺してくれと頼んだはずです。なぜ放っておいてくれなかったんですか？」

「そんな……」

「僕が無茶苦茶な事を言っているのは分かっています。助けてもら

っておいて、あなたを批難しているんだから」

僕の言葉に反応するように彼女は肩をビクッと一度震わせると、声を震わせて答えてくる。

「僕はこんな事、望んでいない。助けてくれなんて、頼んでいない」

「でも……」

僕が言い切っているにもかかわらず、彼女は食い下がってくる。助けてくれた恩人にこんな事を言う僕は、やはり最低の人間だろう。

……いや、僕の事は後でいい。

後でいくらでも自虐すればいい。

残念ながら、僕にはその時間が与えられたんだ。今はこちらを優先しよう。

「あなたのした事は全く意味のないことなんです。僕は、死にたかった」

「そんなの駄目です!!」

僕の意見を初めて真っ向から否定してくる彼女。だけど、その言葉は僕には響かない。

駄目？

死にたいと言ったことか？

彼女の行為を否定したことか？

まあこんなことは考えなくとも分かる。……前者だ。

馬鹿馬鹿しい。

命なんて、今この瞬間にも地球のどこかで失われている。

僕一人、消えたからといってなんだと言うのだ。

全てを救えないそんな行為は、ただの偽善でしかないんだ。

「それはあなたが決めることじゃないでしょう？　僕は――」

「私があなたを許します」

被せるように言った彼女は、そこで改めて僕の方を向き、そして僕に向かって歩いてくる。

人の家だから悪口になってしまいかもしれないけど、そんなに大きくない部屋だ。否、一人で暮らしているのか小さい部屋だ。すぐに僕の元まで辿りつく。

布団の中に入っている僕が彼女の進行を阻めるはずもなく、彼女は僕の前まで来て僕と視線を合わせてくる。

「許すって……突然なんですか？」

「誉めてほしかったんですよね？」

僕の言葉を見無視しているのか、微妙に会話が噛み合っていない。何故だろう。起きる前に遠い昔の事を夢見たせいかな、その言葉を打ち消すことが僕には出来なかった。

彼女の言葉は止まらない。

「誉めてほしくて頑張った。ただそれだけなんですよね？　ちょっとやり方を間違えてしまっただけなんですよね？」

微笑みかけるような、そんな優しい表情。

それは、僕が久しく見る他人の表情。

それは、僕が向けられることのなかった表情。

「そのせいで周りがおかしくなってしまった事を『自分のせいだ』ってずっと責めているんですよね？」

そして彼女は、僕を再び抱きしめる。

優しく僕を包み込む。

先程までの慌てぶりなど、どこかに置いてきたかのようなその優し

さに、僕は呆氣にとられる。

「えっと……」

「しんどかったんですよね？　本当は泣きたかったんですよね？」

僕はまともな言葉を発する事が出来ず、彼女の言葉を、彼女の行為を、抵抗せずに受け入れる。

僕から腕を回すことはしないけれど、彼女の腕を払うことはしない。というより出来ない。

いつからだろう。

家族と会話をしなくなったのは。

一緒にどこかに出掛けなくなったのは。

一緒にご飯を食べなくなったのは。

一緒に笑うことをしなくなったのは。

誰かに何かを期待しなくなったのは。

そんな考えが頭を駆け巡る。

「もう自分を責めないでください。私があなたを許します。だから

……」

彼女は言葉を止めることはない。僕も遮ることはない。

それは僕がずっと考えていた事。

ずっと答えの出ない問いへの入り口。

「自分を許してあげてください」

ずっと聞きたかったのかもしれない。
ずっと言いたかったのかもしれない。

「……いいんですか？」

「はい」

「僕は最低な人間なんです」

「はい」

「僕がやることは、他人を苦しめることばかりなんです」

「はい」

彼女はただ頷く。

その優しさに甘えたかったのだろうか。僕は両親にも言ったことのないような事まで口にしていた。

だけど、止められない。

一度決壊したダムの水を止める術を、僕は知らない。

彼女の負担になるだけだと分かっているのに、彼女の迷惑になるだけだと分かっているのに、僕は言い続ける。

「僕はこんなにも歪んでいるんです」

「はい」

「僕は、いなくなった方がいいんです」

「そんな事、絶対にありません」

ただ頷くだけでなく、僕の話聞いた上でそれを否定する。僕がずっと思っていたことを、正面から否定してくれる。

「いなくなっている人なんていません。だってほら、あなたはこんなにも温かい」

彼女はそう言って、更に抱きしめる力を強める。

僕の存在を引き寄せるように、僕に他者という存在を認識させるように。

そして僕は、初めて自分から泣いた。

泣かされたのではなく、泣いた。

嬉しかったからなのかもしれない。

喜ばしい事だったからなのかもしれない。

もしかすると、全く違う理由からなのかもしれない。

しかし、僕はそれを知らなかった。

あまりにも自分を考えてこなかった僕は、克服しようと努力してこなかった僕は、この感情の明確な名前を知らなかった。

ただ、頬を伝う涙に冷たさはなく、身体が温かい事は理解できた。

「……取り乱してすみません。もう、大丈夫です」

涙を彼女に見られないように拭った後、僕はとりあえず謝った。

たぶん僕は混乱してしまったんだ。

だからあんな愚行を犯してしまったんだろう。

彼女に話を聞いてもらって心が少し軽くなったけど、僕という存在に何か変化があったわけじゃない。

この心の軽さも、彼女に押し付けてしまったから得られたものであり、根本的には変わることなど出来ないのだ。
だから僕は謝る。

表面上は取り乱した事を理由にして。

その裏では、ここまでしてもらっておきながら、変わることなど出来ないことを思っている。

「もう死んでいいなんて言いませんか？」

「……僕はもう大丈夫です」

だから僕は明言を避けた。

ここまでしてもらって嘘を吐くわけにはいかない。

大丈夫だという言葉は、死というもので取り乱すような事はしないという意味だけど、少なくとも嘘は吐いていない。

情けないけど、あそこまでしてもらって申し訳ないけど、僕は自分が異物だとは思えない。

可能性はあったけど必要のなくなった余ったものではなく、初めからそこに固定された種類の違うパズルのピースのように、邪魔なもの

のとしか思えない。

でも、もう大丈夫だ。

それを口にすることなく、普通の生活を送る僕に戻ることが出来た。

この状態になれたのは彼女のおかげだ。なら、さっきの謝罪には三重の意味がある。

「分かりました。良かったです」

分かっているはずなのに、彼女は何も言うことなく僕から離れる。追及することも、糾弾することも出来るにもかかわらず、彼女は何も言わずに僕に笑いかけてくる。

少し後ろめたい僕にはその笑顔は眩しすぎたけど、感謝を伝えていない事に気付き笑顔を返すことで代用した。

「信じてもらえないかもしれませんが、その世界には化物と言うべきものがいるんです」

僕が落ち着いた事を確認したからか、彼女は唐突にそう話し始めた。いや、僕が説明を頼んだんだし唐突ではないか。

話が中断したのも僕のせいだし。

「彼らは闇の住人なんです。人を襲い、人を喰らう」

今日の朝、ぶつかった直後にこの話を聞かされていたら、僕は彼女を心底馬鹿にしただろう。

僕は幽霊の類いを一切信じていない。だからって科学を全面的に信用しているわけじゃないけど。

だが、今の僕に彼女の話は十分信用に値する話だ。
なんせこの目はその姿を覚えていて、この体はつけられた傷の痛みを覚えている。

「あなたが会ったあれは吸血鬼ヴァンパイアです」

「……ヴァンパイア？」

吸血鬼。

神様類と同様、僕はその方面の知識がほとんどない。

そういえば、あの男性は鬼ごっこがどうか言っていたな……。なるほど、確かに吸血鬼は鬼だ。

そう考えれば、僕は鬼ごっこをしていたというわけか。
リアル鬼ごっこ。……どこかで聞いたことがある。

「彼らは――」

「その前に」

彼女の声に、今度は僕が重ねる。

話を度々中断してしまつて悪いとは思うけど、これは確認しておかなければ駄目だろう。

それはもちろん、彼女の姿をはつきりと見たときから感じていた疑問。

「その前に、あなたは何なんですか？」

僕の身体を治してくれたのは他でもない彼女だ。

そして闇の世界の住人の事を『彼ら』と呼んでいる。

ここまで条件が揃つて何者でもないと言うことはないだろう。

最低でも、漫画に出てくるような天才外科医と知り合いである必要がある。これは冗談ではなく、本気で。

「……私は境界者です」
ヴァムピール

少し言い渋つた彼女だけど、自らの事を口にした。

でも吸血鬼ならともかく、全く聞いたことのない単語に僕は返事を出来ずにいた。

何て言えばいいんだろう。僕から聞いたことだし、さすがに黙って

いるわけにもいかない。

でも見当がつかないし……。

訳の分からないことを言って場が和むような雰囲気ではない。

「えっと……境界者って言うのは、吸血鬼と人間の間に生まれた子供の事を言うんです」

「ハーフ!？」

驚いて思わず大きな声を出してしまった。

当たり前だ。今日会った化物が、人間との間に子供を作るなんて……。

確かにその説明ならば、瞳の色についても納得できる。

その血を継いでいるのだから、同じで当然だ。

「じゃあ、彼があなたの父親というわけですね？」

「それは……分かりません」

あれ？

僕は一応当たり前の事を聞いたつもりだったんだけどなあ……。彼女から返ってくる答えはあまりにも複雑で、あやふやだった。

そしてその答えは、僕にある一つの可能性を見せていた。

僕としては、本当に最悪な可能性。

それがすなわち。

「……もしかして、吸血鬼って沢山いるんですか？」

「えっ？ あっ、はい。それはもちろん」

彼女は僕の問いかけに対しても、当然といった風に返してくる。

最悪だ。

向こう側の常識は、僕に計り知れないほど大きなダメージを与えてくる。

あんなのが大量にいるのか！？

いやいやいや……。

何で僕たち普通に生きてるんだよ。

あんなのが大量にいたら、一瞬で全滅しちゃうよ？

格闘技の世界チャンピオンだろうが、彼らの前では赤子と同じだ。彼の言い方を借りるならば、赤子も全部引っこくるめて『屑』なのだろう、僕たちは。

「吸血鬼といっても他の化物と同様に沢山いるんです。ですから彼が私のお父さんかどうかは分かりません。あの後すぐに逃げられてしまったので……」

「……………」

どうやら彼女にも何かあるみたいだ。

にもかかわらず、僕は彼女に心の歪みを押し付けてしまったわけだ。本当に申し訳ないと思う。

物語の主人公とかなら、ここで彼女の話を聞いてあげるのかな？

なんて考えながらも、僕はそうしなかった。

彼女が話したいと感じたならば、その時に聞けばいい。

だいたい、何の覚悟もないただの男子高校生が関わっていいような次元の問題じゃない。

僕には、そんなものに関われるような力はないのだ。

だって力の強い女子には負けてしまいそうなくらい、僕は腕っぷしが弱い。

彼女に感謝を返す気持ちは十二分にあるけど、人間出来ることと出来ないこと、そしてやりたくないものがある。

ましてや他にも化物がいるなら……。

えっ？

他の化物？

「彼らは群れを成すということをはほとんどしないんです。だからあちこちに存在しています」

群れ？

やばい、これ以上聞いちゃ駄目だ。

世界の終わりを聞いている気分になる。

「……化物って吸血鬼だけじゃないんですか？」

「当たり前です！！　って言っても、私も全てを知ってるわけじゃないんです」

そういえば、初めから『彼ら』って複数系で呼んでたな。

……終わった。

『僕の未来が』じゃない『人類の未来が』だ。

だって無理だよ!!

僕は直接攻撃されたから分かるけど、あれはどうにかなるような部類のものじゃない。

戦車？

ミサイル？

戦闘機？

核兵器？

そんなもので勝てるとは、到底思えない。

だって核兵器って遠距離攻撃だよ？

目の前に敵がいたら意味ないじゃん。

『肉を切らせて骨を断つ』どころか、仮にそれで殺せるのだとしても、味方の被害が甚大だ。

少し言い方を変えさせてもらうなら『中身をぶちまけて皮を掠める』といったところだろう。

そもそも、どこにいるかも分からない個体を殺すための兵器じゃない。国一つを滅ぼすといった、広域殲滅のための兵器だ。

「ヴァンパイアハンターって本当にいるんですか？」

「別に吸血鬼に限ったことではありませんが、化物を殺すための組織があることは確かです」

彼女の言葉に少し安心。

一喜一憂して情けないとは思うけど、人類存亡の危機という壮大すぎるスケールの話だ。少しは大目に見てほしい。

大方の事情は分かったところで——本当は全然分かってないけど、分かった振りをしないと話が先に進まない——僕は改めて質問をする。

ずっと思っていて、僕のせいで中断してしまい、彼女の説明に順番を後回しにした、あの問題だ。

これを聞かないことには何も始まらない。もしかしたら、否、もしかなくても、僕は聞く順番を間違えていた。

「……………」

言葉が口から出てこない。

恐怖が僕の邪魔をする。

何か、知らないことを聞くというのは怖い。

逃げられない、逃げちゃいけない問題だと分かっている。だからこ

れだけは、彼女からではなく僕から切り出さないといけないのだ。

殺してくれと頼んだのは、疑いようもなく僕自身なのだから。

「僕は……僕はどうなんですか？」

少し声が裏返ってしまう。

そして、一時沈黙。

流れる時間が果てしなく長く感じ、今すぐにでも走って逃げ出した
い。

喉が渴きを訴えるのが分かる。

意を決したのが伝わっていたのか、彼女からも緊張感を感じる。

「あなたは、契約を結び私の眷属にしました」

「……けんぞく？」

またしても聞いたことのない言葉が出てくる。

こんなことなら、伝説や伝承についても調べておくんだった。いち
いち頭にハテナを浮かべながら話を聞かないといけない。

けんぞく。

一体何だろう。どんな漢字を書くかも分からない。

ぞくはたぶん『属』だろうな、雰囲気的に。

問題は残る『けん』の方だ。

件、券、権、圏、犬、剣、兼……etc。

とりあえず思いつく漢字をくっつけてみるけど、いまいちしっくりこない。

なるほど、こういう時に携帯電話は役に立つのか。

クラスメートは授業中もカチカチやっていたりするし、検索機能が
ついているのだろう。

なんて、皮肉混じりの一人漫才をやっている場合ではない。

まあ漢字が分からなくても言う方には問題ない。

「勝手なことをしてすみません。でもあの状況では、あなたを助ける
手立てが私にはなくて……」

だから殺してくれといっただろう。とはもう言わない。

彼女の言葉に大人しく耳を傾ける。

「あなたは半分が人間、そしてもう半分が吸血鬼の状態です」

「……………」

もう何も言えなかった。

これで僕も晴れて化物の仲間入りだ!!
やったね!!

……馬鹿馬鹿しい。

意味のないことはやめよう。

現実逃避は何も生まない。ただ時間を無駄に浪費するだけだ。
ならばしっかりと自分の置かれた状況を把握することに時間を使っ
た方がいい。

使ったところで何も状況は変わらないけど。

確実に死にかけていたであろうあの時、僕は自分の事を『化物なん
じゃないか?』なんて冗談を一瞬思ったりしたけれど、まさか目を
覚ましたら本物の化物になっているとは。

笑えない冗談だ。

「……治る方法とかはあるんですか?」

「……分かりません」

助けてもらっておいて言える立場でないことは分かっている。そして、一刻を争う状況だったのだろう。

でも。

それでも。

その後どうなるかぐらいは予想しておいてほしい。

こっちは闇の世界だなんて漫画みたいな事には、全くと言っていいほど免疫がないのだ。

しかし……。

僕は半分が吸血鬼の体になったわけだけど、別に何かが変わったようには思えない。

腕も普通に動くし、目もいつもと同じだ。
今までとの違いなんて、正直分らない。

「僕と君の違いって何ですか？」

単純な興味として聞いてみた。
まあ大切なことなんだけど。

片や吸血鬼と人間のハーフ。完全に半分ずつ血を受け継いでいる。

そして片やそのハーフと契約を結び眷属——やっぱり必要だと思い、

漢字は彼女に聞いた。知らない漢字だったけど——となった人間。体の半分が吸血鬼と化している。

僕からしたら、この両者の間にある違いといったら上下関係だとは思えない。

でも恐らく、明確な違いがある。

それが何かは分からないけど、僕の全く頼りにならない勘が、珍しく働いている。

「違いますか……。たぶんですが、あなたの場合は私が血を吸うことで、吸血鬼の比率が上がっていくんじゃないかと……」

彼女は「初めての事なので……お役に立てずすみません」と肩を落として謝罪の言葉を口にする。

別に僕も明確な答えがほしかったわけじゃない。

違うと言うことが分かれば、それで十分だ。

人間に『戻れる』とも『戻れない』とも答えない事から分かるけど、彼女は本当にこれまで眷属を作ってこなかったのだろう。

だから答えも曖昧で、あやふやなものばかり。

でも、戻れると言われて戻れないことが判明した時はたぶん自暴自

棄に陥ってしまうだろうから、そうなってしまいうくらいなら確かに分からないと言ってくれた方がいい。

絶望なんて何度もしてるし、いつも感じていることだけど、あの感覚は絶対に慣れることが出来ない。

たぶん、人間でなくなり化物になってしまった今でも、絶望した時の空虚な気持ちは感じるはずだ。

それほどまでに、あの負の感情は力を持っている。

「じゃあ質問を変えます。僕は普通の生活を送れるのですか？」

「それも分かりません。吸血鬼は太陽の光が駄目なんです。もちろん私も。でも、あなたの場合はどこまで作用するか……」

「やってみないと分からないって事か」

うーん。

なかなか難しい問題だな。太陽の光が駄目なのか……。

あれ？

でも僕、彼女と朝に会わなかったっけ？

「私は帽子に魔術をかけてるので、被っている間は大丈夫なんです」

僕の疑問を先読みしたかのように、丁寧に答えてくれる。
先読みってというか、心読んでるよね……？

天童寺生徒会長もそうだけど、女子には初期装備として付けられて
いる機能なのかな？

だとしたら世の中、女子を敵に回すべきじゃない。

っていうかまたまた知らない言葉が飛び出してきた。

まあこれはイメージしやすいけど、そろそろ専用の辞書を作っても
らいたい。

「何度も話を止めて申し訳ないんですけど、魔術って何ですか？」

僕の質問に、彼女の顔が固まった。

いや、だからそんな『何で知らないんですか？』みたいな顔されて
も困りますから。

僕ってば、いたって普通の男子高校生だったわけですよ。

吸血鬼もそうだけどさあ。魔術って……。

完全にファンタジーの世界じゃん。

もうあれですか。ここはゲームの中の世界ですか？

村人Aが化物の力を手にしてる時点で既に破綻しているけど……。

「えっと、先程も言ったように化物を殺す組織があるんですが、そこに所属する者達が、対化物用として編み出したものが魔術です」

編み出したって、一体いつからこんな世界だったんだろう。
まさか初めから、なんてことないよね？

でも彼女、見た目的には僕と同じ年ぐらいなんだよなあ。
彼女が生まれる前には既にこんな感じだったろうし。

はあ……初めからだと思っておいた方がよさそうだ。

「魔術は人しか使いません。魔術には理論の理解と構築が必要なんです」

段々難しそうな話しになってきた。

理論って事は理数系なのかな？

僕はどんな教科でもそれなりのレベルで出来ると思っているけれど、
学校の勉強レベルで何とかなるのかな？

馬鹿馬鹿しい。

学校の勉強で命が守れると言うのなら是非とも教えていただきたい

ものだ。

あれにはほとんど意味がない。

英語はまだ分かる。今や世界共通語だ。英語が出来ることは、これからの世界で生きていくためには最早当たり前と言っていいたいだろう。

必須どころの話ではないはずだ。

でもこれからは中国語も大切になってくるかもしれない。

なんせ中国、力強いし。

発言力ありそうだよなあ。

問題は既に一杯あるけど。

中国はどうでもいい。僕が生きている間に行くことがない国だろう。そんな所の事を考えても意味がない。

今考えるべきは魔術の事であり、化物の事であって、学校教育の必要性などではない。

ましてや世界情勢など、断じて違う。

「僕も魔術を使えるようになりますか？」

ここからは、先の可能性だ。

必要になるような事にはなりたくない。けど『いざという時』というものは案外近い時に来るものなのだ。

その時になっておろおろしたくない。

僕が言葉を発してから約二十秒が経つ。

彼女からの返事はまだない。

ずっと考え込んでいるような素振りを見せているけれど、大丈夫だろうか。

さっきから分からないことだらけだから、これも分からないだろうと半分思っていたんだけど……。

魔術には理論の構築が必要。なら頭のいい人は皆使えるのだろうか。

例えば、今はテーブルの上に置かれている大きな帽子。

あれにも魔術がかけられているらしいけど、どれ程の力があるのだろうか。

僕が持った時は、普通の帽子だとは思えなかったけど。

などと考えていると、急に彼女は俯いてしまってこちらを見なくなる。

それだけで、申し訳ない気持ちで一杯なのは分かるけど、一応話を聞いた方がいいのだろうか？

そこら辺りが人間は難しい。

あからさまに様子がおかしいから話しかけているのに『ほつといて』とか言うくせに、普段と同じように接すると『何も分かってない』とか言う。

だったらどうしてほしいのかをはっきりと言え!!
と言いたくなる。

同情してほしいなら、怒ってほしいなら、話を聞いてほしいなら、自分からちゃんと伝えることが必要なのだ。

自分の事もろくに分からないのが人間なのに、他人のことなんて分かるわけがない。

「先程からすみません。私、何も分からなくて……」

物音を立てれば消えてしまいそうなほど小さな声は、辛うじて僕の耳に届いた。

ともすれば泣いてしまいそうな彼女に、これ以上質問するのは止めておこう。

そう思った時、僕は改めて気付いた。

呼び方が代名詞でしかない。

別にどうでもいいと思うけど、やっぱり自己紹介は必要だろう。助けてもらったわけだし、眷属になったわけだし。

「僕は斉梨優真です」

「えっ……?」

「僕の名前です。自己紹介が必要かと思ひまして」

少し前の僕なら、馬鹿馬鹿しいの一言で片付けた問題だ。

他人との関わりなんて邪魔なものだし、なによりも拘束力が強い。

でも今回は、今はそうしなかった。

命を助けられたことももちろん理由ではあるけれど、なんだかそれだけじゃない気がする。

少し晴れたように感じる心のせいかもしれない。

たまにはこんな風に誰かと繋がる行為もいいだろうと、そんな気分になってくる。

「エ、エリスです!! よろしくお願ひします!!」

まさか……名前だけ？

僕的には名字の方が気楽で呼びやすいんだけどなあ。

まっ、さん付けすれば何でも同じか。

「エリスさんはこれからどうするんですか？」

「『エリスさん』だなんて、そんな……」

僕の話を全く聞いてない。

さっきまで真面目な話をしていたんじゃないのか？

僕としては今も十分真面目な話をしていると思っ
ているんだけど……
…違うのかな？

だいたい、自分の名前にいたいち反応しすぎだ。そんなにもじもじ
するなら名字の方を教えてくれればいいのに。

「はぁ……僕、この先どうなるんだろう」

聞こえないように呟いたから当たり前だけど、エリスさんは僕の言
葉に気付いた様子はない。

でも、そんな時だ。

僕は人外なんだと言うことを、人ではなく化物なんだと言うことを、
言葉の説明だけでなく、経験として実感する事が出来た。

「……………」

エリスさんも動きを止めて、緊張感を放っている。

上手く聞き取れなかったけれど、何かを呟いたと気になった時には既に右手に細身の刀が握られていた。

僕たちがこんなにも緊張する理由はただ一つ。

扉の向こう側に誰かがいる。

先程のやり取りなど二人とも忘れてしまったように黙り込み、長い沈黙がその場を一気に支配した。

真実の扉（後書き）

優真を支えているものはあまりにも弱い柱で、それでいて数自体が恐ろしいまでに少ないです。

人間は簡単には変わらない。

変わったと思えるのは見せかけで、周りに合わせるのが上手くなっただけ。本質は何も変わらない。

彼はそんな風に考えていると思います。

そんな彼が涙を流す。

乗り越えるために、変わるために。

そんなこんなで5話です。

更新が遅くなってしまう申し訳ありません。

本当なら昨日更新するはずだったんですが……。悪戦苦闘の結果最初から打ち直し。

もう泣きそうになりました。

これからよろしくお願いします。

次回は一度視点が変わって三人称です。

そしてページ数は恐らく短いです。かなり短いと思います。

自分のペースで頑張りたいと思います。

暗黒の世界

一面に広がる闇。

果てしなく続いているその空間で、一人の男が椅子に座っている。

どこまでも暗く、漆黒に染まる世界の中で男の髪は一際目立つ。その輝きは、自ら発光しているのではないかと勘違いさせるほどに強く、そして眩しい。

「我らが王、どうかなさいましたか？」

椅子の隣から、あたかも初めからそこにいたかのように佇んでいる別の男が口を開く。その姿は、黒を基調とした執事服。

椅子に座る男の目は開かれていない。
が、仕えてきたその時間の長さから、自らの主の僅かな異変にも敏感に気付くことが出来る。

逆もまた然り。

椅子に座る男は、執事の言うことを聞かずとも理解しているだろう。
しかし、執事は言葉を発する。

「この間は、下界へと出向かれたのですか？」

執事の口にした事は、聞かずとも分かること。

そこで初めて男は目を開ける。

人間とは思えない赤い瞳。

顔を向けることなく、瞳だけを動かして執事の姿を確認する。

そこにあるのは、いつもと変わらない柔和な笑み。

あまりにも鋭いその眼光は、目が合った者全てを殺してしまいそうなほど猟奇的で、圧倒的。にもかかわらず、まるで張り付けられているかのように、執事の表情に変化はない。

「……ふんっ」

執事を一瞥した後、男は再び何もない空間へと視線を前に戻す。

執事は男のその反応になにも返してこない。

どこまで目を凝らそうと、そこには相変わらずの闇があるばかり。

だが、確実に何かがある。いなければいけない。

この執事は用事がない時には自分の前に姿を現さない。

それが分かっていたからこそ、男は執事の言葉をわざわざ待つことなく自ら話を切り出す。

「俺になんの用だ」

男は声を発したただけにもかかわらず、それだけで周囲の温度が一気に下がったように感じる。

それほどまでに男の力は巨大で、強大で、絶大で、莫大で、圧倒的だ。

その力を前にしても、執事は態度を一変させることはない。ただいつものように、事実だけを簡潔に、そして機械的に伝える。

「申し訳ございません。我らが王の下で働きたいという者が数名、謁見を希望しております」

「……………」

執事の言葉に男はすぐには返事をしない。どころか、反応の一つさえない。

だが、執事にとっては毎度の事。余計な口を挟まず、主の邪魔にならぬように呼吸さえも最小限に留める。

「分かった。通せ」

「かしこまりました」

主の言葉を聞き執事は一礼した後、姿を消してしまう。

椅子に座った男一人の空間が再び出来上がる。が、その状況が保たれるのはたった数秒。

次の瞬間には光が出て、目の前に執事の言う通り数名の男女が立っていた。

その後ろに、仲間であろう数百を越える化物たちを付き従えて。

「……………」

それを見た男は沈黙を保つ。

決して、その化物たちを見て唾然としたからではない。

ただ、いつもと同じような出来事に、楽しみを味わえなくなっていたからだ。

「おいおいおい！！ 見てみろよ。ビビってるじゃねえか！！」

集団の前に立つ男女。その中の一人は、黙ったままの王たる男の状況を見て喋り続ける。

周りもそれを止めようとはせず、にやついた顔で男を見ているばかりだった。

「王様ってのはこんなもんか？ 大したことねえなー！！」

ハッハッハッ、と笑う男につられてか、周りの化物たちも一斉に笑い出す。

百を越える数だ。一人ならまだしも、そこまでくると雑音から騒音へと変わっていく。

「……黙れ」

「うっ!!」

男が発した一言。ただそれだけで先程までの笑い声は消え去り、その場にいる全員が気圧される。

あまりにも圧倒的な存在感を放つ王に、それでも食いつく者は辛うじて一人残っているだけだった。

もちろん、最初に笑っていた男である。

「な、なんだよテメェ!! 今の状況分かってんのか!？」

「そうね……恐れることはない」

「うむ、所詮は一人。いくら強いとて、こちらに分がある事には変わりあるまい」

声を張り上げる男に触発されるように、残りの数名も口々に言葉を発する。まるで言い聞かせているように、安心したいと言わんばかりに。

その姿を見ても尚、王は椅子から立ち上がりとはしない。ただじっと、その集団を見続ける。

しかし数百を越える化物たちは違う。男の声で我に返ったようで、

警戒心を強め、臨戦体制に入る。

「おいテメエ！！ 悪いことは言わねえ。俺たちの仲間になれよ」

数百を越える化物、もとい軍勢を引き連れての勧誘。それは最早勧誘でも、交渉でも、取引でも、懇願でも、なにものでもない。

ただの脅迫であり、強制であり、男たちからすれば決定事項だ。

だがそれはあくまでも数百を越える化物の群れが軍勢だと相手が思っており、脅威だと思っている場合に限る。

例えば、それらを一瞬で始末できるような相手には全く意味がない。

「聞いてんのか！？ 返事を――」

叫んでいた男の声が消える。空間のあまりの広さに声が反響するのではなく、ぴたりと止まってしまった。

王に恐怖を感じたからではない。恐怖など、初めからずっと感じていたことだ。

では何故なのか。

男の首が胴体から切り離されてしまったからだ。

攻撃の音もなく、攻撃した姿も見えず、ただ結果として男の首は床に転がっていた。

胴体の方は、その切断面から大量の血を吹き出し、辺りに撒き散らしながらゆっくりと倒れる。

周りにいた者達が反応できるはずもなく、撒き散らされた血液をその身に浴びることで初めて結果を知ることが可能となる。

しかし、それだけでは終わらない。

倒れた胴体はいきなり破裂し血液だけでなく、その肉片までもを撒き散らしたのだ。

液体だけでない、赤い肉片までもが辺りを汚し、周りの者達を汚す。原型が保たれているのは、無様に転がっている頭だけだった。

「……この数を相手にして勝てるっても？」

怒りを顕にする面々。

赤い汚れを拭おうともせず、ただ睨み付けている。

その言葉に確認の意味などない。ただの言葉として。せめてもの礼儀として。形だけの言葉だ。

止まる気など、退く気など、全くない。

襲いかかってくるは数百を越える敵。

そのそれぞれが異形であり、異常であり、しかし王には——等しく屑でしかなかった。

王はただ、椅子に座って指を小さく動かすだけ。

昔ならば、その足を地につけ、戦場の真ん中へ自ら飛び込み、そして舞い散る血と共に金に輝くその髪を靡かせていた。
しかしそれも、今となっては昔の事。

今の彼は昔以上の力を持っているにもかかわらず、否、強すぎる力を得てしまったためにそうすることをやめてしまった。

撒き散らされる肉片。一面に広がる血飛沫。

束になり、塊となって攻めているにもかかわらず、その光景が変わることはない。どこるかその血飛沫さえ、王には全く届いていない。

狂気か、糾弾か、謝罪か、嘆願か、はたまた全く別のものなのか。
響き、重なりあう声は、全く判別の仕様がなない。

その音の中でも王が沈黙を守っていることだけが、絶対的な真実だった。

「……こ、の……」

両者の間にあった距離は五メートル弱だったが、誰一人として王の元に辿り着ける者はいない。

辛うじて息のある男も、腕を精一杯伸ばしたところでなけなしの力が実ることはない。

「……………っそ……」

目の前に標的の男がいるにもかかわらず、指の一本さえも身体が動かない。

ただ悔しさがあった。先に逝った者たちに申し訳がなかった。

それ故か、倒れている男の目から涙が流れる。

「……………」

その瞬間、一切の音が消えた。

踏み潰された頭。踏み潰した足。

自身が纏っている漆黒のコートに返り血は付着していない。しかし無惨にぐちゃぐちゃとなった肉の塊が、その足の下には確かにある。

そう、王は自ら動いて最後の一撃を加えていた。一步どころか、椅子から立ち上がろうとさえしなかった王が、である。

「我らが王、どうかいたしましたか？」

その場を後にする王の後ろを、またもや初めからそうしていたかのように執事が歩く。

執事の言葉を全て無視して王は歩き続ける。何もない漆黒の中を、確かな目的を持って。

「まだ足りん」

「ですが、来る者全てを全滅させてしまっただけでは難しいかと……」

歩きながら話す二人。と言うよりは、王の独り言に執事が勝手に返事をしているだけのように見える。

執事の言葉は少なからず王を批難するもの。にもかかわらず、王が執事を手にかけることはしない。

今はまだ目的のためには失うに惜しい存在。

ただそれだけの理由だ。

「采配は貴様に任せる。好きにしろ」

「ありがとうございます。それでは早速準備に――」

「邪魔をすれば、貴様の命はない」

言葉の途中ではあったものの王の言葉に一礼で返すと、それ以上執事が何かを言うことはなく既に姿を消してしまっていた。痕跡どころか、初めからいなかったようにさえ思われる手際の良さだ。

「……………」

王は再び椅子に座り、体重を預けて目を閉じる。

とても久しいことだった。自らが動いて殺すなど、いったいいつ振りだろうか。

再び戦闘が楽しめるかもしれない。命を刈り取る喜びが湧いてくるかもしれない。

そんなことも思ったが、何も口にすることはない。

そんな時ふと、下界に出向いた際のやり取りを思い出す。

死んではいるだろうが、殺すことの出来なかった男。ではなく、その男を庇って現れた女の方に興味があった。

顔も覚えていない男ではなく、そうではない女の方に興味があった。

はっきりと言葉を交わしたわけではなく、確認もとっていないが恐らく間違いない。

あの瞳、あの髪、あの顔。

全てが重なり、全てが一致する。

「……面白い」

初めて見せる王の表情の変化。

完全にはないが、その口元を上げて喜びを、楽しみを表していた。

そうしてまた、闇に紛れていく。

今はまだ時期尚早。

何をするにも早すぎる。

準備が整うにはまだ時間がかかることだろう。

もちろん、その間ずっと黙って待っているつもりはなく、考えられる策は幾らでもある。それに、余興があつてこそその祭りだ。

更には新たなピースを加えられる可能性さえ出てきている。

が、その全てを考え終えないうちに王は眠りにつく。

影に紛れ、暗部へと溶け込んでいく。

闇は未だ、その深さの片鱗さえ見せてはいない。

暗黒の世界（後書き）

6話です。

楽しんでいただいているでしょうか？

実はこの6話、本当はもっとぐっちゃぐちゃのどろどろな話にしたかったんです。

結果として無理でしたけど……。

自分の文才がなくて泣けてきますね……。携帯も急に止まりますし。

はぁ、どうすればもっと上手になれるのか……。いえ、この話はやめましょう。私の心は金魚すくいの網を一分間水の中に入れて奮闘した後よりも耐久力がないのです。

すぐに泣いちゃいます。

こんな表現しかできないから面白くないのかなぁーと思ったり思わなかったり。

それはさておき次回は主人公視点に戻ります！！

優真君の勇姿をしっかりと目に焼き付けてあげてください。ないかもしれないですが。

相変わらずの更新の遅さですが、優しく見守ってください。

あっ、もちろんメッセーじやアドバイス等はもらえると嬉しいです。

よろしくお願いします。

思いの覚悟

「はあ……」

思わず溜息が漏れる。何を一体どうしたら、こんな状況に陥るのだろうか。

僕がそんなにも悪いことをしたのか？

だいたい僕が何をしたというんだ。人間、生きていればそれだけで何かしらの罪を犯しているはず。

昨今でいうならば、地球温暖化なんてその典型と言っていいたいだろう。人間がいなくならない限り、この問題が解決することはない。

そういえば何かの本で読んだけど、地球温暖化なんて言ってるけど別に今に始まったことではないらしい。

まあ確かに氷河期があったんだし、灼熱期みたいなものがあったても不思議じゃないよな。

ただ、人間が暮らしにくくなるというだけだ。

そんな話はいいんだ。僕は惑星に干渉できるような人間にはなりたくない。

そろそろ僕の、いや僕たちの陥っている状況について冷静に分析し

ていこう。

まずは格好から。

手錠、足枷、猿轡。

……完璧過ぎるだろ。

目隠しに耳栓をしてないだけ有り難いと思わないといけないけど、そんな悠長な事は言ってもらえない。

なんせ、それをされていないのは僕だけだからだ。

いや、この状況で『だけ』なんて言う回りくどい表現は止めておこう。

つまり、エリスさんはまさにその状態にあるというわけだ。

手錠と足枷で運動機能をゼロにされ、猿轡、目隠し、耳栓とで外部との関係を遮断する。

これほどまでにない嚴重な対処だろう。

が、正直この状況が最悪かと問われれば、答えは否だ。
何故なら僕たちの動きを制限しているこれらの道具は、大した拘束力を持っていないからだ。

外そうと思えば、いつでも外せるし、僕がそうなのだから当然エリスさんも同じなわけだ。

僕たちのこの状況を説明するにあたり、やはり僕は先に謝っておかなければならないと思う。

所謂、前言撤回だ。

本当に情けないことだけど、こうなってしまったのは他でもない、僕のせいなのだ。



部屋の中に広がる緊張感。

残念ながら、僕には敵の殺気を感じ取ったり、なんていう最強の主人公みたいな能力は持ち合わせていないため、相手の様子は分からない。

扉の向こう側に誰かがいることは足音で分かったのだ。

敵の殺気を感じ取る事は出来ない僕だけど、さすがに目の前にいる人の変化ぐらいいは——エリスさんは刀まで持っていたし余計に分かりやすい——見ていれば分かる。

インターホンが鳴り響く。

ピンポーン。なんて言うありきたりな音だけど、僕たちの耳にはやけに大きく、そして激しく聞こえた。

「おかしいな、ここで合ってるはずなんだけど……」

扉の向こうから聞こえてくる若々しい声。

声の質からして男。そして僕より年上ということはないだろう。

扉を開けようとしているけど、鍵がかかっているせいでガチャガチャ音になるだけだ。他人の家にもかかわらずこの対応。

仮に年上だったとしても、僕にこの人を敬う気持ちが芽生えることはない。というか、関わりを持つことさえ遠慮したい。

「どうしよう……って、悩む必要ないか。どうせ相手は魔物だし」

魔物？

わざと大きな声で話しているのか、少年——何度も言うけど僕は扉越しにいる人間の姿が見えるわけじゃない。だから便宜上、少年と言うしかない——の言葉が勝手に耳に入ってくる。

エリスさんはその言葉にビクッと一度反応したけど、それ以外は特別何か行動を起こしてはいない。

相変わらず刀は装備したままだ。

「あの、エリスさ——」

「ちょっと静かにしてもらえますか？」

状況の確認と役割の指示。

出来ない事とやらない事はイコールじゃない。

そう思っている僕だけど、知らないことは出来るはずがない。

でも、今はそんな余裕さえないみたいだ。比較的小さな声で話したつもりなのに、一蹴された。

さて、どうしたものか。やっぱりここは大人しくじっとしていた方が得策だろうか？

「『お邪魔します』とも言わせてくれないんですね」

「っ！！」

僕の目は、あまりにも早い展開に全くついていけなかった。
気付いた時には既にエリスさんが丸坊主の少年を斬り付け、少年の
左肩から赤い血が腕を流れて床を汚している。

「……いきなり斬り付けておいて黙ったままかよ」

睨み付けるように鋭い視線を向けてくる少年は、肩を切られたにもか
かわらず、冷静そのもの。
低い姿勢をとっているせいで正確な身長は分からないけど、着てい
る学ランから、学生だということだけは理解する。

「……………」

「黙ってねえで何か言えよ!!」

少年の言葉を意図的に無視しているのか、エリスさんが言葉を発す
ことはなく、どこるか問答無用といった雰囲気で攻撃を続ける。

初めは驚いて見えなかった僕だけど、今となっては目も慣れてきて
二人の動きがよく見える。

一人蚊帳の外って感じだから、それも相俟っているんだろう。

まあそれを差し引いたとしても、到底人間に出来る事じゃない。

人間には出来る事じゃないんだけど……。

「調子に乗ってんじゃねえぞ!!」

丸坊主の少年は傷を負っているにもかかわらず、その動きにはあまり支障がないように見える。いや、そう見えるだけで実際はしんどいだろう。

攻撃を躲す回数も徐々に減ってきている。なんとか受け流しているみたいだけど、それで精一杯といった様子だ。

と、その間もずっと黙って二人のやり取り、もとい殺り取り——自分で言って悲しくなるセンスだ——を見ていた僕だけど、不意に彼と目が合う。

それはもうバツチリと。

向こうの方は僕がいることに気付いていなかったのか、一瞬動きが止まる。が、エリスさんの攻撃のせいでその隙はほんの一瞬だった。

むしろ、攻撃をもろに食らって吹っ飛ばされたと表現した方がいいかもしれない。

しかしよく見えるようになった僕の目は正確にその姿を捉えていた。

彼は吹き飛ばされながら笑っていた。

「光へ誘え、影を墮とせ、交わるは境界、生み出すは混沌」

はつきりとした声で彼は呟く。何かの詩のようにも感じる言葉だが、その意味を僕が分かるはずもなかったただ見ているだけ。

しかし目が離せない。

何もされていないのに、その言葉を耳から消すことが出来ない。

ただじっと少年の姿を見続け、声を聞き続ける。

それだけなのにもかかわらず、それ以外の事が頭に入ってこない。

「斉梨さん——!!」

エリスさんが何か言っている気がする。

するんだけど、身体が反応しない。今は少年から目を離せない。

「さあ仕上げだ!! 殺してしまうぜ? 何か言いたいことがあるんじゃないかねえのか?」

「……………」

「なっ!! えっ!?!」

急に身体が軽くなった気がする。意識がはつきりしていなかったのかな……。

でも驚きの声を上げてしまったのはそれが理由じゃない。

エリスさんが頭を下げていた。世間一般で言うところの土下座だ。

持っていた刀は今は握られていない。だけじゃなく、その形さえもが消失してしまっていた。

そして少年の、勝ちを誇るような表情。

そしてあれよあれよと言う間に身体を拘束されていき、自由を奪われる。

そこで僕の記憶は一度絶たれている。

次に目を覚ました時にはこの牢屋に閉じ込められてましたってわけだ。

はぁ……本当に情けない。

よくは知らないし、分からないけれど、恐らく僕が何かの攻撃を受けていたと見て間違いない。

だからエリスさんは抵抗を止めて捕まることを選んだのだろう。

僕のために。

一人なら、確実に逃げられたはずなのに。

弁解もする気が起きない。これ以上なく僕のせいだ。

途中までは気付いてすらなかったみたいなのに……。

過去を嘆いても仕方がない。今を生きるしかないのだ。

なんて馬鹿馬鹿しい。格好いいことを言ってみただけ、こんなのはただの逃げであり責任逃れだ。何の解決にもならない。

さつきも言った通りだけど、この拘束具には意味がない。しかし簡単に潰せるものをなぜ潰していないのかと問われれば、やはりエリスさんの状況があるからだ。

簡単に抜け出せる。

でも、もしそうでなかったとしたら？

簡単に抜け出せるであろうエリスさんが全く動かない。抵抗しようという気さえ感じられない。

これかもしれない、自分のためではなく僕のためだとしたら……。

例えば、どちらかがこの拘束具を破壊した瞬間にもう片方が爆発するとか。

とても古典的だけど、これ以上ない有効な手段だ。

人は自分の痛みになら耐えられる。我慢することは簡単ではないかもしれないけど、不可能な事じゃない。

でも、この痛みが他人のものとなってしまおうと話は別だ。それを突きつけられてしまえば何も出来なくなる。

何故なら他人の痛みは分らないから。

耐えるのは自分じゃないから。

そういう意味で人質という作戦はなかなか外道だと思う。だけど世の中、汚いことこそ真理なのだ。不覚を取ってしまったのは僕。何を言おうと言いつにしかない。

「おおー。捕まってんなあ！！ この絵はかなり愉快だ」

周りには誰もいなかった牢屋の前に、先程エリスさんと戦っていた少年が現れる。

丸坊主の頭、Tシャツに短パン。正直、そこいらにいる子供と大差無い。

ただ後ろには『go to heaven』と書かれ、黒の布地の前にはドクロがど真ん中にあるというこのシャツを選ぶそのセンスはどうかと思う。

格好よく自信満々に着こなしているつもりかもしれないが、かなり変だよ。

しかもそのドクロがリアルなものじゃなくてアニメチックな可愛いものだから、更に変の度合いが上がっている。

顔はいいのに台無しだ。勿体ない。

とか考えていたら、何故か牢屋に入ってきて僕の猿轡を外してくれた。

すぐに出ていったから手錠と足枷はそのままだし、エリスさんの待遇は何一つ変わっていないけど……。

「お前も災難だったな！！　こんなやつの近くにいるから巻き添えを食らうんだぜ？」

「……………」

会ったばかりなのに、というか捕まえた張本人だからかもしれない

が、やけに馴れ馴れしい。

明らかに僕よりも年下のはずなのに、敬語を使う気なんて欠片も見せない。まあ別にこの少年に敬ってほしいなんて一切思っていないからどうでもいい事だけど。

ただ、僕は少し黙っておくことにする。

勝手に情報を話してくれる可能性もあるし、何より気分的にこの少年とはあまり話をしたくない。

明らかに馬鹿にしたような、軽蔑したような、侮蔑したような目。その態度、表情、空気全てが僕の癪に障る。

何故だろうか。理由が分からない。

「まあ別にどうでもいいんだけどな。俺が相手だったのが運のつきだ」

傲慢をしに来たんだろうか。本当に苛々してくる。彼の一动一挙が鬱陶しい。

大体どういいうつもりなんだろう。僕は話なんて一切ない。

まあ人質っていうやり方は、僕たちのどちらかが他人の事をどうでもいいと思ってしまう時点で破綻してしまう。

そうなってしまっはあちらとしても都合が悪いってことか。

「……魔物」

「ああ？　なんだよ、言いたいことがあるのか？」

「魔物とは何ですか？」

僕の言葉に少年は呆気にとられたみたいで、動きが止まっている。口が開いていて間抜け面だ。でもこのままじゃこの少年の自慢話を永遠と聞かされかねない。そんなものは願ひ下げだ。

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。

出来ればこの少年以外の人がいいけど仕方がない。

こんなことぐらいでは僕はなんとも思わない。さっきからの不快感は全く消えていないけれど。

「あなたはその言葉を多用していましたよね？ 彼女に向けた言葉のようにも感じましたけど」

普段から人には敬語で話しているからなんとも思わないけど、この少年には新鮮だったのかなんだか偉そうになってくる。

「はっ！！ その女みたいな屑な存在の事を言うんだよ。人を食らって生きる化物の事さ」

人を食らう。

確かに境界者って呼び名だけど結局は吸血鬼の血が入っているわけだし、吸血行為を行うのかもしれない。否、それが生きるための行為であり、必要なものなんだろう。

でも、彼女だってそれを望んだ訳じゃないだろう……。

「魔物と人間が交わり子供をつくる可能性はあるんですか？」

「ハーフの事か？ さあな、いるかもしれないけど数は少ないな。尤もそんな子供、親からしたら邪魔者でしかないだろうけどよ」

「……邪魔者、ですか」

「そうだよ。俺みたいな優秀な子供なら良いけど、化物はいらねえよ。交わろうとする人間もどうかと思うけど親は子供を選べないからな」

彼の言葉が耳から離れない。

親は子供を選べない？

そうか、少し不快感の原因が分かった気がする。この少年は僕とは少し逆なんだ。

なんでも自分がいいと思っている。

自分の思い通りになると思っている。それでいて、今まではそれなりに人生を勝ってきたのだろう。

だからこそ、その態度が不愉快だ。

「なるほど、大体は理解しました」

「ふん。なかなか――」

「あなたの頭が可哀想だということは分かりました」

少年が、先程とは違う理由で動きを止める。

でも、僕は言葉を止めない。こういう子供には一度ちゃんと言っておいた方がいい。甘やかし続けていると、人生を踏み外してしまっ

だが最後、終わりのない、再び始めることも出来ない生活が待っている。

少し人生の先輩として言っというてあげよう。

「君が言っていることは自分を貶めている事と同じだ。人間が牛や豚を食している間は、仮に彼女が人間を食らうとしても屑だなんて言われる筋合いがない」

「な、なんだよお前。それは関係ないだろうが!!」

「弱肉強食がこの世の真理だ。食物連鎖の頂点にすることが出来ないからって侮蔑の言葉を並べるなら、生物を殺さずに生きてみるとだ。それが出来て初めて、君の言葉には意味がある」

そんなことは不可能だ。

何かを殺し、殺されて生きていくのが生物であり、人間だ。争いなしでは人間は生きられない。

だからこそ、僕は言葉を止めない。

この不快感を取り除くためだと言われても仕方がない。実際それが理由の一つではあると思う。

「親は子供を選べない？ ふざけたことを言わないで下さい。子供に何の罪がある？ 産まれてきただけで犯罪者ですか？」

そんなことは絶対でない。

もしそうだというのなら、人間、魔物関係なく全てが同じであるはずだ。

「親は分かっているはずだ。子供を育てるという事がどういう事かを。それだけの覚悟を持っているはずだ。……そうでなければ子供をつくるべきじゃない」

「うつ……」

見た目通り中身も幼い少年は、僕の言葉に言い返すことが出来ない。いる。

さっきまでの自信はどこへいったのか、抵抗と言えば睨み付けてくることぐらいだろう。

馬鹿馬鹿しい。そんなことで僕を攻撃しているつもりだろうか。

彼の両親や周りの人間に対してもこんな事をしているんだろうか？

だとしたら失笑ものだ。

子供だからというものでしかない。まあ僕はそんなことが出来る関係さえ築けていなかったけど。

「君の言っていることは逆だ。子供は親を選べない。生んでほしいなんて頼んでないだろうし、彼女だって好き好んで化物になったわけじゃない」

「何なんだよお前、何でそんなことが言えるんだよ!!」

「気持ち悪いかい？ 気味が悪いかい？ 井の中の蛙とはまさに君のことだ。君が見ている世界なんてあまりにもちっぽけで、狭い」

あからさまに嫌悪感を示してくる少年に、僕は更に重ねていく。
しかしここから先の展開はもう読めている。

僕が何度も経験し、問われてきたことだ。

その度に黙ってしまい、言葉を返すことが出来なかった。たぶんそれは彼らの言うことが正論だからだと思う。

牛や豚を食べているから人間を食べてもいい、なんて言うから当たり前か。

でも今回は言葉を返しておこう。

彼のために。ではなく、自分のために。

決まって問われる言葉に返事をしよう。

「そんな考え……お前、本当に人間なのかよ!？」

「馬鹿にするのもいい加減にしてくれないか？ 君は何も分かっていない」

馬鹿馬鹿しいことだと思う。

こんな言葉を口にしたところで僕の何かが変わるわけじゃない。むしろその最低さを再認識するだけじゃないか。

それでも言葉は返さなければならぬ。少しでも彼女に感謝をするというのなら、したいのなら。今は嘘でも、その嘘にはたぶん意味

があるはずだから。
逃げてばかりはいられないから。

「『お前は人間か』だって？ 勘違いも甚だしい。思い上がりもい
いとこだ。覚えておくといい——僕が人間だ!!」

言い切った。

僕が心にも思っていない戯言を。

真実にする気など全くなく、嘘を突き通す気すら起きない。そんな
曖昧で、適当なもの。

でも以前の僕では頼まれても口にしなかったような戯言でもある。
ということは、僕も少しは成長しているということだろうか？

何をもって成長とするのか。その定義は物凄く難しいし、たぶん世
界的に見れば六十億通り以上の成長があると思う。
でも僕がそれを知る必要はないのかもしれない。

知ったところで、そんな成長は出来ないから。

「そんなことはないよ。優真君、君は自分を卑下にしすぎだよ。も
っと自信を持った方がいいと言っているじゃないか」

奥から響いてくる綺麗な声。

姿は見えずとも分かる。この声の主を僕は知っている。というより、
僕の名前を君付けで呼ぶような物好きは一人しかいない。

この心を読んでいるような絶妙なタイミングに会話。
こんな事が出来る人間を僕は他に知らない。

「やあ、奇遇だね。こんな時間にも優真君に会えるなんてとても嬉しいよ」

「奇遇ですね。僕もこんな所で出会えるとは思っていませんでしたよ——天童寺生徒会長」

自分がうまく表情を作れているかが分からない。
ってというか何で彼女がここにいるんだ？

いや、ここで、この人にそんな問いをする事は愚行というものだ。
とりあえず今はこの動揺を悟られないようにしないと。

「副隊長、知り合いだったんですか？」

「ちよつとね。ありがとう。後は私が引き継ぐよ」

優しく微笑みかけると、少年は頬を赤く染めてそそくさと僕の、というより彼女の前から姿を消した。

っていうか、あのシャツについて何か言ってやれよ。と思うけど、それは口にはしない。

この状況、物凄くまずい。

副隊長と言うからにはやはり隊長がいるわけだけど、そっちじゃない。

彼女が上から二番目の位置にいるということだ。
くそっ……この人相手に何か出来るとは思えないし。

「……………」

「……………」

いつかのように僕たちは無言のまま見つめ合う。いや、見つめるなんてロマンチックなものじゃない。どちらかと言わなくても、僕の一方的に睨み付ける視線と彼女の柔らかな笑みがぶつかっているだけだ。

でもこの膠着状態は長く続くことはない。

何故なら、この時間稼ぎにもならない無駄な時間は僕にとって都合が悪くなる一方だからだ。

彼女にとっては何も変わらない。

これだけの状況、僕から話さなければ彼女から何か行動を起こすことはしないという確信がある。

「あの一——」

「優真君、話があるんだけどいいかい？」

話を遮られた。

おかしいな、僕から話さないと沈黙は続くと思っていたのに。

それにしても話って……。

これだけの事をしておいてどの口が言うんだか。

「捕まえて、拘束しておいてよく言いますね」

「人聞きが悪いなあ。優真君、今の君の力ならそんなものは玩具みたいなものだろ？　まあ最近の玩具には頑丈なものもあるみたいだけど」

おもちゃか……。まあ確かにそれぐらいの物かもしれないけど。

「そんな君がここにいるということは、自分の意思でここにいるということだよ？　ならやっぱり話をしたいじゃないか」

「話をしたい？　天童寺生徒会長、百歩譲って取引と言うのではないですか？」

「優真君にしては面白い嫌みだけど、残念ながら脅迫だよ」

誰が堂々と言えと言った。

それに僕は面白いこと言ったつもりはない。ちょっと気を遣ったというのに、そんな風に捉えられるなら少し傷付く。

それにしても脅迫か。

なるほど。取引でも、譲歩でも、交渉でもない。ただの強制。しかも僕の心理までも利用してくる。

隣のエリスさんのせいで判断が鈍ってしまうことはないと思いたいけど、正直その可能性がないとは言いきれない。残念だけど、僕は彼女の事を蔑ろには出来ない。見捨てるなんて事は出来ない。

しかも隣のエリスさんではなく僕に聞いてくることが悪い。何も知らない僕が正しい解答を出来るわけがない。

「単刀直入に言おう。優真君、私達の仲間にならないかい？」

「……仲間、ですか……」

「うん。私達の仲間になってくれれば君の体も元に戻る可能性を得られるかもしれないよ。どうかな？ 魅力的な話だと思うけど」

あたかも僕に決定権があるような言い方で解答を迫ってくる。

彼女の柔らかな表情に少し揺らいでしまいそうになる。

駄目だ。自分をしっかり持たないと取り込まれてしまう。安易な言動は控えないと。

「彼女と話をさせていただきませんか？」

「……優真君、君は——」

「僕は彼女の眷族です。従僕は主人に従うのが当然でしょう？」

交錯する視線。

僕の言葉に嘘は一切ない。そこに彼女の意味を聞きたいというのは勿論あるんだけど、やっぱり僕だけで決めていいものじゃないと思う。

僕には何も目的がないけれど、彼女はそうではないだろう。確固たる目的があるはずだ。

「お願いします」

「そうは言ってもね……そうだ。ならやっぱりそれ相応の代価は支払ってもう必要があるよ?」

やっぱり必要になるか。

当たり前だよな。こうして拘束するにはやはり意味があるわけだし、彼女は正真正銘、境界者だ。

その彼女を少なからず自由にしようというのだから、やはり責任が問われるのだろう。

でも、僕に出来ることなら何でもする。彼女の邪魔はしたくない。

「僕に出来ることならなんでもします」

「……何でも?」

天童寺生徒会長の目が光る。僕の言葉に反応したんだろうけど、その表情は何故か怖い。

何か嫌なことを考えているようにしか思えないんだけどな……。

今決意したばかりなのに、なんだかもう嫌になってきた。

彼女は何を言ってくるだろう。

彼女なら無理難題は言ってこないだろうけど、たまに嫌なところをしつこく攻撃してくるからな……。

「一応言っておきますけど、僕の出来る範囲内でお願いします」

「分かっているよ優真君。何、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。ただ一言、私に告白をしてくれないかい？」

……………はっ!?

何を言っているんだこいつ。頭がおかしいんじゃないか!?

告白? 何でそんな罰ゲームみたいなことをしないといけないんだよ。今時そんな罰ゲームは小学生でもしないんじゃないか? 大体告白ってどういう事だよ。全然繋がらないっていうか、繋がってほしくない。こんなものが繋がってしまったら、もう僕は本気で悩まないといけない。何に悩むって? そんなもの、この世界についてに決まっているじゃないか。だってあの生徒会長様だぞ!! 言っちゃなんだか僕は彼女を甘く見ていたのだろうか。いやでも……。

ちょっと待て。

もっとシリアスな雰囲気なところじゃなかったか? っていうかそんなんの良いならわざわざ拘束するなよ。

と一気に色々考えたせいか頭がぐるぐるしてきた。

言われたことを再確認するべきだ。もしかしたら僕の耳、もしくは頭がおかしくなっていてそう認識してしまっただけだろう。

あまりにも馬鹿馬鹿しい考えをしてしまった僕。

一応謝っておこうか。うん、それがいい。

彼女の発言を頭の中で改竄してしまったのだから。

「すみません。僕の耳は少し悪いみたいで。もう一度言っていただけないでしょうか？」

「優真君、私も女の子なんだよ？ 告白してくれなんてあまり言いたくないよ」

馬鹿か？

本当に馬鹿なのか？

さっきは勢いだけでこいつなんて言い方してしまったけど、もうそれ以下の評価で良いんじゃないか？

「たった一言だよ。それで彼女の拘束の一部を解くんだから安いものだろう？」

確かに彼女の言う通りだ。今は周りに誰もいないし、さっさと終わらせてしまうのが得策だ。

まあ問題は僕は告白をしたことがないから、上手く出来ないと言うことなんだけど……。

悲しく寂しい青春だと思う人もいるかもしれないけど、必要ないものはいらない。

邪魔なものは邪魔でしかなくて、急に役に立つなんて事はない。

「天童寺さん、僕はあなたが好きです」カチッ。

結構勇気がいるな。

コロコロと彼氏彼女を取り替えている学生の気がしれない。

にもかかわらず、天童寺さんの目は僕をじっと見つめている。何だろう。たぶんこの表情は納得していないぞということを言いたいんだろうけど、正直僕に出来ることはこれが精一杯じゃないだろうか。

「優真君はムードがないよね。そんなことでは駄目だよ?」

「手錠と足枷をはめられてどうやってムードを作るんですか?」

「せめて名前で読んでくれないと駄目だよね」

逃げられた。完全に逃げやがった。

でもまあ彼女の弱点をつけたのではないかと少し嬉しくなっていたり……。

馬鹿馬鹿しい。

こんな事では僕までこの頭の中の色を変えられかねない。

年中ピンク色の馬鹿にはなりたくない。

言い直しか……。

これについてはある程度こちらが譲歩しよう。これ以上軽い条件はないだろうし、エリスさんも名前なんだから、名前で呼ぶくらいどうってことない。

「撫子さん、僕はあなたを好きになってしまいました」カチッ。

「優真君……」

牢屋越しの告白。

ただでさえおかしなシチュエーションなのに、僕が棒読みになってしまっているから余計におかしな光景だ。

何でこんな事になっているんだろう。

僕にも人並みの羞恥心はあるわけだし、隣でエリスさんが縛られているこの状況でこんな罰ゲームだなんて。

まあいい。これからはこんな事もないだろうし、最初で最後の女の子への告白だ。

これで文句もないだろう。

「天童寺生徒会長、もういいですか？」

「じー……」

えっと……？

何で僕は睨まれてるの？

なんか突き刺さるような視線が連続しているんだけど。

なにか駄目な箇所があったのかな。って言っても僕の知っている告白というのは『好きです』って言うことなんだけど……。他にも何かする必要があるのかな？

分らない。僕は誰かに告白したことなんてないし、勿論されたこともない。

それにどこから聞こえてくるのか分からないけどカチカチ鳴って少し気が散る。

「じー……」

もうどうしろと言うのだ。

僕にはこれ以上のことは出来ないと思うんだけど。

うーん。

たぶん言葉は大丈夫だと思う。名前にさん付けが駄目なのかな。確かに呼び捨てで名前を読んでいる人たちがいることは知っているけれど、別にさん付けが駄目だと言うことではないはずだ。けど、それしか思い当たらないな。

よし、これで本当に最後だ。

「な……撫子。僕はあなたが好きです」カチッ。

「……………」

「世界で一番愛しています」カチッ。

「ありがとう。でもごめんよ、私は好きな男性には自分から告白したいんだよ」

おいおいおい！！

なに勝手に告白させておいて振ってるんだよ。

……まあいいだろう。こんな事で怒っていたら本当に僕が彼女に恋慕の感情を抱いているようにとられかねない。そんな訳の分からない誤解はされる前に、されないように行動することが重要だ。

「……もういいでしょう。お願いします」

僕の言葉に満足したのか、ここから天童寺生徒会長の行動は早かった。

すぐに目隠し、耳栓、猿轡を外して牢屋の外に出ていく。

でもその場で立ったままじっとしていることを見ると、二人で話してくれる訳ではないようだ。

話しさえ出来ない状態だった事を考えれば、一応マシと言える待遇に変わっただろう。

「えっと……斉梨、さん？」

「エリスさん、すみません」

少し混乱しているエリスさんを置いていく形だけど、とりあえず先に謝っておく。これからの事を考えればたぶん間違った事はないと思う。

だからこの謝罪は今までのこの待遇へのものだ。

「彼女は僕の知り合いなんですけど……僕達を仲間になりたいそうです」

「えっ!! その話、受けたんですか!？」

「いえ、まだです。でも正直僕達に拒否権はないんです」

横目で彼女を見ると、タイミングを見計らっていたように笑顔で手を振ってくる。

無視した。

今はそんなことにいちいち構ってられるほど時間はないし、やる気もない。

散々無駄な遊びに付き合ったのだから、これくらいの無礼は許してくれるだろう。正直僕もいっぱいだから許してほしい。

「僕は仲間になった方が賢明だと思います。ここで戦うには僕が足を引っ張ってしまいますし、何よりエリスさんがいくら強くても僕達が袋の鼠であることには変わりません」

「私もそう思います。けど、斉梨さん覚悟はいいですか？」

僕の意見を全面的に肯定してくれるエリスさん。でも、その最後には一言ついてくる。

それはこの裏の世界へ足を踏み入れるだけでなく、歩いていくために必要なもの。

歩いていきたいと思うのならば、自分の見たものを認め、受け入れ、乗り越えたいと思うのならば。

絶対に必要になる。

さながら水のように、生きていくために必要なもの。

でもそんなものは初めから分かっていたんだ。

これが何を意味しているかも、理解している。

その瞬間がきた時にどうするかも、分かっている。

「分かっています。僕は大丈夫です」

だから僕は言い切る。

一切迷うことなく、一切間を置くことなく。

僕の表情から何かを読み取ったのか、エリスさんはそれに対して無言で頷くことで返事をしてくれる。

「話は纏まったようだね」

笑い続けている彼女の顔は見飽きることはない。
でもその表情からは何を考えているかは分からない。

僕達を利用しようとしているのかもしれないし、純粹に助けようとしてくれているのかもしれない。
それでも何を考えていようと関係ない。

利用しようとしているならば利用すればいい。
助けてくれるならば助けてもらおう。

ただ、僕達は一筋縄ではないかない。
何かを画策しているなら、その策をまとめて利用してやろうじゃないか。

何も失うことのない僕に、何かを躊躇う弱さなどない。

「ようこそ、私は君達を歓迎するよ」

ここからが本当の地獄なのかもしれない。
望むところだけど、そんな考えが僕の頭をよぎった。

思いの覚悟（後書き）

遅くなってしまいました。7話です。

なかなか多忙な現実もやや落ち着いてきており、更新も早くなるのではないかと思っております。

好きなキャラもどんどん増えてきて、書くのが楽しくなってきました。

あまりの文才のなさに泣きそうにもなっているんですが……。

頑張っていくのでよろしくお願いします。

積むは難し、崩すは易し

いつもと同じ道、同じ町並みにもかかわらず、その目に写る光景は全く違うものに見えてくる。

辺りは暗い。

時間が夜だということは勿論一番の理由だが、それ以上にその天候が最大の問題であった。黒く厚い雲が空を覆い、普段は町を明るく照らしているであろう月を隠している。

ただでさえ夜は暗い。その夜の中で貴重な光源の一つである月明かりを失ってしまうという事は、太古の人間にとってはどういう意味を持つのか。

そんなどうでもいい、訳の分からない事を考えながら優真は夜の町を歩く。

その右手には鞘のない抜き身の刀が握られている。

「あの人、絶対こうなるって分かってたな……」

夜の町を歩きながら優真は一人呟く。周りには誰もおらず、道は優真だけで占領しているような状態であった。

が、周りに誰もいないにもかかわらず、優真の警戒心は薄れるどころか最大限まで高まっていた。

時間は数十分前に遡る。

牢屋から出ることの出来た優真とエリスの二人に待ち構えていたものは手厚い歓迎、であるはずがなく向けられるものは隠す気のない剥き出しの殺気。目に見える態度はあからさまに嫌悪を示し、ともすれば今にも襲いかかりそうな者さえいる。

漫画やアニメの主人公のような力は一切持っていないと自ら理解している優真でさえ、『これが殺気なのだ』と理解できるほどだ。

そんな中で簡単な自己紹介を済ませる二人。

他人の見解や評価というものにほとんど、というより全く興味を持っていない優真は気にした様子もなくどこか飄々とした態度をとっていたがエリスはというとそうはいかない。

周りの視線を気にし、他人と顔を会わせる度に頭を下げて謝っていた。

尤もそんなエリスに返ってくる言葉はなく、ただ憎しみの込もった視線を向けられるだけだったのだが。

そんな中で優真達と話をするのはただ一人。天童寺撫子だ。

「あの……あなたが副隊長なら隊長さんがおられると思うんですけど」

「優真君、その表現は正しくないよ。ここにいる者は皆同等だよ。誰が上でも下でもない。と言っても、トップは確かにいるんだけどね」

優真の話にも優しげな笑みを浮かべながら言葉を返す撫子。

どこか苦笑じみたその表情の意味は、優真とエリスの二人には伝わらない。どころか撫子自身もあまり伝えようという気がないといった風だ。

「ちょっと待っていて。話を聞いてくるよ」

撫子の行く先を阻む理由などどこにもない優真達は、その場で立ち尽くす形で撫子を見送る。

高校の教室よりも一回り大きい個室。白で統一された部屋の中には無駄なものは一切ない。

無駄なものだけでなく、その部屋には物と言うものが全くなかった。

机や椅子はもちろん、窓さえないその部屋では外との繋がりはたった一つの扉のみ。

「……隔離されたのかな」

「えっ！？　どうかしましたか？」

「いえ、何でもありません」

一人呟いた優真の言葉はエリスには届かない。

聞き逃したことに少し不安になっているエリスに首を振って答えるが、エリスの不安そうな表情は変わらない。

しかしそれを優真が更に話をして解消させることはない。ただ何をすることもなくその場に腰を下ろし目を閉じて撫子の帰りを待っている。

だから周りに何も無いにもかかわらず、そわそわしているのは寧ろエリスの方だった。

話したいのに話せない。何度も口を開こうとするものの、その度に躊躇い一人でこそ動き続けている。

「あの……えっと……その……」

その状態が何秒も続けばさすがの優真も気がつく。閉じていた目を開けて、正面からは向き合わずに目だけでエリスの姿を捉える。が、何度も躊躇うエリスの姿に軽い溜め息をつく。

（何か話したいことがあるなら早く話してほしいな……）

更に数秒間その状態は続く。エリスの躊躇い、そして焦る気持ちは徐々に伝染していき優真自身もそわそわしてくる。

「こほんっ。エリスさん？」

「ひゃ、ひゃい!!」

「……………」

敢えてこちらから話しかけたにもかかわらず、帰ってきた答えはやけに可愛い焦った返事。

一人の人物と関わるということに関して言えば、エリスは間違いなく優真と長時間関係を持っていると言えるのだが、残念ながら優真にはそこまでの対人能力を持ってはいなかった。

結果、部屋の中は恥ずかしさで顔を真っ赤に染めたエリスは顔を伏せ、その対処法を知らない優真は苦笑いを浮かべながらじっと待つというなんとも奇妙な空間と化していた。

が、その程度の気まずさで優真が話を止めることはなく、再び言葉を交わそうと試みる。

「エリスさん、どうかしましたか？」

「あ、あの!!」

「……何ですか？」

エリスから始めたかのようなその話し方に少なからず言い返したい気分になる優真だったが、さすがにそこは口を挟まず、話を続ける。

「えっと……あの人とは仲が良いんですか？ あ、あの!! そんな変な意味じゃないんですよ!？ ただその、やけに馴れ馴れしいなーとかそんなことを思ったり思わなかったり……」

何を言われるのかと身構えていた優真からすればその問いは拍子抜けもいいところだが、あまりにも必死に話しているエリスに少し押されてしまう。

尤もそのせいで後半、というより中盤辺りからほとんど話が聞こえていなかったのだが。

「仲がいいというほどでも。ただ少し顔見知りなだけで」

「優真君、ただの顔見知りだなんてその評価はあんまりじゃないかい？」

背中に感じる視線。

威圧を感じるほどの存在感。

それほどの人物は、この場においては一人しかない。

だからこそ分かりやすいのだが、分かりやすいからこそ優真は動けずにいた。

その視線に体が凍りついてしまった。

「いえ、その……」

「優真君？」

「斉梨さん？」

言いたいことは色々あるのだが二人からの言葉に何も言えなくなる。

そんな中、優真の頭の中に浮かんでくる言葉は一つ。

「……『前門の虎、後門の狼』ってこの事なんだ」

「何か？」

「……何でもないです」

優真に選べる言葉など残っているはずもない。

「トップは今、手が離せないそうだね。また今度だそうだよ」

話が先に進むことに対しては文句のない優真もその視線にだけは意見があるのだが、それを口にするほど愚かではない。

「さて、君達を仲間にするにあたり納得しない人もいるみたいだね」

「……あなたも魔物がどうか言うんですか？」

「ひ、斉梨さ——」

「どうなんですか？」

エリスの言葉を遮るように前に出る優真。撫子と向き合うことなど全くした事がなく、またしたいとも思わない優真にとっては珍しい行動だった。

その行動に驚いたのは撫子だけではない。

優真自身も、他人に楯突くという行為を行っていたことに内心驚いていた。

尤も、その行為を自ら進んだことに気をとられ過ぎて、主に他人のために動いているという事までは気が回っていなかったが。

それでも尚、優真の睨み付けるような目付きは変わらない。

柔らかな撫子の表情に流されることのないその顔つき。返答次第で

荒事も辞さないと言ったところだろう。
が、目の前に立つのは天童寺撫子。

その事実だけで既に優真は敗北した気分さえなる。

「そんな事は言っていないよ。ただそう思う人もいるってことさ」

「それじゃ同じ——」

「そこで、優真君にはある仕事を行ってほしい」

そこで撫子の口から出た言葉に優真よりもエリスの方が驚いてしまう。

当然だ。その内容が『吸血鬼を殺す』というものだったのだから。

しかも世界の裏側に精通しているであろうエリスではなく、つい先程までただの男子高校生だった優真にだ。

そしてそれこそが二人の生きていけるであろう最善の策であり、撫子達の側から見ても許容できるラインを最大限まで落としての策。優真達からすれば吸血鬼を殺すことで魔物の仲間であることを否定する材料となる。

そして撫子側からすれば、その証明と優真の強さを知ることが出来る。

境界者であるエリスならともかく、その眷族でしかない優真などいようといまいと同じこと。

吸血鬼を殺せるのであれば多少なりとも戦力に数えることが出来る。もし死んだとしても所詮はそこまでだったというだけの事。

注意すべきは境界者であるエリスただ一人なのだ。

だからこそエリスを一人で残し、優真を行かせる。

「分かりました」

大して内容も聞かないままに返事をする優真。

その顔には決意や覚悟といったものは見えないが、同時に諦めや絶望も見えてこない。

とここまではまだ良かったのだが……。

肝心な考えが歩きながらの優真の頭に浮かんでくる。

それがすなわち。

「吸血鬼ってどこにいるんだろう」

という事だ。

今していることと言えば近所をただ歩いているだけ。何か特別なことをしているわけでもなく、敢えて特殊なことをしていると言えば優真自身が帯刀しているということだろう。

だが、それは自らの身を守るためにとエリスが渡してくれた物であり、自分の所有物ではなかった。

それにこうしている事が『吸血鬼に会える条件』というわけではない。と優真が考えるのは当然の事だ。

当然の事なのだが、それは唐突に優真の前に現れた。

「さて、あなたの血を頂けますかな？」

「……………」

——絶句。

優真を支配したものはそれだった。

あまりに唐突すぎて、その出会いに対して反応することを忘れてしまっていた。

あまりに突然すぎて、言葉を発することを忘れてしまっていた。

ただの中年男性にしか見えない。悪い言い方をすればどこにでもいそうなおっさんだ。

だからこそ警戒心を高めなければいけないのだが、優真は戦闘のプロではない。どころか戦闘の初心者と言うことさえ憚れる。

それほどまでに弱く、脆く、危うい存在。

完全に気が抜けてしまっていた。

そしてその油断は、魔物にとっては格好の餌食となる。

「あ”あ”あ！！」

「弱い！！　あまりに弱すぎる！！　その右腕に握っている物はただの飾りですか！？」

一瞬。その間だけで左腕は肘から先が千切れて男の手の中にあった。咄嗟に右手の刀を離して傷を押さえる。

優真が気を抜いた時間は決して長くはなかった。が、今の状況において時間の長さは関係ない。必要な事柄は有るか無いかの二つだけである。

ましてやそれは隙などという格好のいいものではない。ただの油断。目の前に立つ男すら関係していない。

それほどまでに優真は弱かった。

しかしそれはあくまで元の優真が弱いことに過ぎない。

「っ!! あなた、一体何を!？」

「あ”あ”あ……あ？」

慌てる男を前にし叫び声を上げていた優真も疑問を浮かべてしまう。押さえていた傷がなくなり、右手を押し退けて新しく生えてきたからだ。

男の焦りを前にしても優真はそれどころではない。

自身の体が化物になったという事は理解していた。

あらゆる器官の能力が劇的に向上した事などがその証明であり、何よりの変化だった。

しかしここまでとは理解していなかった。

どこの世界に無くなった腕がすぐに生えてくる者がいるというのだ。

それは最早、化物の域さえ越えているのではないかと思わせるほどに。

「なんだよ、これ……」

いつの間にか消えた男の手にあったはずの腕と自身の腕を交互に見る。が、いつまで見ても男の手の中に腕はなく、自分の腕が消えることもない。

「あなた、何者です？」

明らかに優真の存在を怪しむ男。

それだけで優真は理解する。

切り落とした腕がなくなることとは、急に腕が生えてくることは、化物側からしても異常なのだと。

自分が、異常で異形の存在なのだと。

「ははっ、はははっ……」

自分の両手を見たまま体は固まる。

優真の口から言葉は何も出てこない。

出てくるものと言えば乾いた笑い声。愉快さなど全くなく、相手を馬鹿にしたような笑いでもない。

どこまでも自虐的な笑い声を発したまま、優真は落とした刀を再び拾い上げる。

斉梨優真は特別な人間ではない。

これは今は化物であるからという事ではない。

どこまでも普通で、どこまでもひねくれた男子高校生で。

ついこの間までは中学生をやっていたような男の子なのだ。

口では何とでも言える。が、それを目の当たりにした直後にもいつもと同じ状態でいられるかと問われれば、その答えは否であり今すぐに壊れてしまってもおかしくはなかった。

そんな彼を引き留めていたものはやはりただ一人の存在。

命を助けてくれて、この道へと連れてきた彼女。

彼女の存在が何故か優真の頭の中に浮かんでくる。

だからどうかしたという事はない。

彼女の姿が頭に浮かんでくる理由も分からなければ、その意味さえも分からない。

「はははっ!!」

「何がおかしいのです!!」

頭に浮かんでくる姿を振り払い、男と再び相対する。

自分でも何故出てくるのか分からず、それでいて止まることのない笑い。

そのせいで夜の町には笑い声が響くが男は不快感を露にする。

「はははっ……あなたは吸血鬼なんですよね？」

刀を両手で構え剣先を男に向ける。
他人にもものを聞く態度でないことは当然の事、たとえ顔見知りだとしても話をする態度ではない。

優真のその言葉には大した疑問はなく、自分の考えを確認しているに過ぎない。そして仮に男が吸血鬼でなくても、優真のやることは変わらない。

今の優真には、選ぶことの出来る選択しなど存在しない。

それすなわち見敵必戦。
それ以外の選択肢はなく、故にそれを選ぶ。

「すみません、恨みはありませんけど……」
「どうやらただ死ぬだけでは足りないようですね」

男の目が細まる。

途端に瞳の色が染まっていき、一気に存在感が変貌を見せる。

闇に染まる姿。
暗闇に浮かぶ赤い双眼。

その赤が血を連想させ、優真の体が徐々にざわついていく。
その手に震えは一切ない。
剣先はじつと男の方を向き、研ぎ澄まされた刃は闇の中で街灯の光を反射する。

「ぐっ……」

刹那、男の姿が消え優真の右肩が抉られる。

その勢いに負け一歩下がるがそれだけでは終わらない。

姿を捉えたと感じた瞬間には、既に攻撃を受けた後。次々と傷は数を増していきく。

しかしその場に血の池は出来ない。

池どころかアスファルトの上には赤い色すら見ることが出来ない。

「一体何をしたらそこまで化物になれるんですかね？」

塀の上に立ち、優真のその回復力を訝しむ男。

全くの不可知の敵に決定的な一撃を与えられずにいた。

しかし、その回復力の高さゆえに優真には一切傷がない。

付けた直後から治る。その存在に男のストレスも溜まっていく。

その間も優真はただその場で刀を構えてじっと前を見つめている。

「その体、少々厄介ですね。これ以上はなさそうですし、一撃で終わらせてもらいましょう」

後ろからの渾身の一撃。

心臓を正確に狙ったその右手は、しかしながら優真の傷つけることは叶わない。

「暗くてよく見えなかったんですけど……あなたのお陰です」
「がふっ……あなた、わざとですか」

貫く刃。流れる血。

振り返ると同時に、男の攻撃に合わせたような動きはただ突き刺すという簡単なもの。

剣技などという格好のいいものではない。

見よう見まねの動きですらない。

しかし確実に、正確に男の左胸を貫いている。

「残念ながら、この程度で私は――」

刀を掴んで引き離そうとする男の言葉が途切れる。

視点が定まらず、口からは血が溢れるように流れていく。

体、全ての血液が消失してしまうのではないかと思ってしまうほどの量が流れ、地面に広がっていく。

どこまでも赤く、優真の体を刺激する。

「はぁ……はぁ……はっ」

優真の目から男の姿が消える。

目の前にいるにも関わらず、その目が見ているものは流れる血のみ。

理由は簡単。

それは優真が人間ではないから。

吸血鬼の眷族は吸血鬼となる。

ならば境界者の眷族はどうなるのか。

解答は誰にも分からない。しかしその体に、血肉に吸血鬼が混ざっていることに変わりはない。

さらに優真は先程から何度も傷を治している。傷を治すということは、それだけでエネルギーを使用するということ。

それはつまり――腹が減るということ。

空腹を解消するためには、何かを食する必要がある。そのための食料は目の前にある。

「あ”あ” あ!! があ”あ” ぐっ!!」

「はぁ……はぁ……んむっ」

そして優真は首元に食らいつく。

刀を抜くことも忘れ、戦っていた状況も忘れ、ただ一心にその血を飲んでいく。

何も考えない、否、考える事が出来ない。

頭は痺れ、自分が行っている行為さえその意味を理解できない。

その血の味のみが頭の中を占める。

手を汚し、服を汚し、口元を汚しながら、ただ飲み続ける。

「あなた、も吸血……ああ!!」
「んむ、あむっ……んちゅ……んんっ……はあ……」

優真の口が男の首から離れる。

口の周りを血で真っ赤に濡らし、制服にも溢れた血がベッタリと付着している。

満足したのか、その表情は笑顔。だが、目は虚ろでどこを見ているか分からない。何を考えているのかも、何がしたいのかも分からないその存在はまさに野性的で本能的。

その糧となった男はといえば刺さった刀をなんとか引き抜き、息も絶え絶え。

辛うじてではあるものの命を失ってはいなかった。

しかしそこまでだった。

空腹を解消した優真の目の前で悶える男。その男の体を当然のように踏み潰す。

ただの人間の力ではなく、半分が吸血鬼の体で。

「あ”があ……」

「あはっ……あははははっ!!」

狂ったように笑いながら倒れている男に攻撃を続ける優真。

徐々に肉塊へと化していく男。血が飛び肉が飛び、優真の体へばりついていく。

本来、この程度であれば吸血鬼が死ぬことはない。
時間に個人差こそあるが、体に穴が空く程度の傷は治すことが出来る。

出来るがそれは全快であった場合の状態だ。ほとんどの血を吸われ、失った状態で同じことが出来るはずがない。

「あははははっー」

笑い声が響く。

完全に息の根を止めるためなのか、その行動は止まらない。

「斉梨さん……」

「優真君、君はそんな事がしたかったのかい？」

優真の前に立つ二人。

片やその表情を曇らせ、片やいつもの微笑が消え真剣味を帯びている。

二人の視界に入るは血の海に佇む一人の吸血鬼。

理性などとうの昔に消えてしまっている優真を占めているもの。

それは破壊衝動だった。

目の前のものをただ破壊し、気の向くままに、気が済むまで暴れまわる。

その対象は何でも構わない。

たとえば毎日顔を会わせるほどの知り合いだろうと、たとえば死にかけてたところを救ってくれ自身の歪みを無償で引き取ってくれた命の恩人だろうと、その行動が変わることはない。

「あはっ？ あははははっ！！」

「優真君、それ以上吞まれたら駄目だ。始末しないといけなくなる」
「始末って……話が違うじゃないですか！！」

掴みかかろうとするエリスを撫子はいつもと同じ微笑で一蹴する。

「私としても優真君を殺したくはない。でも魔物に堕ちてしまったら仕方がないよ。それが私の……課せられた使命だからね」

「っ！！」

撫子の話が終わらないうちにエリスは走り出していた。

そして、撫子がそれを止めようと動くことはない。ただその表情は微笑には違いないが今までの雰囲気とはまた違ったものとなっている。

「あはははっーは！！」

「斉梨さん、もういいんです。一緒に帰りましょう」

ゆっくりと近付いていくエリス。

話しかけるものの優真がそれに応える事はない。どころか、二人の間で会話が成立することすらない。

それでも尚、言葉をかけ続ける。
戻ってこれると信じているから。

「斉梨さんは頑張りました。もういいんですよ。一緒に帰りましょう」

それでも状況は変わらない。
光が差し込んでいるかさえ怪しいその虚ろな瞳は何を映すのか。それを知ることさえ出来ない。

と同時に優真はその爪を突き立てて突っ込んでいく。
人間の時とは比べ物にならないほど鋭く、肉を切り裂くには十分な得物となっている。

が、それでもエリスは両手を広げて優真を受け入れる。いつかのように、その身を合わせ、抱き合う。

「斉……優真さん。独り、じゃないんですよ。私はここにいます」

前と違うこと。

それは優真が笑い続けているということ、それも勿論だが何よりも優真の右腕がエリスの腹のど真ん中を貫いているということにあった。

境界者として万能ではない。勿論回復力を有してはいるが、ある程度傷付いても大丈夫だからといって傷付いて良いわけではない。回復力があるというだけで、傷は痛むし出血は酷い。

「あ……は？」

「大丈夫です……。私も同じですから……」

力が抜けていく感覚が手に取るように分かる。境界者といってもその本質はやはり吸血鬼。血を失うことで力を失っていく。

抱き合う姿は見方によってはエリスが優真を両手で拘束しているようにも見える。

それでも尚、その体からは確実に力が失われていく。

「優真君、君を待っているのは彼女だけじゃないんだよ……帰っておいで」

そこで初めて、撫子が動き出す。

しかし、走って優真の所まで行くというような直接的なものは一切しない。

その場でしゃがみこみ、どこからか出したチョークを使い、道路に直接円を描いていく。

円だけではなく、その中、外に様々な文字や紋様を描き足し完全な

ものへとしていく。

その名は魔方陣。

魔術的な理論を組み込み、その意味を投影することで魔術を発動させる。

簡易的なものから複雑なものまで、その紋様は人により多種多様。高度な術になればなるほど、必然的に複雑なものになっていく。

その場ににいるのは天童寺撫子。

その才能を十二分に発揮させる事こそが彼女の日常である。

それはどんな状況においても変わることはない。

「夢の果て、降り積もるは言の葉の数、重ねた影に結びの鎖を――」

次々に言葉を紡いでいく撫子。

重ねていく言葉は、まるで詩を読むように。まるで歌を歌うように。

紡ぐ言葉に形を与え、織り込んでいく。

「時の環を止めよ、廻る時間を手の中に、闇は光を飲み込み、光は影を食い尽くす――」

言葉に反応するように魔方陣は淡い光を放っていく。

その様子を確認した撫子は、止めることなく迷うことなく仕上げにかかる。

「その姿を目に焼き付けよ、闇を統べるは光の使者であれ」

「あは？ はははは……あ”あ”あ”あ！！」

その瞬間、詠唱は完了する。それはすなわち、撫子の魔術の発動を意味する。

「ま、待って……下さい。優真さんはまだ……」

「安心して信じてくれないかい？ 本当に私は優真君を殺したくはないんだ」

優真の体を貫く無数の鎖。

真っ白な鎖は優真の体を持ち上げてエリスから引き離すが、当の本人は未だ正常だとは言いがたい。

が、既にその目は閉じられ、動く様子すらない。

眠っているようにも、息を引き取ったようにも見えるその姿は、一番近くにいたエリスでさえ見るだけでは確認できない。

その状態が大丈夫で異常がないということは、撫子の言うことを信じるしか他ない。

会って時間は全く経っていない。その彼女を信じるしかない状態。完全に信用が出来るわけではないが、それを信じるしかなかった。

齊梨優真。

彼の人生で最も長い夜は、未だ終わったわけではない。

積むは難し、崩すは易し（後書き）

人は弱い生き物です。

鳥の翼や嘴もなく、虎の牙や爪もありません。

ただ持っているものはその頭脳。

その一つが大きすぎるが故に、それが最大の弱点にもなり得る可能性は高く、ともすれば弱点でしかない場合もあります。

その弱点は壁となり、人の前に大きく立ち塞がる。

それが辛いと分かっているが、尚その壁を乗り越えなければいけないのが人間の定めと言ってもいいかもしれません。

第八話です。

少なからず戦闘シーンもありましたがどうでしたでしょうか？

急に三人称に文体が変わり読みにくく感じた方もいるかもしれません。

戦闘シーンもあまり格好良さは伝わらないようですね……。もっと精進しなければ。

次回も頑張ります。

よろしく願います。

向かえるモノ

……ここはどこだろう。

とても暗いの、とても熱い。

暑くはないけれど、熱い。体の奥から焼き付くされているようだ。流れる血が沸騰しているのかもしれない。

とそんな事を考えながら、もう一度辺りを見渡してみる。

どこまでも暗く、闇が広がっている。

僕は今立っているけれど、この足場だってどうなっているか分からない。もしかして、僕は宙に浮いた状態にあるのだろうか。

いや、でも足に感覚はある。自分が立っているという自覚がある。

でも自分の感覚なんて当てにならない。脳が認識さえすれば、そこに何かがあると認識さえすればそこに何かがあるという感触を得ることは出来る。

視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚。第六感なんて不確定なものは脇に置いておくとして、これら全ては脳が認識すればたとえ何もなかったとしても、感覚を得ることが出来るはずだ。

それこそ、熱くないストーブで火傷をしてしまうように。

尤もそうなるためにはちゃんと条件が必要だけど。火傷をするにもストーブがないと話にならない。

つまり何が言いたいかというと、この状況での立っているという自覚は信用しない方がいいということだ。

もしかしたら、一步前に進んだだけでこの感覚はなくなってしまいかもしれない。
もしかしたら、一步前に進まなくてもこの感覚はなくなってしまいかもしれない。

そんな事、誰にも分からない。

それにしても熱い。服を脱ぎ捨ててしまいたくなるほど体が熱い。実際脱ぎ捨てたところでこの熱さに変化はないだろうから脱がないけど。

えっと、何をしていたんだっけ？

確か学校へ行く途中で女性に会って、学校で授業を受けて、学校から帰った後買い物に行って、買い物からの帰りに男性に教わられて、エリスさんに助けてもらって……そうだ!!

こんな事をしている場合じゃない。

僕は殺し合いをしていたんだ。あの男性を、吸血鬼の男性を殺そうとしていたんだ。

なのに、こんな所で道草を食ってるなんて……。

「……う……さ……」

そんな事していると、どこからか声が聞こえてくる。

どこからなのかは分からない。

声といっても途切れ途切れの音が流れているといったもので声とは

言い難いかもしれないけど、僕は確かに声だと認識できた。

だってそれは、エリスさんの声だったから。

会って時間は短いかもしれないけれど、声を判別できるほどには話したし、関わっている。

でもどうしようもない。

声が聞こえたから何かが起こるというわけでもない。まあこの暗闇だ。声が聞こえたという事こそが、その『何か』だと言われても反論の余地はあるが納得はできる。

だけどこれじゃあ何の活路も見出だせない。

せめて声のする方向が分かればいいんだけど、生憎さつきは声が聞こえたという事に気をとられ過ぎて方向まで判断することが出来なかった。

せめてもう一度聞こえれば「……ゆ……さん」

……聞こえた。

完全に聞こえた。

なんてタイミングがいいんだ。少し良すぎて恐い。

確かに声のする方向を確認することは出来た。僕は聴覚が凄く良くなったことを理解したけれど、やはりそこを動くことが出来なかった。

この暗闇だ。一寸先どころか横も後ろも闇しかない。一寸がどれくらいの距離を言っているのかは寡聞にして知らないけれど。

そんな事が言いたいわけじゃない。
早く行かないといけないんだ。

でも……足が動かない。暗闇の中に身を投じることが恐い。
今あるこの足場も一歩前に進んだだけでなくなってしまうかもしれない。今はまだ立っていられるけれど、この後も同じだとは限らない。

はぁ……情けない。

自分がこんなに弱いんだと実感できる。

くそっ……馬鹿馬鹿しい。

だからなんだって言うんだ。僕が弱いことなんて今に始まったことじゃない。ずっと弱いままだし、これからだって強くなることはないだろうし。

なら、何も怖がることなんてないじゃないか。自分で自分の事を分かっているなら。自分の弱さを自覚しているのなら。

僕は一歩前に踏み出した。

それは、自分の中に芽生えたかもしれないもの。
ほんの小さな道標。

情けない僕が初めて見せる——勇氣。

「ちょ……えっ!? うわぁぁぁ!」

「ゆ、優真さん!? 大丈夫ですか!」

一步前に踏み出したら見事に足場がなかった。真っ逆さまに落ちたと思った僕だけど、叫び声をあげた時には目の前にエリスさんの顔があった。

結構な大声であつたにも関わらず、エリスさんは耳を押さえることもなく目の前にいる。

「……………」

「大丈夫ですか？」

思わず黙ってしまう。

だって……さ。自分の今の状況が少し分かってしまったから。

僕の周りには警戒心を露にした数名の人達。全員ではないけれど、何人かは顔に見覚えがある。あそこで挨拶をした時にいた人達だ。尤も、彼らのそれは警戒心なんて生易しいものじゃない。その目は語っている。

無言だけど、否、無言だからこそ分かる。

『殺すぞ』と言われていることが。

僕はたぶんあの戦いには負けかけた、いや負けたんだろう。

刀を刺したところまでしか覚えていない。そこから先は思い出せない。きっと彼らが助けてくれたのだろう。

いや、『彼ら』ではないか……。僕を助けてくれる人物が複数名いるとは考えにくい。僕は彼らにとって生きていて都合の良いものじ

やない。死んで当然、といったところだし今すぐ殺したいと考える人だっているかもしれない。

そんな僕を助けようとするなんて、彼女をおいて他に誰がいうか。あの状況下で外に出ることが可能かどうかはさておき、やはりエリスさんだろう。

もしくは……。

「おはよう、優真君。元気そうだなによりだ」

平然と挨拶をしてくる彼女。

天童寺撫子。

天童寺生徒会長なら、あるいは……。

馬鹿馬鹿しい。僕は何を考えたんだ。自分でも分からない。

自分の命が助かったこと良いことに、呑気に『誰が助けてくれたんだろう?』だなんて。

頭が悪いにもほどがある。いや、これでは頭の悪い人に失礼だな。

僕は頭が悪いんじゃない。

腐っているだけだ。

徐々に進行している、なんて可愛い表現を使うことも出来ないほど。

なんて自分自身の事を悲観している場合じゃない。

今すべき事は、正しい状況の把握。

そしてこの囲まれた状況を打開するための策だ。

正直、天童寺生徒会長を出し抜けるような案がこの短時間で出てくるとは思えない。

あの人からすれば、僕が何をしたところで全て想定範囲内だろう。だけど彼女以外なら、そうはいかないはずだ。

人の考えを読むことなんて、出来るはずがない。

少しでも隙が出来れば、なんとかなる可能性はある。

「優真君、そんなに私達の事を疑わないでくれないかい？ 私達は優真君の味方だよ」

「……………」

くっ……。ばれてる。

周りの人達も明らかに態度が変わっている。この人の突拍子もない発言にもかかわらず……。どれだけ信用されてるんだよ。

まあ良い。今はそんな事よりも策を練らないと…………。

「優真さん大丈夫です。この人達は味方ですから」

そんな事を考える僕だけど、状況は更に悪くなっていく一方。

それにあることか、エリスさんまでもがあちら側についてしまう。

何を考えているんだ？

僕はエリスさんの事も考えて……。いや、これは嘘だ。僕はエリス

さんの事なんて考えちゃいない。

僕は、僕が生き残ることだけを考えていたのだから。

……待てよ。おかしい。

何かがおかしい。

僕の考えている状況と今この風景が噛み合わない気がする。それが何なのか。輪郭がぼやけていて分からないけど、違和感だけは確かに感じる。

何だ？

何がおかしいんだ？

「優真君、そろそろ朝だ。早く用意をしてくれないと学校に間に合わないよ？ 言っておくけど、欠席は駄目だからね」

朝……だと……！？

僕が戦っていたのが夜の二時頃だとして大体二、三時間は経過しているわけか。

その間ずっと寝ていたなんて、無防備にも程がある。今から殺されるかもしれないという時に。

殺されないようにしないといけないけど……。

ちょっと待て。僕は今なんて言った？

『殺されないようにしないといけない』

何で僕は寝ていたんだ？

何で——殺されてないんだ？

「優真君、あんまり女の子を待たせるものじゃないよ。それとも、何か聞きたいことでもあるのかい？」

その目、その口、その表情。全てを見透かしたような態度で天童寺生徒会長は僕に話してくる。

その微笑の裏側には一体何があるというのだろう。

そんな事が頭を過ったけど、今はそれどころじゃない。

彼女の言う通り、僕には聞きたいことがある。先にそれを言われて質問するのは気分的にあまり良くはないけれど、まあその辺は無視しよう。

とるに足りない、ちっぽけで安い僕のプライドの問題だ。

だから僕は口を開く。事実を確認するために。

自分が何をしたのか、正確に把握するために。

「昨日、何があったんですか？」

「さすがは優真君……と言いたいところだけど、あまりにも抽象的な言い方だね。まあ明言を避けると言う意味では君らしいといえは君らしいかな」

はぐらかすように話す天童寺生徒会長。

この人の考えていることを分かるようになるには、一体何年かかるんだろう。なんて全く意味の無いような自問自答を試みたり……。

答えが分かりきっている問いほど馬鹿馬鹿しいものはない。そんな事をして遊んでいる場合じゃない。

「僕は、あの吸血鬼に負けたんじゃないんですか？」

天童寺生徒会長の発した言葉をほとんど無視する形で言葉を続ける。今やることは、やるべきことは、この人と談笑することではないから。

必要なものは結果であって経過ではない。

よっぽど経過が破綻しているなら話は別だけど、そんな例外中の例外みたいな話をしてもし方がないからここは省くでしょう。

つまりは結果だ。

それのみで全ては判断できる。一つ一つの結果の積み重ねがこの世界を構成する。

だからそれが必要だ。

「やっぱり覚えていないんだね」

「覚えている？ 何の話ですか？」

さつきからずっと嫌な予感がしてるんだけど、それが全く消えない。何か重要な前提が間違っている気がしてならない。

「君は勝った。あの吸血鬼は君が殺したよ……君も吸血鬼になるという過程が存在したけれどね」

「ぼ、僕が……吸血鬼!？」

どうということなんだ……。

その前に何でそんなことを覚えていないんだ？

そんなに大きな出来事が自分の身に降りかかったんだ。覚えていないはずがないのに。

……駄目だ。

何一つ思い出せない。刀を刺したところで記憶が途絶えている。

それから何があったんだ。何をすれば、僕が吸血鬼になれるというんだ？

まずいぞ……。これは嘘じゃない、というかこの人は嘘は吐かない。エリスさんも隣にいるこの状況で嘘を吐く意味もなければ、理由もない。

「そうだよ。吸血鬼、血を吸う鬼に君はなったんだ。おっと、この話の続きは学校から帰ってからにしようか」

『学校なんて行ってる場合じゃないだろう』
とは言えない僕。

生徒会長相手にそれを口にするのは馬鹿だ。

そんな事を言った場合の彼女の対応が想像できない。こんなに人と深く関わる事なんて人生の中であると思っていなかった僕がそれを想像できるなら、僕の頭は余程おめでたいことになっているだろう。

そうなのではないかと思いたくないし、実際想像できないという事実が僕の頭の正常を証明していると思いたい。

「学校……ですか」

「君のためなら何度でも言うよ。欠席は許さないからね」

天童寺生徒会長の笑顔。いつも通りの、全く変わることはないその表情は、何か絶対的な力を有している気がする。

くっ……。凄い威圧感を感じる。

距離も遠い、直に触れているわけでもない、にもかかわらずただただ圧倒される。

彼女の言い分は今のところただ一つ。学校に来いということだ。

「僕は、エリスさんの――」

「彼女も転校させるから何も問題はないよ」

「……そうですか」

全てを言い終える前に先回りされる。

っていうか転校ってなんだよ。

普通、ただの公立高校にそんな事が出来るはずがない。

それをしてしまうのが生徒会長だと言われても、それは納得できるものではない。

私立高校ならまだ分からないでもない。お金があればなんとかなる

可能性もあるだろう。

だが、駒木高校は本当に普通の高校だ。だからそんな裏での手回しなんて出来るはずがないんだけど……。

「優真君が心配するのも分かるけどね。その辺りは大丈夫だよ。私の家はそれぐらいの力なら持っているからね」

「……そうですか」

さっきからずっと同じ言葉しか言えてない。というか、筋肉が勝手に動いて自分の意思じゃないみたいな感覚で返事をしている。

家の力って……。残念ながら天童寺家の権力については寡聞にして知らない僕。

でも、そんなに力がある家の人間なら私立高校にいくのが普通じゃないのだろうか。

いくら娘の進路だからといって、否、娘の進路だからこそより良い高校へ進学させようというのが親の心情というものだろう。ましてやお金持ちの家の育ちならば尚更だ。

駒木高校よりも偏差値の高い高校なんていくらでもあるだろうに。わざわざここを選んだ理由が分からない。

別に深く知りたいとも思わないし、何か思惑があろうとなかろうと、僕には関係ない。

他人の事なんて分かるわけがないんだから、分かれようとする行為自体が馬鹿馬鹿しく愚かなものだ。

ならば、そんな事をする必要がない。

「さあ、外で車を待たせてあるよ」

会話を打ち切るような天童寺生徒会長の言葉に僕も口を閉ざす。と同時にちらっとエリスさんの表情を窺う。

自分の事にもかかわらず口数も少なかったし、何かあったのだろうか？

「……………」

ずっと黙ったまま、その表情を変えることはないみたいだ。昨日の今日で自分の立ち位置とか驚くほど変化しているのに全く動じないというのは中々凄いことだろう。

ましてやそこに昼間も行動することが含まれているから余計だ。昨日の朝みたい突然倒れたりしなければ良いけど……まあその辺りは生徒会長に任せよう。何かしらの策はあるだろうし、たとえ無かったとしてもあの生徒会長の事だ。何も心配する必要はない。

ただ一つ気がかりなのは、エリスさんが勉強を出来るのかという話だ。

幸いにして駒木高校の偏差値はそこまで高いわけじゃない。どこかの生徒会長さんのせいで少し高く思われがちだけど、大したことはない……んだけど、それはあくまで一般的に義務教育を受けてきた者の答えだ。

正直、机に向かう勉強をエリスさんがしているとは思えない。

「えっと……学校は大丈夫ですか？」

「……………」

返事はない。

「エリスさん……？」

「……………」

名前を呼んでも返答なし。僕が何かをしたのか？

確かに何度かエリスさんに迷惑をかけた。そして何故か怒っている
雰囲気向けられたことも——その理由が何なのか、正直言っ僕
には皆目見当がつかない。何をすればあそこまで不機嫌になるのだ
ろか——ある。

でも今は違うだろう。僕は何もしていない、というか僕はまだ目を
覚ましたところなんだ。

その間に何かをしたと言われれば言い返す言葉もないけれど、それ
は仕方がない事だろう。

寝言を自分で操作できるのなら、もともと寝ている間に言葉を発
しようとは思わない。

だから僕はエリスさんの肩に手を置き、少し揺すってみた。

が、僕はその前に気がつくべきだった。

これだけ展開が著しい中で微動だにしない奴などいない。僕よりも感性豊かなエリスさんだ。僕が驚いたことに驚いていないわけがなかったんだ。

「……………」

分かりにくいだろうから説明しておく、この沈黙は僕のものだ。彼女のものではない。

……もう説明するのも面倒になってきた。

端的に言うと、エリスさんは気絶していた。

座ったまま。

前を向いたまま。

目を開けたまま。

凄い才能だ。

肩を揺すっただけで、そのまま倒れちゃったから分かったんだけど。

「相当驚いたようだね。目を開けたまま気絶した者を私は見たことがないよ」

僕もないよ。ってかいるならここに来てほしい。

今のエリスさんと同等かそれ以上の衝撃を受けたことになるけど、そんな人はそうそういない。

「どうするんですか？ エリスさん、気絶してますけど……」

ほとんど答えの分かっているような質問をぶつけてみる。

『答えが分かっている』無意味な質問』というわけじゃない。馬鹿馬鹿しいと思うけど。

もしかしたら、彼女から違った答えを聞くことが出来るかもしれない。

そうなるためには、彼女がいきなり発狂するとかそういう原因が必要なんだけど。

「優真君、何か言いたげな顔だね。そうだ、いきなり発狂してあげようか？」

……お願いだから心を読んで会話しないでもらいたい。一体僕のプライバシーはどこにいつてしまったんだ。

「さあ、彼女も制服に着替ええないといけないからね。名残惜しいのは分かるけれど、優真君は出てもらえるかな？」

「え？ ああ分かり——」

「でも仕方がない。そこまでどうしてもと言うのなら、優真君が着替えさせるのを認めようじゃないか」

何を言い出すかと思えば……。

この人は僕の話聞いていないのか？

それに、何で僕がエリスさんを着替えさせるといふ選択肢が出てく

るんだ。そんな事は誰も望んでいないし、僕は何故か既に制服姿だから良いけれど女性を着替えさせるなんて、どこからどう見ても犯罪者じゃないか。

相手の同意——弁解するようで悪いけど、『同意があれば大丈夫だ』なんて事は考えていないため誤解しないでほしい——もないし。

「天童寺生徒会長……あなた——」

「優真君、私をどこかにやろうなんて考えは捨てることだね。残念だろうけど私はここに残らせてもらうよ。年頃の男女が裸で二人きりは許せることじゃないからね」

僕は服を着てるじゃないか!!

とはさすがに言えない。どうせこの人の事だ。今から僕が脱ぐという考えなんだろう。そして、そこまで分ければ、あとは芋づる式に疑問は解けていく。

今するべき事は、これ以上誤解が深まらないようにすることだろう。

「何を勘違いしているのかは知りませんが、僕たちは別に男女の間柄ではありません」

「優真君、そう言って私を遠ざけようとしても無駄だよ?」

むしろ僕が遠ざかりたいのですが、とは口を挟めない。

「何より優真君。君は今ゴムは持っていないだろう?」

「ちよっ!! いきなり何を言い出すんですかあなたは!!」

口を挟んだ方がよかった。

なんだか知らないけど、いきなりの爆弾には僕は対応できない。
ゴムって……いや、何も間違ったことは言っていないんだけど。

「ん? ああ、ゴムというのはコンー」

「言われなくとも知っています!!」

本当に何を言い出すんだ。最近の若い人たちは皆『こう』なのか?
やっぱり日本はもう終わりだよ。女性の口からコンド……いや、止めておこう。こんなことを考えている場合じゃない。

はあ……。天童寺生徒会長のイメージがどんどん崩壊していくんだ
けど、誰か止めてくれないだろうか。このままじゃ……。

このままじゃ、何だ?

何か起こるのか?

馬鹿馬鹿しい。他人にイメージを持つなんて。

ましてや崩れかけたそれを他人に補助してもらおうなど愚の骨頂。

ははっ。自分の愚かさを、馬鹿さ加減を、知ることが出来たのならば、再認識することが出来たのならば、このわけの分からないどうでもいいような会話にも意味があったと言うものだ。

と、僕は自嘲の笑みを浮かべながらさっさと部屋を出ていく。

未だに隣で気絶しているエリスさんを構うことなく。扉の前に立つ
天童寺生徒会長とそれ以上言葉を交わすことなく。

さて、前途多難とはよく言ったものだ。

これからどういふ問題が発生するかも分からない。が、その問題が発生する前に僕という存在の根元に戻ることが出来たのは僥幸と言えるだろう。

僕が『僕』という存在を分かってさえいれば、大抵の事はうまくやり過ごせる。

現状、一番大きな問題とは言えないけど、一番早く起こる問題は学校生活だ。

相手は吸血鬼や魔物じゃない。どころか力を持った者ですらない。

ただの高校生にただの高校教師。

なんて事はない。命の危険があるどころか、傷を負う事さえないよ
うな、そんな問題。

僕は周りの視線には敏感な方だと思う。いつも色々な視線にさらされて生活しているわけだし、その生活も長い方だ。

でも誰であろうと、初めての事には気が付きにくく対処しにくいもの。

その時後ろから向けられていた悲しげな視線に僕が気が付くことは、もう少し後になっての事だった。

向かえるモノ（後書き）

人には見せない勇氣。

そんな行動の連続が物語を作っていく。

何気ない仕草や言動。それに救われることもあれば、奈落の底まで落とされることもある。人はそれほどまでに力を持ち、他者に干渉し影響を与えていく。

無自覚のうちに、無意識のうちに、影響を受けた者は変わっていき、それは明確な変化をもって表に出ることとなり、その時になって自らの変化、変貌を確認することが出来る。

しかし変化にも様々。人間の成長は進化だけではない。退化してしまうことももちろんある。

それをどう受けとるかは、結局のところ本人次第なのだ。

と言うわけで、9話です。

遅くなって申し訳ありません。

ええそうです。理由は一切ありません。私の怠けた生活が全ての原因であります。

長い休みの中、沢山更新できるなあ〜とか思っていたあの頃が恥ずかしい。

次話は早めに更新できればなあと思います。

これからもよろしくお願いします。

帰ってきた一時

はあ……。

思わず溜め息が出る。いけないことではあるんだろうけど、思わずどころか意図的にそうしたいくらいだ。

原因はもちろん、教室で僕よりもはるかに前に座り大勢の人に囲まれて落ち着かない様子で昼食をとっているエリスさんだ。

「はあ……」

本人を目の前にしては申し訳ないけれど、もう一度小さく溜め息をつく。まああっちは五月蠅いぐらいに騒いでいるから恐らくこの溜め息は聞こえていないはずだ。

それにしてもまだ昼休み。言いようによってはまだ午後の授業があるとも言えるし、残りの授業は二つなのだから頑張れるとも言える。

何故僕がここまで気を落としているかというところ……やっぱりエリスさんが原因だ。って溜め息をつく原因がエリスさんにあるんだから当たり前なんだけど。

エリスさんは駒木高校に見事に入学してきた。それも僕と同じクラスに。

ここまではまだ分かる。いや、分かりたくなかったんだけど、仕方がない。

で、問題はそこからだった。

僕にもよく分からないけど、結論から言えば僕も太陽の存在は駄目だった。

エリスさんみたいに突然倒れるだけならまだしも、僕の場合身を焼かれるような激痛が全身を走りその場で思わず叫んでしまった程だ。

意識を保ったままの拷問。意識を失ってしまえばいつそ楽だったんだろうけど、それを許されることはなかった。

天童寺生徒会長には貸しを一つ作ってしまった。

エリスさんの帽子を被って車に乗り——彼女が言っていた魔術のおかげか、太陽の下でもそれがあれば普通に活動ができ、顔には出さないようにしていたが内心少し驚いた——それをエリスさんに天童寺生徒会長が持っていていき、エリスさんが帽子を被って車に乗るという大変面倒臭い事をした結果、学校まで着くことができた。

学校の校舎内はなんだったかな……。結界？　とか言うのが張られているらしく僕でも普通に生活できた。あくまでも校舎内限定の事で、グラウンド等に出たら効果はないらしい。

らしいと言うのはもちろん聞いたただだからで、その際には『試してみたらどうだい？』という天童寺生徒会長の提案があったものの丁重にお断りさせていただいた。

正直あれは、不意にであろうと、覚悟がであろうとそんな事は関係ないと言えるほどの痛みがある。痛みなんてものじゃないんだけど、生憎ながら僕のボキャブラリーはそこまで豊かじゃない。激痛の上は何と言えがいいのだろう。

爆痛といったところだろうか。

まあその辺りは大した問題じゃなかった。体育の授業は今日はないし、まああればボイコットでもしてやらなければいい。出席に関しては、また改めて考えればいいことで差し迫った危機じゃない。

それが問題じゃなければ何が問題なのか。

エリスさん柄みで色々あるんだけど……。最初から順を追っていった方が良さそうだ。

急がば回れ。先人の残した偉大な言葉に従っておこう。



「て、天童寺エリスです。よ、よろしく……。お願いします……」

教室で前に立ち、先生の隣で緊張を隠すことなく挨拶をするエリスさん。

天童寺生徒会長の遠縁にあたる者という設定――僕は反対したけれど――で入学、というよりは転入した。

黒板に書かれた文字を見る限り、字が書けるということとは分かったためとりあえず一安心……。したかった僕だけど、考えが甘かった。

そこは少なからず僕も落ち着いていなかったと言うことだろう。自分の事を理解して臨んでいたけれど、無理だったということだ。

僕と同じくらいの身長。ここまでは別に普通だ。僕と同じくらいの身長どころか、僕よりも高い女子はバレー部などを見れば結構いる。地毛が茶色だということもまだ許容範囲だ。

けど、ここからが普通じゃない。

赤い瞳に、端正な顔立ち。そして何より『天童寺』の名前。

結果、何が起ったかというところ……。

「うおおおおおおお!!」

「よっしやあああああ!!」

「キヤアアアア!!」

「ヒヤッホー!!」

「キター!! キタキタキタキタキター!!」

クラスにいる者のほとんどが叫んだ、否、狂った。

このほとんどという数の表現の仕方。何故全員ではないのか、叫ばなかったのは誰なのか。

もちろん僕と天童寺生徒会長だけだ。

だからまあ全員と言っていいんだけど……うん、全員でいい。

クラスが一体となった……ような気がしなくもない。

その狂った雄叫びを防音機能をほとんど有していない教室の扉が防げるはずもなく、一気に他のクラスまで届いた。

後で耳にした話だとそれは一階にも、三階にも届いていたらしい。

その人たちは呑気な顔で『本当に凄かったよー』や『俺も叫びたか

ったー!!』など言っていたが……。

その場にいたものとして言わせてもらえらただ一言だけ。

ふざけるな。

いくら教室の扉が防音機能をほとんど有していないとしても、あるのとないのでは大きな差がある。

少しはこちらの身にもなってほしい。朝のホームルームの時間だったけど、本気で帰ろうと思ったほどだ。

僕の体が太陽に対してただ人間程度でも耐性を持ってさえいれば、絶対に帰っていた。

くそっ……今になってこの体が忌々しくなるとは。しかも聴力が格段に上がっているから最悪だ。

帰ろうとすれば身を焼かれるような激痛を受けなければならず、留まれば騒音というには大きすぎる――正確には僕の耳が聞こえ過ぎるだけなんだけど――音を聞かなければならない。

が、それはエリスさんも同じだったようで急にその場で耳を押さえつけてしゃがみこむ。

「……っ……」

「そこまでしておこうか」

いくら僕が目や耳がよくなったところで僕の席は一番後ろ。

教壇でしゃがまれて、口元もよく見えず早口で何かを言われてはさすがに聞き取れない。が、それには確かに力を感じた。けど、それ

もすぐに消えてしまう。圧倒的な声が耳に届いたからだ。

全ての音を退けて。

自らを主張するように。

天童寺生徒会長が椅子に座ったまま、微笑を浮かべたまま、エリスさんから視線を外すことなく話していたのだ。

その声をきっかけにしてか、騒ぎは落ち着いたけれど僕の中ではまだ終わっていない。どころか、これから始まりそうな予感さえしてくる。

僕は今の感覚を知っていた。知って間もないけれど、知ってからの時間が短いからこそ忘れることはない。

朝、車に乗る前の、あの帽子を被った時の感覚。

あの帽子には魔術がかけられていると言っていた。

つまりあれが、あの感覚が――魔術。

それと同じ感覚を感じることが出来たということは、同じことをしたということ。エリスさんが魔術を使った、もしくは使おうとしたということだろう。

天童寺生徒会長の言葉と時を同じくして感覚も消えてしまったから、恐らく後者。まだ使用はされていなかったんだろう。

エリスさんの表情が申し訳なさそうに固まっていたのがその証拠だ。

まあ何はともあれ、第一関門突破ということだろう。

その異常な瞳も、全員『天童寺』の名前を聞いたからか、口にする

者はいない。もしかしたらそれぐらいは当たり前だと思われるのかもしれない。

恐るべし天童寺家。

元々はここに住んでいなかった僕には分からないけど、全員にそう思わせるなんて相当な力があるのだろう。

僕はてっきり教師なら真っ先に『カラーコンタクトを外せ』と思うと思っていたんだけど……杞憂に終わって何よりだ。

「天童寺の席は一番後ろだ。人梨、面倒を見てやってくれ」

「「……え？」」

先生の言葉に固まった。僕じゃなくて、クラスの全員が。

まあ、ある程度予想は出来たことだ。この教室はそんなに広いわけじゃないから、新しい人が入ってくるとなれば当然後ろに回される。尤も、僕が一番後ろに座っているのはただ五十音順で並んだ結果なだけであって、別にくじ引きで僕が運を見せたわけじゃない。

それにクラスメートの反応でさえ、僕にとっては予想の範囲内。

誰が見ても可愛いと、綺麗だと評価する転校生を、ましてや天童寺家の者を、学校で一番と言っているいいほどの無愛想な僕に預けようというのだから当然だ。

「せ、先生……！ 天童寺さんは女の子ですし、その……私の隣がい

いんじゃないでしょうか……」

そんな中、律儀に手を挙げて発言するのは、このクラスの委員長。天童寺生徒会長は生徒会長職に就いているために委員長ではない。その委員長、僕は名前さえ知らないんだけど、明らかに僕を警戒している。

本当に、困ったものだ。

五月蠅いガキがごちゃごちゃ言葉を並べている。『男の子だと色々大変だ』とか、『一番後ろは可哀想だ』とか。

はあ……。言いたいことがあるならはつきり言えばいいのに。

『人梨優真は駄目だ』って。

あまりの気迫に圧されたのか、はたまた委員長という立場を信用したのか、どちらでも僕はいいんだけど結局エリスさんはその委員長の隣に座ることになった。

その列が一個ずつずれることでエリスさんのスペースを作ったのだ。

もちろん最後尾の僕は両隣に誰もいなくなり、少し狭くなったものの気分が良くなった。

ホームルームを終えて、昼休みまでにあった授業の科目は四つ。その中で、エリスさんについて分かったことが幾つか、というか二つあった。

まず一つ目。エリスさんは理数系が得意だということ。特に数学に

関しては、数式を見ただけですらすらと答えを出し周りを圧倒させていた。

そうして二つ目。エリスさんは文系が不得意だということ。特に社会は壊滅的だ。

といっても、分からないでもない。ヴァムピール境界者にとって日本の歴史などどうでもいいことだ。

人間でさえ、地理・歴史を習う意味を問われて即答できるものは少ない。それを押し付けようというのだから土台無理な話なのだ。

と、まあそんな感じで四限目までの授業を終えて昼食をとっているわけだけど……。

「……………」

食べにくいことこの上ない。

朝、車の中で天童寺生徒会長から手渡されたお弁当。別に特別豪勢というわけでもない、普通のお弁当。僕が作るよりも見映えがいい。色のバランスとか色々。

で、それを食べているわけなんだけど……。

正直エリスさんが人目を盗んでチラチラ見てくるのが気になる。一体何があるのだろう。確かにこのお弁当は美味しい。

……おかずが欲しいとか？

さすがにそれはないだろうと頭を切り替えて再びご飯を口をもって

いく。この玉子焼き……本気で美味しいな。

なんて、おかずの一品に真剣に感動したところで今日の昼食は終了。ごちそうさまでした。

心の中で合掌し、心の中で定型句を呟く。

さてっと、今日はどうしよう。いつものように図書館にでも行こうか。

「ちよっといいかい？ 優真君」

そんな時だ。彼女の声がかかったのは。

この一月あまり、絶対になかったこと。してくると予想さえ出来なかったこと。

彼女、天童寺撫子は、昼休み、生徒がいる中で、自分がその人だかりの中心に位置しているにもかかわらず、この僕に、声をかけてきた。

——カタンツ。

誰かがお箸を落とした。が、そんなことを気にする余裕もない。

クラス中の人間が、僕を見て、天童寺生徒会長を見たあとに再び僕に視線を向けてくる。

あの女……完全に油断していた僕の責任ではあるけれど、誰が予想できただろう。

扉から一歩踏み出した状態のまま固まっていた僕は、わざわざ出し

た足を引っ込めて向きなおす。

「……何か用ですか？」

「そんな言い方は酷いじゃないか優真君」

なんとか冷静になろうとしながら言葉を返す。

彼女のその微笑が、その時ばかりは悪魔に見えた。

「私だって朝早くに起きて頑張って作ったんだよ？ 感想の一つや二つ聞いてもいいんじゃないかな？」

一気に教室がざわめいた。

当然だ。朝早くに起きて、頑張って作るものなんて限られてくる。というか一つしかない。

くそっ……玉子焼きに感動なんてしている場合じゃなかったんだ。五分前の自分を、いや、お弁当を普通に受け取った時の自分をぶっ飛ばしたい。

それに優真君なんて呼び方がまずい、気がする。

とにかくこの場を切り抜けないと。何も予定はないといっても、それは時間を無駄に浪費していい理由にはならない。

「優真君、どうだった？ 『私』の作ったお弁当は」

何だ……？

何だか嫌な予感がある。今の話し方にその表情。

駄目だ。早くこの場から逃げ出そう。こんな所にいたら要らぬ疑いをかけられかねない。というかもうかけられている可能性は十二分にある。

「ええ。美味し——」

「う、嘘を吐かないでください！！ 私も一緒に作ったじゃないですか！！」

……終わった。

完全に終わった。

何でいきなり出てくるんですか。天童寺生徒会長が座ったままさも当然のように質問してきたのに対して、エリスさんの対応が必死すぎる。椅子を倒してしまうほど勢いよく立ち上がり、顔を真っ赤にして大声で叫んでいる。

もう、どうしようもないじゃないか。

「美味しかったです。ありがとうございました」

一言だけ感謝の言葉を返して僕は教室をあとにした。そのあとにどんな闇が訪れるのだろうかと少し予想しながら。

これから僕の居場所、もといゆっくりできるような場所はあるのかを真剣に考え、馬鹿馬鹿しいの一言で切ってしまうことにした。そ

れを考えるのは無意味だし、考えたところで僕には何も出来ない。
今の僕は太陽の下を歩くことが出来ないのだから。

その後の二限の間、僕のせいだとは思いたくないけれど、確かに昼
休みの事があったからだろう。授業はほとんどの生徒が耳を貸さな
い中で行われることとなった。

ちなみに、音楽の授業でいつも決して上手いとは言えない楽器の音
を聞かなければいけないのが昼休み終了後の五限目だったんだけど、
その日に限り音が聞こえてくることはなく、代わりに先生の叫び声
が届いていた。

「優真君、私は申し訳ないとは実はあまり思っていないだよ」

「ええ。そうでしょうね」

学校からの帰り。行きと同じように周りの生徒からすれば奇怪とし
かとれない行動をとって、僕たちは帰路についていた。

その車の中で当然のように話してくる天童寺生徒会長にはもう、返
す言葉がなかった。

この人は初めから全部仕組んでいたのだ。朝の短い時間に会話をす
る時に、やけに馴れ馴れしいと思ったら……。

全てはこの状況を作るためだと言っても過言じゃないくらいだ。朝
早くに起きて作ったお弁当を渡す。それだけでも十分過ぎるにもか
かわらず、それに加えて名前で呼ぶ。誰がどう見ても何かあると思

われる。

その場にいた全員が理解していることだろう。天童寺生徒会長は下の名前で呼んでくれと頼めば快く呼んでくれるであろう事を。

でも!!

それが分かっている!!

僕がそんな台詞を吐くわけがないじゃないか。

誰に頼まれたってそんな事はしない。それも、僕を知っている、見たことある人間ならおおよその見当はつく。

にもかかわらず、名前で呼ぶということは、やはり何かがあるのではないかと思うようがない。

「僕、こんな事あなたに頼みましたか？」

僕の機嫌ははっきり言って悪い。当たり前だ。天童寺生徒会長がこんな事をしたのには意味がある。その意味にも同時に気がついたからこそ、機嫌が悪いのだ。

「僕が一度でも、一人は寂しいと相談しましたか？ 友達がほしいと言いましたか？」

そう。孤立している僕を救う。それが彼女の目的だろう。だから気に食わない。

誰が群れたいと言った？

誰が友が欲しいと言った？

誰も言っていないし、僕も欲していない。

ただの彼女の独断専行。

だから僕は吐き捨てるように言葉を紡ぐ。怒りを隠すことなく、その張本人にぶつける。

「ふざけないでください。僕は何も望んでいない。あなたのした事は焼け石に水どころか、火に油を注いだだけだ」

「優真君……」

「何の大義を振りかざしたいのか知りませんが、はっきり言って邪魔です。気分が悪くなるのでやめてもらえますか？」

「ゆ、優真さん、言い過ぎです!!」

間に入ってきたエリスさんの言葉で車内は静まり返る。

寂しそうに、悲しそうにする天童寺生徒会長。その表情に、感覚に、覚えがないわけじゃないけれど、だけどそんな事は知ったことじゃない。

僕はそれっきり言葉を交わすことをせず、苛々しながら窓の外を眺めているだけだった。

それでも尚、車は走る。魔術を行使するもの魔術師。この町における魔術師たちの総本山、天童寺家へと向けて。

帰ってきた一時（後書き）

どうでしたでしょう。10話です。

今回は日常パートということで、少し明るくしたつもりです。

あまり空気が変わったとは思えませんが……。

早めに更新ができて良かったと思っている反面、クオリティが段々と落ちてきているのではないかと思いはじめています。

次回も頑張りますのでよろしくお願いいたします。

花言葉は尊敬、純粹

天童寺撫子。

天童寺家の一人娘にして、駒木高校の生徒会長。

僕が知っている情報と言えば、これの他には年齢が僕と同じであることと外見的特徴しかない。

この地域に一人暮らしのために来る前までは、天童寺という名字さえ僕は知らなかった。

僕のようなただの一般市民が日本という国の裏にいる存在に目を向けられるわけもなく、また見ようとしたところで見えるものじゃない。

噂では天童寺という家の力は相当なものらしく、誰も逆らえないとか。

まさに漫画でしか見れないような話が飛び交う人の家へと入っていく僕。正直言葉がなかった。

学校から車で約三十分。僕の家からもそんなに遠い場所じゃないと思う。そこに天童寺撫子の家はある。

真っ先に頭に浮かんだ言葉なんてない。

ただ大きすぎる、広すぎる、その土地に言葉をなくしてしまうだけだった。

その広大な土地に僕の住んでいる家がいくつ入るのか、なんてどうでもいいような事を考えているうちにも車は進んでいく。

「ここからが私の家なんだ」

なんて言うものだからどこに家があるのかと思えば……。ただの土地だった。

彼女の言葉を正確に表現するのなら、『家の敷地内に入った』と言うことだろう。つまり認めたくはないけれど、この土地は天童寺家の庭ということだ。

確かに植えられている木や草花は綺麗に整えられていて、一ヶ所でも雑草が生い茂っている場所など見当たらない。

この広大なる庭を手入れするのにどれだけのお金を使っているのだろう。庶民のしか持っていない僕からすれば、売るか貸すかをした方が余程良いように思うけどな。庭なんてあってもなくても一緒だし、あって便利な時があるのかもしれないが、なくて困るという訳じゃない。

まあ、僕の庭に対する考えなんてどこかに置いておこう。こうして庭に生えている花を見るため、だとか最悪、特に理由はないと言うことさえ考えられる。

そんな事を考えても仕方がない。

車で走ること数分、僕たちが連れてこられたのは土地の広さに見劣りしない大きな洋館だった。

一面を白の壁が覆い、近付くことさえ憚れるような雰囲気醸し出している。

「さあ、行こうか。ここは太陽を防いでいるから大丈夫だよ」

車を降り、その建物が放つ威圧感をものともせず歩いていく天童寺生徒会長。その後ろ姿は流石と言ったところだ。とても様になっている。

そんな彼女の後ろをついていく僕だけど、どうにもここにいることが場違いにしか思えない。

エリスさんも僕と同じことを思っているのか、その足取りは重い。まあエリスさんの場合、学校でも同じような感じだったからもしかしたら初めての場所ではいつもこうなのかもしれない。僕にそれを確かめる手段はないし、また必要性も感じないからどうでもいいんだけど。

「……ここは何なんですか？」

「何、とはどういう意味だい優真君？」

あれ？

僕としてはいたって普通の問いかけをしたつもりなんだけど……。僕が間違っているのかな？

「いや、ここは家じゃないって言われたので。その、物置とか？」

「いやだなー、こんな小さな物置があるわけじゃないじゃないか。優真君も面白いこと言うね」

へえー……………って、はっ!？

小さい!？

何を言っているんだよこの人。どう見ても僕の家より大きいんだけど。

もう余計なことを考えるのは止めよう。天童寺家の事情とか、常識とか、僕にはどうでもいい。これから必要になることはないし、本来なら絶対に来ることのない場所なんだから。

それ以上僕が何かを言うことはなく彼女の後ろを大人しくついていく。何も言い返さないことで不審感を与えるかと思ったけど、彼女も特に何かを言ってくるということでもないし、これでいい。

大きな扉。僕の身長を優に超えるその高さは、二メートル以上あるようにも見える。厚く、明らかに頑丈そうなその扉をどうやって開けるのかと思えば、何の事はない。

ただの自動だった。

まあ、当然と言えば当然だよな。見たところ鍵穴なんて無さそうだし。あったところで、どうやって開けるのかという問題がある。

「待ったぞ！！　我が愛しの君！！　否、待ちに待ったと言うべきだろう！！　随分と帰りが遅いではないか！！」

扉を開けた瞬間、凄い大声が僕の耳に入ってくる。恐らく聴覚の良し悪しなんて関係ない。その圧倒的音量は僕のような特殊な人間にはもちろん、ただの人間であろうとも十分に聞こえることだろう。

むしろ、この五月蠅いとも――初対面で失礼だと思うけど、許してほしい。それぐらい大きいんだ――とれる声を聞かなくて済むんだから。

はあ……最近の僕、向上した自分の能力に振り回されてばかりじゃないか？ もっと便利になるはずなのに、これじゃあ欠点が増えたみたいだ。

ほんと、今更だけどね。

さて、この大きな声の男性。服の上からでも隆起している筋肉が分かる……ということもなく、身長は僕よりも大きいから恐らく相当に鍛えてはいるんだろうけど、外見では判断できない。

黒く長い髪。男の長髪ってどうなんだろうか思っていた僕だけど、成る程、やる人がやればなかなか似合うものだということが分かる。

それにしても、何か言い方があったような気がするけど忘れてしまったから見たままで説明すると、彼は凄く清潔な格好をしていた。十中八九なんてとんでもない。たぶんだけど残りの一、二を埋めることの出来る数少ない人だと思う。

なんたって、全身真っ白なスーツで身を包んだ上に、真っ白な薔薇の花束を携えているのだから。出迎えてそこまでする必要があるのかと問われれば、笑って誤魔化すしかない格好だと思うけど。

完全に求婚モードの彼。僕の目が正常に機能してるとしたら、三十代ぐらいのいいオッサンに見えるんだけど……大丈夫かな。自分の能力に振り回されてばっかりだから、正直言って自信を無くして

しまっている。

「さあ、さあさあさあ！！ 俺との結婚は考えてくれたのだろうか、我が愛しの君よ！！」

求婚モードだなんてとんでもない。

このオッサン、求婚しだしたよ。しかも十七歳の女子高生に。

年の差結婚なんて別に本人たちの勝手だと思う僕だけど、流石に十年以上となるとやりすぎじゃないか？

もしかしてこのオッサン、ロリコンなんじゃ。

「優真君、偏見は駄目だよ。偏見は」

僕の考えを読んだように声をかけてくる天童寺生徒会長。

いや、求婚されてるんだから僕じゃなくて彼に答えてやれよとも思うけど口には出さない。そんな事、彼女に言うところじゃ馬鹿みたいだし。

それに偏見は駄目だよって。

まあ確かに印象だけで全てを決めてしまうのはよくないか。彼だって何か訳があるのかもしれないし、天童寺家の一員になりたいという理由からかもしれない。

うん、こちらの方が余程納得できる。それに天童寺生徒会長は誰から見ても美少女なわけだし。

「ちなみに彼が私の前に求婚したのは大学生の時で、相手は小学生だったそうだよ」

犯罪者じゃないですか。

もう完全に終わってるよこのオッサン。それになんだよ偏見って。もう見たまんまじゃないか!!

っていうかエリスさんは何でそんな『凄い!!』みたいな表情なんですか？

小学生に告白することが――しかもここで天童寺生徒会長に求婚しているということは、玉碎したと考えて間違いない――さも偉いことかのような表情だ。

「エリスさん？」

「凄いですよね。こんなにも真っ直ぐに人を愛することが出来るなんて」

「……二人の間にある年の差を除けば、ですけどね」

この人も大丈夫か？

何だか変な人ばかりが僕の周りに集まっている気がするなあ。何でもこんな事になっているんだろう。

一度真剣に考えた方が、これからの僕の人生のためになるかもしれない。

議題はズバリ、『変人の定義について』だ。

やっぱり奇人、変人についてしっかりとした定義を持ってなきや駄

目だね。一見無駄かに思えるこういう事を積み重ねていくことが大切なんだ。

「優真君、もしかして何か失礼なことを考えていないかい？」

「いえ、特に何も」

相変わらず見計らったように声をかけてくるなこの人は。まあ、何食わぬ顔で平然と嘘をついているんだから僕もそれなりに毒されているのだろうか。

うわー慣れって嫌だな。

なんて馬鹿みたいなことを言ってみたり。

「優真君、『類は友を呼ぶ』って言葉知っているかい？」

「ええ、まあそれぐらいは。それが何か？」

「いや、何でもないよ」

あまりにもおかしい発言に僕は首を傾げるしかない。一体何が言いたかったんだろう。そこまで興味がある訳じゃないけど、ちょっと気になる僕がいる。

まあ、どうしても気になるようなら直接聞けばいいんだし、こういうのって案外何の意味もなかったりするから、別にいいだろう。

と、そんなやり取りをしている間も目の前のオッサン、もとい性犯

罪者は天童寺生徒会長に愛の言葉を永遠に語っていた。

本人は全く気がないようで相手にすらしていないし、凄いと言っていたエリスさんは僕が『その気持ちを伝えてきたらどうですか？あの人がぶん結婚してくれますよ？』と言ったら急に黙り出した。どうやら他人事ならいざ知らず、実害が及ぶとなると抵抗を感じたらしい。こっちとしてはもともと感じていないことにびっくりなんだけど、話が長くなりそうだからその辺りは適当に流すことにした。

別に僕は、ロリコンのオッサンについて熱く語りたいと思ってるわけじゃない。どちらかと言えば、全力で関わりたくないくらいだ。

「彼はラブさん、仲間の中でもかなり強い人だよ」

「小僧！！ 我が愛しの君に余計な事はしていないだろうな！！」

何でもいいけどこの人、声が大きい。たぶん十メートル離れていても十分に聞こえるだろう音量を二メートル強の距離で聞かされるもんだからたまったものじゃない。

更に扉が閉められたことで響くようになり、僕の声であっても普通より大きく出しているように感じられた。

「聞いているのか小僧！！ 貴様、返答次第によってはただでは済まさんぞ！！」

「……余計な事って、僕は別に何も——」

「彼は私の彼氏なんだ。だからラブさん、私の事は諦めてくれないかい？」

「「……はあ!？」」

さすがの僕もこれには驚いた。

僕が平然と嘘をついているんだから、なんてとんでもない。この人、自分の事だけじゃなくその嘘に僕まで巻き込んできたぞ!?

自分の事を最低の人間とか思っていたけど……この人も大概じゃないか。否、僕は他人の足を引っ張ることも他人に足を引っ張られることも嫌いだから関わらないようにしている分、まだ良心的なんじゃないだろうか。

だってほら。

このオッサン、凄い怒ってるんだけど……。筋肉を見せつけるためののか、上半身の服とか弾け飛んでるし。

ちなみに何故かエリスさんも（当たり前だけど、上半身は普通に服を着ている）。

「ちょっと……ちょっと待ってください。落ち着いて、僕は天童寺生徒会長の事は――」 「世界で一番愛しています」

あれ?

さっきより陰悪なムードになってるんだけど。

弁解したよね!? 何で!?

もしかして信じてくれてないとか?

いやいやいや、いくらなんでも僕の表情とか見てればそんな関係じゃないことくらい、一発で分かるだろ。

怒りすぎて『目の前の男をぶっ殺す』みたいなことをなつてれば別だけど、流石にそれはないよな。相手は三十代のオッサン。僕よりも倍以上生きているであろう男だ。

流石にそんなことには「貴様、ぶち殺す」

……なっちゃいましたよ。

ちよつと待て。一体誰のせいだ？ どうしてこんな漫才みたいなことになってるんだ？

よく考えろ。この状況を分かっていて、一発で変えられる人物は誰なのか。

ふう。我ながら無様だな。あまりにもオッサンがぶちギレているから少し僕も焦ってしまった。

大丈夫、相手は大人だ。ちゃんと話さえすれば、きっと分かってもらえる……はずだ。

あまり自信はないけど、まあ危なくなったら天童寺生徒会長を盾にでもしよう。あの人なら、オッサンも攻撃できないだろうし。

「えっとですね、僕は――」

「もう喋らなくていいぞ……」

「……………はい？」

「口を開くな餓鬼が！！ 安心しろ、苦しめてから殺してやる！！」

どうしてくれるんだよ。

本当に収拾つかなくなってるじゃないか。このオッサンは目が本気だし、エリスさんはエリスさんで黒いオーラを出してるし、頼みの綱と言う名の元凶はこの状況を心底楽しんでいるし。

「はぁ……」

本当にため息が出る。

何でこんな事になってるんだよ。別に僕は、このオッサンと本気でやり合う気なんてこれっぽっちもなかったというのに。それもこれも、全部天童寺生徒会長のせいだ。

まあ、今の僕は体の変化にも大分と慣れているから、そうそうやられ「遅すぎるわ!!」

「がはっ!!」

肺の空気が一気に出ていく。

僕は、腹のど真ん中に叩き込まれた拳を躲す事が出来ずにそのまま十メートル以上先の壁まで吹っ飛ばされる。

な、何が起こったんだ……。

全く見えなかった。理解できたことは僕がこのオッサン……この人に吹っ飛ばされたという結果だけ。

「ん？ 貴様、魔物……ではないな。ふんっ、この感じハーフといったところか。安心しろ、今のは挨拶だ」

「なっ!？」

「貴様が何であろうと俺には関係ない!! 苦しみの果てに死ぬがいい!!」

後ろは壁。想像以上の拳に、壁を使うことで何とか立ち上がる。

たったの一発でこの有り様。何度も受けていいものじゃない。頭なんかに食らったら、一撃でぐっちゃぐちゃにされる。その光景が、僕にははっきりとイメージできる。

幸いなのはエリスさんが襲ってこないということだろうか。相変わらず黒いオーラを出してるままだけど、少なくとも今すぐに僕に飛び掛かってくるということはなさそうだ。

この状況、一人に集中できるのは正直言っておりがたい。

「魔物の子よ！！ さあ来るがいい！！ 我が愛しの君を奪うというのならば、まずはこの俺にその力を見せてみろ！！」

こっちとしては奪うつもりも力を見せる気もないんだけど……。そんな悠長な事は言ってられない。

失った酸素を取り戻すかのように呼吸をする僕に、返事を返す余裕なんて全くない。

僕に出来ることと言えば、せいぜいこの向上した目を使って相手の攻撃を躲すので精一杯。自分からの攻撃なんて出来ないし、ましてやカウンターなんて愚の骨頂。

とりあえず距離をとらないと。このままじゃ、何をしたところでじり貧だ。

「はあ……はあ……」

「遅いぞ小僧！！ 遅すぎるわ！！」

この人、本当に強い。

攻撃するとか、防御するとか、距離をとるとか、そんなことまるで関係ない。

こっちからの攻撃は、相手が何故か躲さないから、と言うより感覚

的には意図して当たりにきているからか一応当たってはいる。けど全く手応えがない。

防御は駄目だ。もう何回体の骨が折れているか分からない。最初の一撃が本気じゃなかったんだと改めて思い知らされる。

吸血鬼の回復力がなかったらどうなっていたことか。想像するだけで体がビビってしまいそうだ。

立っているのもやっと。たぶんこの人が本気だったら最初の一撃が最後の一撃になっていたはず。

まあ、回復出来ると思うけど……あまり信用しすぎるのもよくないし。

大体何でこんな事に……。

一人で生きていけば、もっと楽だったのに。

一人で生きていけば、もっと静かだったのに。

どうしてこんな喧騒に巻き込まれていて、更には魔物だなんて世界の裏側みたいな存在を知らなきゃならないんだ。

こんなことなら、あの時あの場所で死んでいた方が――。

「この程度か！！ 貴様の覚悟は。ふんっ、笑止！！ 貴様ごときに我が愛しの君は預けられん！！ あまり目の前でこのような事はしたくなかったがな、貴様を殺して俺の妻にさせてもらおう！！」

どうぞお好きに。

とは、言えなかった。

一人で楽をしたい。一人の方が静かだ。直前までそう考えていたし、今現在だってその考えは全く変わってない。にもかかわらず、その

言葉が口からは出てこなかった。

代わりに出てきた言葉は、疑問。発言に対する確認。

「僕の覚悟？　この程度？」

「ふんっ、恥じることはない！！　この愛を識^{ラヴ・プレイカー}る者の前に立ち、ここまで立てる者はそうそうおらん。が、それもここまでだ！！　その小さな、虚弱な体。終わらせてやる安心しろ、その娘もすぐに会わせてやるからな！！」

そう言ってオッサンは僕に向かってくる。一直線に、最短距離を。目が慣れてきたからか、オッサンの動きが疲れて遅くなってきたからか、今は何とか追うことが出来る。けど、今はそんなことはしない。

もちろん真っ直ぐにオッサンがこちらに向かって来るのだからその必要がないんだけど、それは言い訳だ。僕はたとえジグザグに動いていようと、空に飛び上がろうと、地面を潜ろうと、変わらずこうしていたと思う。

それほどまでに、その言葉は僕に届いた。

初対面で殺してくるような、そんな狂ったような、否、狂っている人間の言葉は普通は聞かない。聞く必要がないし、無視するべきだ。

でも……。

それだけはやっぱり、譲れない。

僕の覚悟は僕一人のものじゃない。

いつの間にか天童寺生徒会長の隣で戦いを見守る形になっているけど……。エリスさんがいる。

彼女を死なせるわけには、いかない。

眷族とかそういうのを抜きにして、感謝とかも抜きにしても、彼女には生きていてほしいと思う。

こんな事、ただの妄言だ、と自分の中で切り捨てることは出来る。正確には出来るはずなんだ。

でも、それを認められない自分がいる。

どうしても、こればかりは認められない。

力があれば証明できるのだろうか。

力があれば守れるんだろうか。

この人を倒せば、守ったことになるのだろうか。

何をすれば、彼女のためになるのだろうか。

——分からない。

普通は答えが出ないまでも、そのための道筋は色々と出てくる。

でも、今の僕には何も出てこない、浮かんでこない。

分からないことは恐怖だ。

知りたい。どうすればいいのかを。

（簡単だ。殺してしまえばいい）

なん……だ？

声が、聞こえる。

（殺せ！！ その力で！！ その思いで！！ 全てを！！）

驚くほどその声は頭に響いてくる。長年聞いてきて忘れることのない声。

その声の主が誰かはすぐに分かった。こうする理由はさっぱりだけど。

まあ、自分の事なんて案外他人の方がよく知っているものだ。

（殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！
殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！
殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！ 殺せ！！）

「……力……」

あれ？

なんだかぼーっとしてきた。駄目だ、すぐ目の前にまで迫ってきているのに。

集中……しない。殺されてしまう。僕だけじゃなく……エリスさんまで。

「……力が……欲しい……」

駄目だ。もう、意識が……。

「そんなに欲しいならくれてやる!! てめえに、相手をぶち殺す力を!!」

最後に聞こえた声が誰の者なのか、僕には判断することが出来なかった。

ただ、それで救うことが出来るならば、守ることが出来るならば、それもいいかな。と思う自分がいる。

こんな事、誰にも頼まれていないし、たぶん迷惑になるだろう。余計なお世話だと言われるかもしれない。でも、これでいいんだ。

ただの自己満足。僕が納得できれば、それが十全なんだ。凄く……眠い。

少し寝て、次に起きたら黄泉の国、っていうのも面白そうじゃないか。古典で言うところの、いとおかしだな。

馬鹿馬鹿しい。それともう一つ……おやすみなさい。

花言葉は尊敬、純粹（後書き）

人を愛するということは、それだけで尊いこと。

それゆえに、愛は誰にも止めることはできない。他者はおろか、自分でさえも。

11話です。

今回の新キャラ。ラヴさん。

これは前から出そう出そうと友人と話していたキャラです。

正直、その時話していたキャラにどこまで近付くことが出来たか分かりません、が、いいキャラになってほしいと思います。

まあ、私次第ですよね……。

今回も少し遅くなってしまった更新ですが、これから頑張ります。

では軽い次回予告でも。

覚醒をみせる力。

その姿は希望か、はたまた絶望か。

圧倒的強さを見せつけられ、思い知らされ、それでも尚少年は立ち上がろうとする。

誰の命令でもなく——自分の意思で。

向けられた牙の名は、本性

望んだものは希望か、絶望か。

本人以外には、否、たとえ本人であろうともその答えは誰にも分からないだろう。

纏うオーラ、放つ殺気、そして何よりその瞳。全てが彼のものとは一変していた。

より禍々しく、より猟奇的に。同じ姿をしているにもかかわらず、ここまで変わることが出来るのかと誰もが目を疑ってしまうような、そんな光景が目の前には広がっている。

一直線に、迷うことなく最短距離を通っていたラヴは何とか初撃を躲すことに成功していた。どこで覚えたのか、その攻撃――カウンターは並みの者のそれではなかった。

幾重にも及ぶ戦闘や修羅場を潜り抜けた者の持つ鋭さなどを既に持っていたのだ。これを躲したのは、やはりラヴの経験がなせる技と言っていいだろう。

「我が愛しの君よ、これで良かったのか？」

「お手を煩わせてしまつてすまないね」

「何を言う！！ この命、俺のものであつて俺のものに非ず。ただ我が愛しの君のためだけに存在しているのだから！！ 気に病むことなど何一つない！！」

ただその場にいる者達の表情は統一、とまではいかずとも三人とも似たようなものだった。

焦ることなく、初めからそうなることが分かっていたかのような振る舞い。まるで台本を読んだあとにその映画を観ているようだ。

しかし、やはり三人は同じ人間ではない。

ゆえに内に秘めた感情までもが同じであるはずがない。

一人は心配が見え隠れし、一人は無関心にその少年を見つめ、一人は決意を匂わせる。

そんな中で立っている少年――斉梨優真はそんな状況など気にも止めない。

「あはっ!! あははははっ!!」

笑い声が響く。

相当頑丈な造りをしている建物は、魔術的補助も追加されているためか傷一つついておらず、壁は綺麗なまま保たれている。尤も、あくまでも綺麗なままなのは建物自体である。

家具はと言えば、テーブルや椅子はラヴの攻撃等に巻き込まれ脚が折れたり、真っ二つなっていたりと酷い状態だった。

その中で笑える優真の精神力は相当なものだろう。ラヴは本気で優

真を殺そうとしているし、あとの二人は止めることはおろか声をかけることさえしない。

しかしこの状況においてはあまりにも馬鹿らしくて笑ったという可能性もないではない。

いや、斉梨優真という人間が正しく斉梨優真であつたならば、むしろその可能性の方が高い。

あまりにも自分を卑下にし、どこまでもひねくれているただの男子高校生。そんな彼ならば、この理不尽極まりない状況の中で笑っていることだろう。

何故ならば、その状況があまりにも理不尽過ぎるから。

彼ならば、この状況に対してこう思うはずだろう。

『やっぱりか』と。

人を嫌い、人との関係をなるべく絶とうとしている彼にとっては当たり前と言えば当たり前かもしれない。変に人と関わりを持つからこういうことになるんだと。

何故ノコノコと金魚のフンの様についてきてしまったのだと自らの行いに恥じ、自嘲の笑みを浮かべることだろう。

だが、たとえその彼であっても大きな声で笑うことはない。

自嘲の笑みを浮かべることはあっても、大声で笑うことはない。そのような感性は持ち合わせていないと言っても過言ではない。

「あははは！！」

しかし彼は笑う。

部屋に響く声は、確かに彼の声だった。

「優真君」

しかしながら狂ったような笑い声は、たった一言で消え去る。

撫子の放った一言――ただ名前を呼ぶという簡単なもの――で、今までもそうであつたかのようにぴたりと止めたのだ。

そこにどんな意思があるかはもちろん分かるわけがない。

今の彼は、斉梨優真であつて斉梨優真でないのだから。

「君を殺しにきたよ」

あまりにも静かに語る彼女の双眸には迷いはない。握る拳にも必要以上の力は込められていない。

これは仕事だと、使命だと、自身に懸命に言いつけ言い聞かせる。

埃が飛ぶことはなくとも、壊れた家具の残骸ならば飛ぶ。破片がそこいらに散らばっている状態の建物内はすでにぐちゃぐちゃと言つてよかった。

そんな中で撫子は言い放つたのだ。

友の名を呼び、存在を絶つと。

「殺す？ あははははっ！！ 馬鹿言うんじゃないよ！！」

そこで初めて彼が笑い声以外の言葉を発する。

それはこの状況に対して何の反応も見せなかった三人が明らかに表情を変える理由にもなる。

「おいおいおい、揃いも揃って何だ？ まさか俺様が喋れねえとでも思ったのか！？ あははははっ！！ こいつは面白れえ！！」

「我が愛しの君よ……」

「そうだね。これは私も予想できなかったよ」

話す二人にエリスは口を挟めない。
挟む言葉を――持っていない。

『自分のせいで』

そんな言葉が頭の中を駆け巡る。

出会いは今でも思い出せる。それはただ印象が強いという事ももちろんあるが、やはり出会ってからまだ日が経っていないことが大きな理由の一つである。

ただ帽子を拾ってもらった。

たったそれだけの関係だったが、むしろエリスはその時同時に感謝もしていた。

帽子を拾ってもらった事ではなく、自分の身について深く関わろうとしなかった事にだ。

どこへ行っても、道で人に会えばその格好についてまずは聞かれていた。

『どこから来たの?』『何かあったの?』と、しつこく聞いてこようとする。しかしそれに答えるわけにはいかなかった。

そもそも誰が信じただろうか。

『私は人間ではありません』等と言えはいいのだろうか?

否、やはりここでの正答は『答えない』という事である。

エリスは誰かに話したかった。でも誰も信じてはくれず、話を聞いた者は離れていくばかり。

それに加え、化物だと知れる可能性を少しでも下げるために一ヶ所に留まっておくことをせず、いつもどこかを目指して歩いている。

そんな中で優真が何も聞かずに立ち去ったことはエリスにとってはありがたかった。

もちろん似たような年齢であるため、友達になりたいというのは隠すべき本音だ。尤もそれはエリスにとっては初めての感情で、所謂一目惚れなのだがそれにはまだ気がついていない。

だがそんな本音もいつの間にか紛れてしまい、本人も見つけ出せなくなっていた。

だから吸血鬼に彼が襲われているところを目撃した時、駆け出せずにはいられなかった。

死なせたくなーいと思ひ、感じ、知識としてだけ知っていた契約を
い助けた。

にもかかわらず、今、その契約のせいで彼はまたもや殺されよう
としている。

今度の相手は吸血鬼ではない。魔物を狩る、魔術師だ。

理由はいたって単純。彼が――斉梨優真が危険因子だという判断に
基づくものだ。

彼はあまりにも、強すぎた。

吸血鬼をものともしないその強さ。

確かにエリスの渡した刀が役に立ったことは認めなければいけない
事実だ。しかしその力は酷く歪み、変質してしまっている。

刀に施された魔術、否、あれは刀の形をした魔術と言っているいい代物
だった。名を『存在否定』ブラッドデリート。対魔物用として存在している魔術の中
でも、特に強い魔術だ。

その力は魔物を魔物たらしめるものの中でも重要な『血』を消し去
ってしまうものだ。

いくら吸血鬼とはいえ、血を完全に失ってしまつては存在すること
は出来ない。そしてこの『存在否定』の力は血を持つ者全てに対し
て有効であり、そこに例外はない。

もちろん、吸血鬼が耐えられない攻撃に対して生身の人間が抗える
はずもない。

その刀で斬られれば、容易く殺される。

しかし、凶悪極まりない魔術といったところで所詮は魔術。行使する者がいなければならず、刀を振るわなければ意味がない。そしてその者が正常であるのならば問題ない。凶悪な魔術は凶悪な武器となりえる。

だからこそ、撫子達はエリスや優真を受け入れた。

最強の矛として。

使い捨ての駒として。

「あははははっ！！ ヤル気満々だな〜おい！！ いいねえ〜ぶち殺してやるよ！！！」

優真の右腕に握られる刀。

その刀の名は『存在否定』。血を持つ者を殺す刀。

それを持っているからこそ、危険因子だと判断されたのだ。味方にしておくには手に余る。敵にするには危険すぎる。ならばまだ、力のない今、叩く必要がある。

「どうだい？ あの刀はあなたの物なんだろう？」

「……すみません。あれはもう酷く歪んでしまっています。私の制御下には……ありません」

その答えを聞き、撫子は目を閉じる。

優真の危険性は、『存在否定』ともう一つ。暴走した後の性格的変

化だ。

一度しか見ていないものの、それを理解するためには一度で十分過ぎるものだった。吸血鬼としての血が暴走した時の優真には、まるで理性というものがない。ただ本能に従い、本能のなすままに行動する。

三大欲求は勿論だが、それを上回るものがあり、それこそが危険すぎた。

破壊衝動。

人だろうと、魔物だろうと、そんな違いは関係ない。ただ目の前のものを破壊する。それこそが第一の行動理由だった。

優真の暴走を止めることは出来ない。いつ暴走するのも分からない。それに加えて最後の望みであった『存在否定』の奪取は叶わない。

ならば選択肢は一つしか残されていない。そんな事は分かりきっていたことだった。今更何が変わるわけではない。何かが変わっているのなら、既に昨夜の状態で変わっているはずなのだから。

「殺ろう。彼は……敵だ」

吐き捨てるように言う。

彼を救う手立てがない。死んで救われる命などありはしない。だが、殺らなければ殺られてしまうのもまた事実なのだ。

「我が愛しの君よ、下がっておけ。手を汚す役は俺で十分だ」

「話し合いは終わったか!? 待ってやるとか俺様ちょー良い奴じゃん!!! 自分でも惚れ惚れするぜ!!!」

前に出るラヴに合わせて優真も一歩前に出る。

二人の間は約十メートル。決して近いとは言えないものの遠い距離ではなかった。

二人ともが動けば、ほんの数秒でぶつかるであろう距離。

「そっちが来ねえならこっちから……っ!?!」

凶悪な武器を手に、先に優真が動き出す。と同時に、その歩みは止められてしまう。誰かが何かをしたのではない。優真が勝手に転んだのだ。頭から、派手に。

「小僧。貴様には愛が分かっていない」

転んだ先に言葉を放つラヴ。

転んだ張本人である優真も、自身の身に何が起こっているのか分からない。ただ分かっていることは。

「てめえ、俺様の右足に何しやがった!!! 答えねえとぶち殺すぞ!!!」

答えてもぶち殺すけどな、と言葉を続ける優真だったが、ラヴはまるでその話を聞いていない。

ただ自らの主張を伝えるだけと言ったところだろうか。相手が聞いていようと、聞いていまいと関係なく話すという様子にも見える。

「愛とは何か。ふんっ、教えてやろう!!」

勢いよく飛び掛かろうとした分、出鼻を挫かれた優真はその言葉を聞くしかなかった。

もしくは、この会話の中から勝機に繋がるヒントでも探しているのかもしれない。

「愛とは、受け入れることだ。認めることだ。共有することだ。感じあうことだ。繋がることだ。分かち合うことだ。痛みを!! 苦痛を!! 傷を!! 喜びを!! 悲しみを!! 憎しみを!!
そうして初めて愛が生まれるのだ!!」

両手を広げ、堂々と宣言する。自らの主張を、一変の迷いもなく。

エリスはこの時素直に思った。

『この人は凄い』と。

その主張の正否は誰にも分からない。愛の定義など人によって千差万別、十人十色だ。

似通った主張こそあるかもしれないが、全く同じなど有り得ない。

理由は簡単。人はその人とは違うからだ。

同じ人間でないならば、同じ主張であるはずがない。もしも同じだという人がいるのであれば、それは考えることを放棄し、その人に

乗っかっているだけだ。

しかし、現実問題として自分の主張を貫き通す事は難しい。人間は集団となって初めて力を発揮する。たった一人では、野生の世界で生きていけないほど弱い。

そして人間は、集団から外れた人間に対して攻撃するようになる。

その外れ方が、優れている方でも劣っている方でも、どちらでも同じだ。

ベクトルの向きが真逆というだけで、この二つが集団から外れた存在であることに変わりはない。

そして彼のような者は、明らかに外れた存在だ。

集団に流されることなく、確固たる自分を持っている。

そんな彼が凄いと思うと同時に、少し羨ましくも思った。

「さあ教えてやろう!! 小僧!! 貴様に愛を!! 愛の持つ力の強さを!!」

「はっ!! ご高説お疲れさまでした。喉が乾いただろう? たっぷり飲ませてやるからな。てめえの血をよ!!」

叫ぶと同時に優真は飛び上がる。

右足は動かなくなってしまったが何の事はない。吸血鬼の回復力をもってすれば関係ないという考えからだった。

両手で力強く刀を握り、落下の勢いを殺すことなく威力に付加する。

テーブルは大破し砕け散る。どころか、決して傷つくことのなかつ

た建物。その床が大きく削られていた。
が、ラヴを斬った感触はない。すぐさま次の攻撃にはいる。

「ふんっ、あまり俺を舐めるな!!」

「ごはっ!!」

ラヴの言葉に何も返すことが出来ない優真。返す前に吹き飛ばされてしまったのだから当たり前と言えば当たり前だ。

しかもラヴが何か武装している様子はなく、今優真を吹き飛ばしたのも右腕から繰り出されたただのパンチだった。

徒手空拳。

魔術を施し肉体を極限まで強化しているとはいえ、ラヴの戦い方はあまりにもおかしなものだった。

さらに言えば、『存在否定』との相性は最悪と言って良い。

一撃で相手を殺すことの出来る刀を相手にこちらは攻めも守りも素手なのだ。

武器で弾くという選択肢が存在しない以上、それだけ攻撃を受ける可能性は上がる。

ただでさえ吸血鬼としての力を持っているのだ。今はまだ使えないとはいえ、いつ、何の拍子にそれが来るかは本人でさえも分からない。

とても正気の沙汰とは思えない。

「まだまだまだ!!　　まだだぞ小僧!!」

「糞がっ!!　　調子に乗ってんじゃねえよ!!」

怒号をあげながら突っ込んでいく優真。

剣術をかじった事さえないその立ち回りは、あまりにも荒く、雑なもの。

力だけを頼りに、振り下ろし、横に薙ぎ払い、返す刀で切り上げる。が、ラヴには一太刀も浴びせることが出来ない、どころかその拳を、足を、膝を、的確に優真の頭へ、腹へ、叩き込んでいく。

一撃でも攻撃を受けられない状況の中、ラヴは逃げることなく自分から、より前へと足をもっていく。

攻撃を食らう度に優真の体は吹き飛び、地面にめり込み、血を流す。

その度に回復し、傷こそないもののその苛つきは溜まっていく一方。そして、動かぬ右足は変わらぬままだった。

「糞がっ!!　　殺す!!」

「温い!!　　温すぎるぞ、小僧!!　　そんな事では俺は満足せんぞ!!」

「ラヴさん……」

建物は半壊。

壁に穴が開き、既に庭へと戦闘の余波は広がっていた。

自らの高揚を隠すことなく、吹き飛ばした優真を追って更に戦いの渦中へと飛び込んでいく。

戦いを好み、戦いの中で生きる。

そんな人生を容易に想像させる、そんな姿のラヴにはさすがの撫子も嘆息するしかなかった。が、その声がラヴに届くことはない。

嘆息するも、放っておくわけにはいかない。

彼の抹殺は、伊達や酔狂で行って良いものではない。どんな手を使っても遂行する。

それがトップの意見であり総意でもあった。

撫子——天童寺家が如何に力を持つと言っても、それが組織の決定事項ならば覆すことなど出来はしない。そして、これに撫子が参加しているというのは彼女もまた、優真の事を危険視しているからだ。

二年生で初めて同じクラスになった、特別な何かがあるというわけでもない普通の男子生徒。

それが撫子の優真に対する第一印象だった。

裏の世界で活動している撫子にとって特別意識をする必要のない生徒だと、そう評価していた。

が、この評価は同じ教室で過ごした一週間で見事に崩れ去る。

勉強がすぐ出来るわけでもない。悪くはなかったが、優真よりも

勉強の出来る生徒は何人もいる。

運動がすぐ出来るわけでもない。悪くはなかったが、優真よりも運動の出来る生徒は何人もいる。

特別な力を持っているわけでもない。

にもかかわらず、優真は普通ではなかった。

何の力も持っていない。腕っぷしはどうか分からないが、あの様子だと喧嘩は強くないだろう。

だが、それでも彼は違っていた。

それは『特別』と言うよりも、やはり『異常』と言った方がいいものだった。

あまりにも異常過ぎて、誰も彼もが無意識に目を逸らしてしまうほどだ。

だが、撫子だけは違った。

ありふれた平凡の中で埋もれた一般生徒とは違った彼女だけが気付くことが出来た。が、その正体は未だ判明していない。

異常であることは分かっている。

何かがある、そう思わせるにもかかわらず、優真には何もない。何も持っていない。

撫子が優真を生徒会に勧誘していたのは、その『何か』を探る事が目的でもあった。

そして今、彼は暴れている。

一ヶ月ともに同じクラスで過ごし、一ヶ月会話をしてきた、それで

も分からない異常を抱えて、彼は暴れる。
その手に凶悪な魔術を携えているのならば、撫子のすることは一つしかなかった。

「待ってください」

追っていこうと踏み出した一步を、後ろから止められる。

今までほとんど口を開かなかった彼女。吸血鬼の娘。境界者の女の子。エリス。

彼女の言葉に撫子は足を止めた。

ただの懇願ならばそうはしなかった。慈悲をかける余裕などないし、時は一刻を争う。夜になるにつれ、優真の力は更に強くなっていくだろう。

結界を解くことは出来ない。それをすれば周りにも甚大な被害が出てしまう。

そもそもこの結界は天童寺家を守るためのものではない。優真達を太陽から守るためのものでもない。

確かに太陽の光は防いだであるが、それはただの一機能だ。本来の目的は、優真をここから逃がさないことにある。

であれば、あまり時間をかけてはいられない。しかし撫子は足を止めた。

彼女の――エリスの声は決して懇願などではなかった。決意を秘めた、強い声だった。

「一つだけ……私に考えがあるんです」



「はあ……はあ……。糞が……どこにあんな力があるってんだよ……」

吐き捨てるように言う優真の体は地面に仰向けの状態で倒れたままだった。

幾度となく繰り出した攻撃。

必殺と言っているほど凶悪な武器を手を持ちながら、ただの一度もラヴに攻撃は届いていなかった。

躲され、反撃を受ける。そのやり取りを繰り返したかはもう覚えていない。

ただ分かったのは、歴然たる実力の差のみ。

今の優真では殺すことはおろか、倒すことさえ叶わない。そんな事実のみだった。

だが、それでも優真は止まらない。

たとえ無理だと分かっているとしても、実力の差を目の当たりにしても、それが行為を止める理由にはなりえない。

そんなもので止まってしまうほど、楽に抑制できるような欲求ではなかった。

だから優真は再び立ち上がる。

その巨大すぎる背中を目指すためではなく。追い付き、追い抜くためではなく。ただ自らの欲望を叶えるために。

彼を――殺すために。

「つもらん！！ つもらんぞ小僧！！ その手に持つ物はなんだ！！
！ ただの飾りか！？ 違うだろう！！ ならばかかってこい！！
俺に殺されにこい！！！」

一撃で十メートル以上吹き飛ばしてしまうその力。庭に生える木々はその力のせいで、倒れ、削られ、見るも無惨な姿へと変貌している。

それでも彼は叫ぶ。

自らの位置を、そして力を、わざわざ相手に、敵に、知らしめる。

「俺様に……俺様に偉そうな口きいてんじゃねえよ、糞があああああ！！！」

「そうだ！！ それでいい！！ それでこそ、俺が力を見せるに値する」

優真は、ただ突っ込んでいく。

正面突破。

小手先の小細工など必要ない。そんな事をしたところで意味はない。そんな事をしたところで実力差が埋まるわけでも、優真が強くなるわけでもない。

ならばやることは一つ。玉砕覚悟で突っ込むのみ。もちろん死ぬつもりなどない。

優真の殺意は、破壊衝動は、相手を殺さなければ癒されない。

その結果にいたるのであれば、過程などどうでもいい。むしろ狂喜の中で死ぬるのなら本望とも言える。

その手に持つのは必殺の刀。文字通り、当たれば必ず殺せるのだ。そう、当たりさえすれば……。

「ああ？ ……あああ」

だが、その刃はラヴには届かない。

目の前にさえ辿り着くことが出来ないほどに、離れていた。

怪我をしたわけではない。それに、ただの怪我ならば吸血鬼の治癒力ですでに治っている。

何かをされたわけではない。ラヴの動きは確かに速い。が全く見えないというほどではない。本気を出しているのかどうか、それを確かめる術を優真は持ち合わせていないが、少なくとも今までは見えていた。

近くにラヴがいるわけでもない。

だが、確実に何かをされていた。

地面に突っ伏したまま動けずにいる。

辛うじて動かせるのは目ぐらいなものだ。それ以外は、指の一本はおろか声を出すことさえ出来ない。

「ここまでか……。更なる飛躍を期待したが、まあいい。貴様の底は知れた、死――」

「求むるは癒し、闇の扉を開け放て」

と、そこで振り上げられた拳が止まる。
踏み出した足も止まってしまう。

近寄ってきたラヴを睨み殺さんとばかりの目付きが、自然と緩む。

敵を前にして、滅ぼすべき相手を目の前にして、二人は一瞬戦闘を、殺し合いを忘れてしまった。

歌声にも似た綺麗な言葉は二人の動きを止める、が、それが歌と似ていることは声が綺麗という共通部分だけであって、二つの本質は全くと言っていいほど異なる。ともすれば、真逆と言ってもいい。

片やその声を聞いた者に幸福の時間を与え、その奏でる音で想いを、心を、人に届ける。

片やその声を聞いた者に契約の時間を与え、その紡いだ言葉で、物も人も全て縛り付ける。

この似て非なる二つの違いは、その者の意思の違い。

言葉に心に乗せて届けるのか、言葉に契約を重ねて届けるのか。

「求むるは刃、我が剣となりて敵を切り裂け」

歌声、もとい契約の言葉を聞きながら、だったが別にラヴが動きを止める必要はない。

今更気が変わったために慈悲をかけてやる、というような優しさは元より持ち合わせていない。

何があろうとも、誰であらうとも、それが命令であるならば躊躇いはしない。自らの欲望に従って戦いを進めていき、飽きたところで止めを刺す。そんな簡単そうで一番難しいことを、彼は平然とやってのける。

その圧倒的实力で、目の前の敵を叩き潰してきた。

そんな彼が動きを止めたのには、やはり普通ではない。

尤も、今の彼は動きを『止めている』のではなく『止められている』のだが。

「求むるは盾、我が身を護る壁となれ」

誰かが近づいてくることは、二人とも分かっていた。

歌声がだんだんと大きくなっていった事も理由の一つであるし、何よりも隠そうとしていないその足音が、来訪者の存在を証明している。

ラヴを止めた者。

それを考える行為は、とても馬鹿馬鹿しいものだ。こんな事をする者は一人しかいない。

「求むるは絆、共にいる覚悟を胸に」

自分ではない第三者——エリスの登場に、しかしながらラヴは一切狼狽えない。。

割り切っているのか、心の中に隠してるのか、それはもちろん分からない。が、エリスはラヴを一瞥することなく優真の元へと向かっていく。

何を今更、とラヴは思った。

どう見ても、エリスは優真を殺そうとはしていない。むしろ反対、助けようとしている。

そんな事が無理だと言うことは既に全員が承知のはず。だからこそラヴがここにいるのであり、エリスの行いは、全く意味がないものだと感じていた。

ラヴは命令に背いたことなど一度もない。

自らの力への自信。トップへの尊敬の念。撫子への愛。などそこには様々な思いがある。たとえ暴走を止めることが出来たとしてもラヴのすることは変わらない。

そうならうとも、殺すだけ。

「我が従僕と認め、仕えることを許しましょう。名は？」

「……………」

「無駄だ。娘、邪魔をするなら貴様も殺すぞ」

真っ直ぐに優真の元へと歩くエリスは、あろうことか、優真の顔の前に座り込む。そこはラヴの真正面、つまりもし拳が振り下ろされれば、躲す術がないということ。

もちろん、意味もなくそんなことはしない。やはり優真のためだ。彼を守るため、ラヴから意識を外させるため、そして何より彼の顔をよく見えるようにするため、エリスはその場に腰を下ろす。

ラヴの言葉には一切答えない。

無駄口を叩いている時間は全くなかった。

そして、もう一度優真に問う。

『自分の名前が何なのか』を。

「斉梨……ああ！！ あゝあゝああ！！」

頭を抱えるようにして踞る優真。その光景を予想していたのか、一切狼狽えないエリスの視線は未だ厳しいものであることに違いはない。

そして拳を振り上げていたラヴは、その手を下ろし後ろに下がっていく。

慈悲をかけたわけではない。命令を忠実に守り遂行する彼は、やはり命令でしか止まることはない。

視界の端に写る撫子を見て、止めたただけだった。今すぐにも殺すことはできる。逃げたところで逃げ切ることさえ出来ない。それほどまでに開いている実力差が、少しの猶予を与えた。

「斉梨、何ですか？」

「あゝ、あああああ！！」

苦しむ優真に触れることさえせずに、更に問いを重ねる。

限界であることは分かっている。あれだけ吸血鬼の力に振り回されて、帰ってくる可能性の方が低い。

だが、優真を死なせたくなかった。

生きてほしいと願った。

隣にいてほしいと思った。

手段など残されてはいない。

出来る出来ないの問題ではない。やらなければいけないのだ。

やったところで、成功したところで、優真の未来が変わるというのは、あまりにも楽観的な考え方だ。そんなことは分かっている。が、自分がやらなければ、優真の未来は死ぬの一択のみ。

「名前は何ですか？ あなたの名前は？」

『斉梨優真』は吸血鬼の名前ではない。あくまでも人間としての名前である。

そして今の彼にないものは、まさしくそれだった。

名前。

名前がなければ存在することは出来ない。自分が何者なのかを、自分自身が把握していなければ、自己の存在を証明できない。

確かに、名前など第三者によってつけられた固有名詞に過ぎないし、自分で書き換えることなど造作もない。が、それが重要になってく

る。

無いものは探したところで見つかるわけもない。割れそうなほどの頭痛に苛まれながら、絞り出すように言葉を紡ぐ。

エリスが辛うじて聞こえるほどの小さな声。聞き逃してしまってもおかしくないような声を、エリスは聞き逃さない。

「我が従僕、斉梨優真、力を捧げ、変わらぬ忠誠を」

二人を中心とする魔方陣が突如現れる。

直接地面に描いていないにもかかわらず、その円は、中に描かれる複雑な文字は、はっきりと光を放ちながら浮かび上がっていた。

二人の時間を壊させぬように。守るように。

その輝きは消えることはない。

日も暮れた空が明るく照らし出される。いつもは空に浮かぶ太陽が、今日、この時間だけは地上に降りてきたような錯覚さえ思わせる。

その中心にいる彼、斉梨優真の二度目の人生はようやくここから始まることとなる。

天童寺撫子が、最高の生徒会長を感じた脅威。

その真価が発揮されるのは、もう少し後の事である。

向けられた牙の名は、本性（後書き）

破壊衝動。

身を任せるにはあまりにも凶悪で、脆い。

一度足を踏み入れてしまえば、後に残るものは何一つない。

大切なものも、大切でないものも、全てを喰らい尽くすまで終わらない。

そんな者に照らされる太陽は、あまりにも眩しすぎて、輝きすぎる。

そんな太陽がすぐ隣にいることを、人は誰しも忘れてしまう。

あまりにも近くて、その光が眩しいということさえ分からなくなってしまう。

失って初めて分かる平凡は、二度と手にすることの出来ない宝石だった。

12話です。

相変わらず更新が遅くなってしまう申し訳ありません。

では次回予告を。

失われた力、苦しむ少女。

その手に必殺の武器を携える少年は、決断する。

他の誰のためでもない、自分のためでもない、彼女のために戦うと。

選択肢は一つだけ

一週間という時間をどう思うだろうか。

六十万四千八百秒。

一万八十分。

百六十八時間。

七日。

一ヶ月の四分の一。

一年の四十八分の一。

言い方は色々ある。まあ、大抵の人は七日間と言うだろう。

秒で言われても正直実感が湧かないし、年で言われても『だから何？』としか言いようがない。

一週間。

別に僕が一週間が好きだからという理由でこんな話をしてるんじゃない。と言っても、何か大事なことを言いたいわけでもないんだけど……。

一週間。七日間。つまり何が言いたいかというと、僕が眠っていた時間らしい。

らしいというのはもちろん、人から聞いた話だからであって僕は一週間という時間をあまり実感できずにいる。

変なオッサンがいたことは覚えているんだけど、どうもその辺りの記憶が曖昧で思い出せない。

しかし残念ながら、僕にとって一週間眠り続けるという事実は、馬鹿にされるかもしれないけどあまり大変だったとは思わない。

風邪で二、三日寝込む。ということはあったけど、意識が戻らないまま長時間、というか長期間を過ごすのが初めての事だとしても、だ。

そしてこれは、『本人は寝ているだけなんだから、楽で当たり前だ』ということが言いたい訳じゃない。

僕も大変だったと思う。

一週間もの間、意識不明に陥った人。という肩書きは――まったくもって必要ないし、欲しいだなんて微塵も思わないけれど――とても貴重なものだろう。

だけど、その結果として再び太陽の下に出てこれるようになった、ということを考えてれば、まあ妥当なところではないだろうか。

この先、いつ治るのか分からなかったこの状況を覆すことが出来たんだから、その代償が大きくても仕方がない。誰かが言っていた『等価交換』というやつだろう。

僕の力は殆どなくなってしまったけれど、僕が彼女と無関係になっただというわけじゃない。僕は以前と同様、否、それ以上に彼女の関係者となっている。

そして今の言い方では齟齬が生じてしまうだろうから補足しておく。僕の力は、なくなったのではなくエリスさんに移ったということらしい。尤も、何時移ったのかなんて全く覚えていない。

まあ今の僕は強い力を使えないから、結果だけを聞いても一応は納

得が出来る。

そのエリスさんかというと、見た目はあまり変わったように思えない。
原理はどうなっているか分からないけど、どうやら彼女も無事らしい。

というのはもちろん表面上だけだ。

僕は、僕たちは、以前よりも悪化していると言っても過言ではない。
まずはエリスさん。彼女は境界者であるがゆえに色々と制限がついていた。けどその代わりに本来の吸血鬼とは異なる部分も持っていた。

それが、吸血行為の免除だ。定期的に血を吸わなければならない吸血鬼とは違って境界者はそんなことをしなくても良かったらしい。

『らしい』と、過去形で話しているのは今はそうではないと言っていることと同じだけれど、まさにその通り。今は必要だそうだ。

僕の力を受け取っているから。

境界者の眷族は一体何なのか。

その答えは未だに分かっていない。別に分からないと困るということでもないんだけど。やっぱり気にはなってしまう。

そんな力を受け取ったエリスさんは、吸血鬼としての力が強まりその代償としてその体を維持するために定期的に血液を摂取する必要が生じてしまった。

尤も、その頻度は月に何度かでいいらしいけれど……本当のところは分からない。

僕には何となくだけど分かることがある。彼女が、彼女たちが、僕に何かを隠しているということだ。

明確な理由は特にない。けど、そう何度も記憶を失うことなんて普通ではあり得ない。いくら僕が普通じゃないんだとしても、さすがに二日で二回はやり過ぎだ。

それに、何があったのかを何一つとして詳しくは語ってくれない。起こった事の結果だけを聞かされ続ければ、どれだけ頭が悪かろうとさすがに何かあると分かってしまう。

でも、僕がその事について文句を言ったり、問い詰めたりはしない。したって無駄なことは分かりきっているし、話す気があるなら既に僕は知っているはずだ。それをしないということは、何か事情があるのだと思う。

正体不明の第三者と一悶着あったとか、そんなところだろう。僕としては、僕自身が発狂して暴れていたとかだと思っている。

残念ながら、僕のお粗末な想像力ではその辺りが限界だ。

でも、僕の中では、この考えは当たらずとも遠からずといったところだと思っている。敵がいるのなら教えてくれるだろうし、僕の事だからこそ言えないというのは、いかにもあの二人らしい。

いや、天童寺生徒会長ならそこまで考えて、あえて言っていないとかもあり得るだろうけど……この辺りにしておかないと疑心暗鬼に陥

ってしまおう。

今大切なことは、これからどうするかだ。

僕の体の事もあるし、しっかり考えないと。

「斉梨！！　話を聞いているのか！？」

「え？　あつ……はい、一応は……」

「なんだその返事は！！　お前、これを解いてみる」

ちなみに今は授業中だったりする。しかも何かとつけて口うるさい教師が担当している数学だ。数学自体は別に嫌いでもなんでもないし、結構好きだったりするんだけど、如何せん教師が駄目だ。

「さっさとしろ！！　解けないのか？」

この教師、別に僕が憎くてこんな態度をとっているのではない。とする時は、たとえば天童寺生徒会長にだろうととるだろう。尤も、今までこの教師が天童寺生徒会長を当てたことがないんだけどね。たぶん、優秀な生徒は扱いづらいんだろう。

あんな大きな――そんな表現では怒られるかもしれないが、生憎僕には他の表現が浮かばない――家に住んでるし、エリスさんを余裕で入学させるくらいだから力もある。そんな彼女を怒ることはしたくないんだろう。

主に、自分の首のために。

まあ、天童寺生徒会長は怒られる事をしないんだけどね。
それよりも授業だ。

えっと……。

「答えは『X-5』です」

ふう、これでひと安心。もう何かを言われることはないだろう。ちゃんと答えたし。
が、それはあくまでも僕の感情であって、先生のそれとは全く違ったようだ。

現に先生の顔は苦虫を潰した——本当に潰した人はいるのだろうか？——表情だった。

「途中式は？」

「……え？」

どういう事だろう。答えが間違っているのか？

……いや、答えは合っている。にもかかわらず、途中式？
純粹に疑問に思ってしまった。だからだろう。

僕は、自分の思いを何一つ隠すことなく話してしまった。

それはもう、完全に教師を馬鹿にした様子で。

「あの……答えが間違っているんですか？」

「いいから途中式を書け。今まではどうだったか知らんがな、俺はそんなものは答えとは認めない」

「いや、答えは合っているんですが……」

「適当に言っていれば何時かは当たるだろう。途中式でそれを証明してみろ」

ここで素直に途中式を書けばいいのか？

でも、答えは合ってるんだけどな。この問題自体は証明問題でもなんでもないし、途中式は答えの証明のためにあるんじゃないかって、答えを導き出すためのものであるはずだ。

それをそのまま伝えようと、教師は更に熱くなって僕に怒鳴ってくる。

『いいからやれ』だとか、挙げ句の果てには『教師の言うことが聞けないのか』何て事まで言ってくる。

「目的と手段が逆になっていませんか？　これは式を解く問題のはずですし」

「ぬう……」

「途中式はあくまで途中の式ですよね？　別に答えが分かっているならわざわざ書く必要はないと思うんです。証明問題は、それ自体が解答であるというのが僕の考えなんですけど」

僕の口は止まるところを知らず、自分でも驚くほど雄弁になっていた。そんなことをすればクラスで目立つのは当たり前。全員からの視線が僕に集まる。

だけどどうしてだろう。僕にも恥ずかしいという感情は確かにあるにもかかわらず、今はその感情が全く沸き起こってこない。

いつもの通り冷静で、僕の意識は一步後ろでその様子を観察しているみたいだ。

自分の事なのに、まるで他人事のようにしか思えない。

いつもの僕なら、こんなことは一切しないはずだ。

何かを言われたとしても、相手は所詮名前も覚えていないような教師。これからの長い人生の中でどれだけ僕に影響を与えるのかと問われれば、答えは決まっている。

与えられない、だ。

それなのに、僕はこんな不毛なことをしている。

授業時間を削り、誰ともしたことがないような長話を。馬鹿馬鹿しいの一言でしかない。

そもそも、僕の主張だって僕の考え方だけであって譲歩することぐらい朝飯前だ。今までもそうしてきたし、これからそうだろう。

否、もっと言うならば、譲歩するような考え方を持っていることも驚きだ。

他人に干渉せず、干渉されず、しかしながら周りの空気に流されていく。それが意図的なのかどうかは置いておくとしても、それが僕の生き方だ。

『言っても分からないことは言わない』

実にシンプルな考えと言ってもいい。

言ったところで、聞いたところで、理解できるとは思えないし、別に理解してほしいとも思わない。

それ以前に、誰かと楽しく会話することさえ嫌悪感を抱くほどだ。

と、そんなことを考えながら話していた僕だけど、言葉を止めて席につく。

別に先生に指示されたとかじゃない。時間は有限だということ。

そう、チャイムが鳴ったのだ。

誰がこの『キーンコーンカーンコーン』という音程を考えたんだろうとかどうでもいい事が頭をよぎる。

調べ方が悪かったんだろうけど、昔は分からなかった。

両親はおろか学校の先生も知らない。

今ならば、インターネットという時代の最先端技術でどうにかなるかもしれないけど。

足早に僕は教室を出ていく。これ以上あの空間にいては、更に話をしてしまいそうだったからだ。

正直、自分自身が恐い。

あんな意味の分からないことを、生産性の欠片もないようなことを、平然とやってのけた自分が気持ち悪い。

自己嫌悪等という格好いい言葉を使うつもりはない。
憤っている等という如何にもな言葉を使うつもりもない。

ただ気持ち悪かった。

自分自身を得体の知れない存在に思ってしまった。

目が。耳が。口が。手が。足が。斉梨優真という人間の体の全てが。
僕のものであるはずなのに、僕が動かしているはずなのに。

全くの別物のように思えてならない。

久しぶりに、死にたいという、気分になる。

それから、あまり変わった事は起こらなかった。

否、それは偽りだ。クラス中の視線が僕に集まっている。

チラチラと何度も何度も見られていることに、気付かない振りをするの
も大変なんだと、今日初めて知った。

いつも視線を集めているであろう天童寺生徒会長は、こんな気分なの
だろうかと少しばかり気味の悪さに同情したりもした。

時間が経つにつれてその視線の数は自然と減っていく。

その過程を感じることが出来たのは、これからの人生では経験出来ない
ことだろうから、それだけは良かったと言っておこう。何も、
全てを否定する気は僕にはない。

「そういえば優真君、今日は随分と珍しい行動をとっていたね。私
はあんな優真君を初めて見たよ」

「そ、そうなんですか？　その……ちょっと格好よかったですよ？」

天童寺家へと帰ってきた僕たちは天童寺生徒会長の部屋でお茶を飲んでいた。そんな時、ふと思いついたように天童寺生徒会長は話を始める。それにエリスさんも便乗しているんだけど……。

遠慮しながら人を誉めるのは止めてほしい。あと、何で疑問系なんですか。

とは、直接言えない僕。心の中だけで呟くにとどめておく。
そうしないと色々と「優真君、遠慮なんて私たちはしていないよ？」

……あれ？

「そ、そうです。私は格好いいと思いましたよ」

「……そうですか。ありがとうございます」

相変わらず、僕のプライバシーがないことに驚く。と言っても、こ
う何度も繰り返していれば、さすがになれてくるというものだ。
ふう。落ち着こう。

天童寺生徒会長はすごい人なんだ。今更何をしたところで驚く必要
はない。

こうして僕たち二人を天童寺家で面倒を見てくれている。色々出来
て、寧ろ当たり前、ぐらいに構えていいはずだ。

えっと、お茶のおかわりは……。

「あつ、優真さん。落ち着きたいのなら――」

「あなたも出来るんですか!？」

「えっ!？　な、なんの事ですか!？」

あまりにも衝撃的だった。まさかエリスさんまで……っというか、よく思い返してみると今までにそういう事があったような気がする。どういう事だろう。

もうここにいる人達は、全員人外だとか……。

人外だとか……。

くそっ……完全に人外じゃないか……。

「すみません、ちょっと席を外します」

笑顔で席を立ち上がるエリスさん。僕のこの落ち込みまでは察してくれないんですね。

そうだよ。どうせ僕が分かりやすい表情をしていて、全く喋らなくても会話が出来るくらいに表現が豊かなんだ。そうとしか考えられない。いや、そうであってほしい!!

「優真君、君はポーカーフェイスが得意だね。何を考えているか分からないよ」

「……天童寺生徒会長」

「うん？　なんだい、優真君」

彼女の微笑は崩れない。とても綺麗で、儚げで、きらびやかで、美しくて……。ラヴさんとやらが愛しているというのも分からないでもない。それほどまでに完成されている。この歳で。平均寿命の四分の一も生きていないにもかかわらずだ。

そんな彼女の表現が一度でも崩れたことがあるのか、僕は本気で悩んだことがある。

意味が分からなかったから。

理由が分からなかったから。

今となっては、理由なんて何もない。というところで落ち着いているけど。

そんな彼女の顔を見つめて僕は言った。

その時の僕の表情は、さぞかし愉快なものだったのだろう。

「勘弁してください」

「ふふっ。何の事だい？」

彼女はわざとらしく微笑み、そして質問に対してちゃんと返事をしてくれることはなかった。



前兆はあったのかもしれない。

僕が気がつかなかっただけで、否、気がついていたはずなのに、自分から目を背けていたのかもしれない。

しかし、言い訳だろうが、弁解だろうが、謝罪の言葉だろうが、言ったところで、何も変わらない。

保身のためとか、贖罪のためとか、そんな事を考えることさえ、出来る状況ではない。

「……一体僕は何をしていたんだ」

自分の不甲斐なさを改めて痛感させられる。いや、今気づくことじやなかったはずなんだ。

もっと昔から分かっていたことは。今なおその状況が変化していないことは。他の誰でもない、僕自身が一番分かっていたことだったはずだ。

なのに。

いや、言い方が悪い。この言い方なら、仕方がないみたいに聞こえてしまう。仕方がないことなんて何一つない。全て僕が悪いのだから。

ここはこう言おう。

にもかかわらず、だ。

にもかかわらず、僕はいつもの日常を過ごしていた。吸血鬼であった体が少しだけ治り、太陽の下で暮らせるようになって、正直嬉しかったのだろう。

そうだ、認めてしまおう。

僕は嬉しかったんだ。

普通に暮らせることが、太陽に怯えずにすむ生活が、化物ではない体であることが、たまらなく嬉しかったのだ。その代償の大きさも分かつてしなないで……。

一週間寝たままだった？

馬鹿馬鹿しいの一言でしかない。

そんなに甘くないことぐらい、容易に想像できたはずなんだ。僕が持っていた力の大きさを考えれば。変化の大きさを考えれば。

あの程度ですむはずがなかったんだ。

こんなにも僕が語っている理由について、少しだけ説明しておこう。いや、本当は説明も何もない。ただ事実だけを語ればいいんだ。それだけで十全だろうし、寧ろそれ以外は蛇足とも言える。

エリスさんが倒れた。

倒れたという表現はあまり的確じゃないかもしれない。ただ、僕は医者じゃないし魔物に精通しているわけでもない。だから見たままを、ありのままを話しているだけだ。

意識を失い、目を覚ますことはない。息はしているし、苦しんでいる様子がないことが唯一幸いと言えることだと思う。

原因は不明だそうだ。そもそも、魔物と人間でさえ違っているにもかかわらず、彼女は境界者。ハーフなのだ。違っているといえば違っているだろうし、同じだといえれば同じだ。

そんな状態で何かをすることが出来るはずもなく、何も出来ないのが現状だ。

天童寺生徒会長は『何もしない』という表現を用いていたけれど、そこに大差はない。今のこの状況において、『しない』なんて選択肢が出てくるとは思えない。『しない』なんてものは建前だ。『出来ない』とはっきり言ってくれば、まだ落ち込める余地があるのに。

彼女はそれを許してはくれない。

彼女は僕にこう言った。

『助けたいのなら、君が戦え』と。

確かにその通りだ。彼女は何もおかしな事は言っていない。エリスさんを助けたいのであれば、僕自身も動き、戦うべきだ。

そんなことは分かってる。分かってはいるけれど……首が縦に動くことはなかった。

——恐怖。

その感情が、僕を支配する。心の全てを、体の全てを、闇に飲まれてしまいそうになる。

自分が情けないことぐらい分かっている。物語の主人公なら、有無を言わさずに行動を起こし、敵を倒して仲間を助ける。たとえ自分の命が危険に晒されようとも、そんなことが理由では退くことはな

い。

でも、僕には無理だ。

そんなことは出来ない。

僕はもう、ほとんど吸血鬼じゃないんだ。残っている機能なんて、何一つない。

傷を負えば、治るのに時間がかかる。

目がよく見えるわけでも、耳がよく聞こえるわけでもない。早く走れるわけでも、怪力を使えるわけでもない。

僕が使えるものなんて、精々弱々しい魔術だけだ。

嘘だ。魔術なんて、欠片も使えない。

使おうと思ったことさえ、自分に必要だと思ったことさえ、なかった。そんなものを使えなくても生きてはいける。僕が何かをしなくても、周りの人達が解決してくれる。

そう思っていたし、実際にそうだった。尤も、その周りの人と言うのはエリスさんの事を指す言葉なんだけど……。

僕には何もできない。弱い僕には、強くなれない僕には、何かをする資格さえない。

だから僕に出来ることと言えば、こうして毎日エリスさんの様子を見守ることしかない。

いつ目覚めるのかも分からない彼女は、いつ目覚めてもおかしくないような顔で眠っている。

ただ目を閉じていただけだと言われれば、完全に信じてしまえるほど穏やかに、静かに、ただ小さく呼吸によって胸が上下するだけだ。

「失礼する!!」

大きな声が扉の向こう側から聞こえたかと思えば、こちらが返事をする前にその人は何の躊躇いもなく勢いよく扉を開けて入ってきた。初めて会った時と変わらない全身白のスーツ。オールバックの髪。その手に白い薔薇を持っていないことだけが唯一の違いだった。

未だに僕はここの魔術師たちと仲良くなれないけれど――向こうも仲良くしようという気がないので、僕もそれに合わせている――この人だけは何故か違った。

会えば何かと語ってくれるし、真意はともかく僕が話をするのは彼女たち二人を除けばこの人だけだ。

「……ラヴさん？」

その呼び名を僕は言う。

僕があだ名みたいなものと呼ぶなんて事はもちろん人生初の事だし、正直なところ僕もあまりいい気じゃない。けど、天童寺生徒会長もこの人の本名は知らないらしく、僕が直接聞いても『小僧、俺は誰にも本名は教えん!!』それは何故か!?! 愛ゆえにだ!! 愛しているからこそ俺は、自分の事は語らん!!』なんて言葉を返されてしまった。

さすがに無理矢理聞き出すだけの必要もないと感じて、僕はあだ名を呼んでいる。

「ふんっ、やはりここにいたか小僧」

「何なんですか？ 用事がないなら――」

「貴様に用はない。その娘を殺しに来ただけだ」

時間が、止まった。僕の周りで、全ての音が消えてしまう。ただ心臓の音が五月蠅いくらいに耳に届き、自分が生きていることを、焦っていることを自覚する。

今、何て言った？

殺す？

僕の耳は良いわけではないけれど、悪いわけではない。この距離で言われた言葉を聞き間違えるようなことは絶対にないだろう。言葉の意味が分からないわけでもない。殺す。殺害するということ。命を消すと、彼は言っているのだ。

「な、何を言っているんですか！？ 殺す？ 彼女は何かしてないじゃないですか！！」

「ふんっ、何を言うかと思えば……」

声を荒らげる僕に対してラヴさんはいたって冷静に、いつもと変わらない口調で話しかけてくる。その少し見下したような口調を変えることなく。

体の奥底から叫んでいる。

口には出ない言葉が、頭の中を占めていく。

彼女を死なせたくない。

彼女を失いたくない。

彼女と――共にいたい。

「待ってください!!」

僕は叫んだ。拳を降り下ろさんとしているラヴさんの背中に向かって、精一杯の声をぶつける。

馬鹿馬鹿しい。

何をやっているんだ？

僕はこんなことはしない人間だろう？

何でそこまで必死になる必要がある？

色々な言葉が頭の中を駆け巡る。僕がいつも思っていたこと。考えていたこと。

今、この瞬間ほど、その考えを、思いを、疎ましく思ったことはない。邪魔するこれらを、必死で押し退ける。

十六年という歳月が生んだ壁を壊すために。

もう一度、始めるために。

「僕が……僕が彼女を守る!! 彼女のために僕が戦う!!」

「ふんっ、根性だけは一人前のようだな小僧。だが、何のためだ！
？ 確かに弱者は守られることで生き残る。貴様がそれをする必要
など何一つないだろう」

そんなことは分かっている。あなたよりも僕の方が、彼女よりも僕
の方が、僕の事をよく知っているんだから。僕が何かをする人間じ
ゃないことくらい理解している。

でも……それでも！！

そんなことで、諦めきれるはずがないじゃないか！！

僕はまだ、彼女に恩を返してすらいらないんだ。それだけじゃない。
彼女にはまだまだ時間がいるはずなんだ。

それを守ることに何を躊躇う？

誓ったじゃないか。僕は彼女の眷族になると。ならば、ここで動く
ことに何の恥じらいも必要ない。否、動かないことの方が、余程恥
じじゃないか。

「何のため？ 理由なんていらぬ。そんなものがなくても、戦え
る。いや、『彼女のために』。これ以上の理由なんて、何一つ必要
ない！！」

「珍しく吠えるな小僧。その心意気や良し。だが、貴様では何一つ
守れん！！ 口先だけの強さなど、何の意味も持ちはしない！！
見せてみる、貴様の力を！！ 貴様の覚悟を！！ その手に持つ刀
一本で俺を倒してみろ！！」

そうだ。僕には力がない。誰かを守る力はおろか、自分の身を守る力さえない。

そんなことも分かっているんだ。改めて自覚するまでもない。彼女のこの刀を使ったところで、それは変わることはない。これを使うには、僕はあまりにも弱い。

体だけじゃなく、心も。

容易く崩され、容易く崩れていく。そんなものが必要なんじゃない。僕に必要なものは、本物の強さ。相手の命を奪う、圧倒的暴力。

だから……だからこそ。

僕にはこうするしかない。

こうするしか、方法を知らない。

「お願いします!! 僕に戦いを教えてください!!」

土下座。

人にものを頼む時は、やはり相応の態度というものがある。屈辱だと言う人もいるけれど、そんな安っぽいプライドなど、生憎持ち合わせてはいない。

とうの昔に捨てたようなものを、わざわざ今拾おうともしない。僕に出来ることなら何でもやる。

頭を下げて力を得ることが出来るなら、いくらでも下げる。

頭を地面につけているから、ラヴさんの表情は分からない。

簡単に頭を上げるわけにはいかないから、僕はじっと耐えるしかない。

「ふんっ……ふははははっ！！ 面白い！！ 面白いぞ小僧！！
俺にその答えを示した者は、貴様が初めてだ！！ ふははははは
っ！！ 愉快！！ 実に愉快だ！！ 良いだろう！！ 教えてやろ
うではないか！！ 貴様の覚悟、この『愛を識る者』しかと受け取
ったぞ！！」

大声で笑いながら、ラヴさんは部屋を後にする。残されたのは、土
下座のまま固まった僕と、静かに目を閉じている彼女と、そして、
彼女のこの刀のみ。

僕はその柄を強く握りしめる。

初めて見た時は抜き身の刀で、すごく怖いと思った。

今、鞘に収まった状態ではあるが、その時以上の恐怖を感じる。

これが覚悟。

命を奪う——覚悟。

それを目の前にし、正直逃げ出したくもなる。そんな心に鞭を打ち、
刀を鞘から引き抜く。照明が反射し、刃が光を放つ。刃毀れと言う
ものを実際に見たことがない僕は、その刀を評価することなど出来
はしない。

緩やかな曲線の刀身は、鰐は、柄は、見ていだけで素人にも分か
るほどに美しい。

理屈ではなく、感情が沸き起こってくる。

しかし同時に感じる。

その手に重くのし掛かってくる重みに。

決して重量だけではない、斬ったものの想いまで込められているかの如くだ。

だけど、僕はこれを受け入れなければいけない。この重さを、想いを、無下にすることはしてはならない。そう、感じる。

「今度は僕が守る番です。あなたは、僕が守る」

返ってくることのない決意を彼女の前行う。

刀を鞘に納め、目を閉じる。

何もしていないにもかかわらず、動悸が激しい。

落ち着く必要なんてない。これは、僕に必要なものなんだ。必要で、今までなかったもの。だからこそ、振り払うことはしない。

受け入れて、受け止めて、感じないといけない。

これが僕なんだと。

僕は刀を手に、部屋を後にする。

後ろを振り返ることなく、扉を閉める。僕の双眸は前を見る。

下でもなく、後ろでもなく、ただ前を見る。

踏み出す一步はいつもと変わらない。

外見は問題じゃない。僕に最も必要なものは、まず心の強さだ。彼

女を守るといふ強い意志だ。

だから僕は歩みを止めない。

嘘を嘘でなくすために、戯言を戯言のまま終わらせないために。

嘘から出た実。

先人の残した言葉を証明してみせようじゃないか。

選択肢は一つだけ（後書き）

心と体は二つで一つ。

だが、コインの裏表とは似て非なるもの。

心と体は独立している。

だが、二つが揃わなければ意味がない。

13話です。

随分と遅くなってしまう申し訳ありません。

次回からは戦闘も増量していききたいと思います。
よろしくお願いいたします。

次回予告。

相手は待つてなぐれなかった。

突然の襲来。

圧倒的軍勢の目的はただ一つ。

王の血をひく彼女のみ。

そんな状況になって初めて、少年は自分の本当の気持ちに気が付いてしまうのだった。

変わっていく想い

「はぁ……はぁ……」

広大な天童寺家の土地。

その一部を使って行われている優真の特訓は、もはや名前だけのものであり実際は大きくかけ離れていた。

——化物。

それが優真の、ラヴに対する評価だった。否、評価などではない。彼を示す言葉として、これ以上にならないほど適したものである。

戦いを教える。

はつきりと言われたその言葉に、優真はかなりの期待を抱いていた。素人である優真は『ブラッドデリート存在否定』を扱うどころか、基本的な事さえ何一つ知らない。

一方ラヴは魔術師である。戦闘のプロと言ってもいい。そんな彼に教える乞うのだから、期待するなと言う方が無理であろう。

ただ優真の唯一の不安は、撫子にその事を伝えた時に『……………』と一切返事をしてくれなかった事だったが、あまり気にすることではないと判断し、ラヴの元へと向かっていった。

その後、何が待ち受けていたかと言えば——地獄だった。

「来たか小僧！！ さあ構えろ！！ かかってこい！！ 俺が自ら、直接貴様の体に教えてやる！！」

「……えっ？」

開口一番、どんな厳しいことを言われるのかと身構えていた優真だったが、あまりにも単純なことに呆氣にとられてしまう。

だが、ラヴには何の変化も見られない。どころか、時間が経つにつれて興奮しているのか、雄弁になると同時に凶悪さが全面に押し出されていく。

「必要なものは実戦のみだ！！ 訓練など何一つ必要ない！！ 死にたくなければ、掴みとれ！！ 感じろ！！ 命を懸けずに得ることが出来るものなど、何一つありはしない！！ そんなものは偽物だ！！ いいか小僧！！ 生き残りたければ戦え！！ 抗え！！ 『己の心が敵だ』などと温いことは言わん！！ 俺が貴様の敵だ！！ さあ来い！！ 俺を殺しに来い！！ 来なければこちらから行くまでだぞ！！」

「……無茶苦茶だ……」

こういうことか、と優真は直感で理解する。

何故撫子が何も返してくれなかったのか。普段の彼女ならば、返答に困ることなど絶対にあり得ないだろう。

それが冗談であろうと、皮肉であろうと、いつものように微笑で返

してくるはずだ。

だがこれは……。

彼は……。

恐らく彼自身がこうしてきたのだろう。その人生がどれ程過酷なものかを知ることが出来ないが、そうでなければこんな事、普通は思いつかない。

だが、それはあまりにも極端すぎた。とても素人相手のやり方とは思えない。否、確実に上級者であっても難しい。

それが分かっていたからこそ、撫子は何も返さなかった。

『頑張れ』の一言さえかけることをしなかった。

そんな事は言っても意味がないのだ。頑張って生き残れるのであれば、死ぬ者など誰一人としていない。戦いで命を落とすことなどない。

必要なものは確かな実力。

死なないための、生き残るための、力。

「くっ……上等じゃないか。やってやる。僕は死ぬわけにはいかないんだ。彼女は、僕が守るんだ」

刀を抜いて両手で構える。

たったそれだけの事で、柄を握る手が汗ばむ。たったそれだけの事で、早くも体が震える。

相手から放たれる気迫に完全に飲まれてしまう。

『逃げろ』と、直感が告げてくる。

直感だけではない。脳が、筋肉が、必死に警告している。

その警告を無視することは容易ではない。

生物が持つ本能に逆らうと言うのだから当たり前だ。

ラヴの底知れぬ力に――比喻表現ではなく、本当に底が見えない――
――優真は自身を奮い立たせて何とか打ち勝とうとする。

(……天童寺生徒会長なら、こうじゃないだろうな……)

だがしかし、恐怖とともにそんな感想が優真の中に芽生えたのも確かだった。

撫子に教えを乞えばこんな事にはならないだろう。訓練の内容までは分からないが、あの生徒会長は一からしっかりと教えてくれると優真自身がそう思ってしまう。

だが、それではあまりにも――遅い。

基礎は大切だ。基礎がしっかりとしているからこそ、その上に様々な要素が上乘せされていく。言わば基礎とは、石を積み上げていく際に最初に置く土台と同じなのだ。

それは間違っていない。今の優真には何一つない。積み上げる石さえない状態なのだから。

だが、基礎が出来ていれば戦闘で勝利できるのかと問われれば、答えは否である。

弱肉強食。結局は、強い者が勝つのだ。そこに基礎が出来ているかなど関係ない。

基礎が出来ていれば、応用が効くと言うだけだ。出来ることが増えれば確かに戦いを有利に進めることが出来る。だが、それが勝てると言うことには直結しない。

色々なことは出来るが戦いは弱い。などと言う者は沢山いる。所謂『器用貧乏』という類いのものだ。

そんなことになっては本末転倒だ。

優真が強くなりたいのはエリスのためであり、それ以上の目的はない。否、それが全てだ。

必要なものは力のみ。

殺し合いをするための力だ。

ならば、これ以上のない訓練、否、実戦だろう。

恐らくラヴの性格からして『ここで死ぬならば、何一つ守れはしない』とでも言いたいのだろう。

強く刀を握りしめる。

刀の重みを再確認するとともに、ラヴを睨み付ける。

ゆっくりとだが、確実に近づいてくるラヴ。今の優真に彼の攻撃を

躲す事など出来ない。そんなことをすれば、じり貧どころか、一撃で終わってしまう。

ではどうするのか。

答えは、一つしかない。

「うおおおおお！！」

「いいぞ！！ そうだ！！ それで正解だ、小僧！！ 来い！！
来い来い来い来い来い来い来い来い来い来い！！ 力を、技を、貴様の全てをぶつけてみる！！」

向かっていく優真を両手を広げて迎えるラヴ。

実に楽しそうなその表情、待ちきれないと言わんばかりの態度。その他、全ての余計なものは目に入らない。

目に入れる必要がなかった。

余計なものをいれている暇などなかった。

そんなことを気にしてられないほど、優真は焦り、動揺していた。圧倒的实力差。それが分かっているからこそ意味のあるものとなるのだが、否、それは、分かっているからこそ意味のあるものとなるのだが、そんな理屈を説明されたところで納得出来るものではない。

が、それでも優真は前に出る。

促されてではない、急かされてでもない。
それが最良だと、正解だと考えて、信じて、突き進む。



「ふんっ、ここまでか……」

「……………」

余裕の笑みを見せるラヴ。その服には傷はおろか、埃の一つさえ付いていない。一体どう振る舞えばそんな事が可能なのか、それはつい先程まで戦っていた優真にも分からない。

一方優真はと言うと、満身創痕の四文字が完璧に似合う格好になっていた。

殺し合うとは言っても、今の優真にはラヴの攻撃をいなす事など出来ない。受けたダメージは吸血鬼のように瞬時に癒えたりはしない。その辺りの事を考慮してくれていたためか、ラヴからの攻撃はほとんどなかった。

服の破れや体の傷は、言うなれば優真の自滅と言ってもいい。

尤も、そうなるようにラヴに誘導され、見事に優真がそれに嵌まったというだけの話なのだが。

だが、全くラヴからの攻撃がなかったのかと言えば、そうでもない。それがラヴにとっての何割の力なのか、好奇心よりも恐怖の方が勝っているためにそれを聞いてはいないが、加減をしてくれたことは確かだった。

と言っても、加減は所詮加減でしかない。攻撃をしないというわけではないし、優真の防御力が向上するわけでもない。

何が言いたいかと言うと……。

この訓練——と言う名の実戦——の最中、優真は幾度となく意識を手放した。拳を腹に、蹴りを頭に、叩き込まれた。

が、そこはやはり戦闘のプロ。ラヴは治療の方にも精通しているように、意識を失った優真はその都度治療され——と言っても傷を治すものではなく、あくまで意識を回復させるだけのものだ——意識を取り戻し、再び戦場に戻らされた。

『存在否定』は掠りもしなかった。

刀に頼るだけではない。肉弾戦。落ちている石など、ありとあらゆる攻撃を仕掛けるものの、それが功を奏する事はなかった。

そんな状態で無様に地に伏せる優真を、しかしながらラヴは笑い飛ばすことはしない。

呆れることも、侮蔑することも、ない。

その表情には相変わらず笑みが見え隠れするが、それは嘲笑ではなく、純粹に楽しんだ者がするそれだった。

「小僧、初めてにしては悪くはなかった。なに、三日もすれば気絶しない程度にはなるだろう」

尤も、死ぬほど辛くなるのはそこからだがな。と言い残してラヴはその場を離れていく。
その背中を眺めることさえ出来ずに、何とか仰向けになって空を見上げる。

挨拶がしたくなかったわけではない。正確には出来なかったのだ。

その場には既にラヴの姿がなかったから。

いつ消えたのかも分からない。気配はおろか、音さえ聞こえない。

「……はあ……」

優真の口から、思わず溜め息が漏れる。

あまりにも遠く、あまりにも大きい。その存在を改めて目の前にして溜め息しかなかった。

「やあ優真君、随分とやられたみたいだね。大丈夫かい？」

「……みたいだねって、見てたんですか？　あまりいい趣味だとは思いませんけど」

「今日はまた厳しいね。とは言ってもここは私の家なわけだし、許してくれると嬉しいな」

倒れている優真の視界に入ってくるようにやってくる撫子。

学校を休んでいる優真はともかく、撫子がここにいることは普通ではあり得ない。そして休んでいるにもかかわらず学校の制服を着ている理由も分からなかった。

「許すも何も、僕は怒っていませんし」

分からない事はいつまで経とうが分からない。そんなことに時間を割くことは早々にやめてしまい、優真は再び目を閉じる。

撫子を視界から外してしまふことが目的ではない。そんなことをしたところで、彼女の存在感が消えないことぐらい優真はとうに知っている。

目を閉じたのは、単に目を開いていることに疲れたというだけだ。

「優真君、いつまで続けるんだい？」

「……っ!？」

そんな優真にかかる言葉は容赦のないものだった。

口調や声色は一切変わらない。いつもと同じように、ともすれば朝の挨拶をするかのように聞いてくる撫子の言葉は、ただそれだけで、否、それだけだからこそ優真の心を砕こうとする。

優真に返す言葉がないことは優真自身が一番よく分かっていた。

「教えといてあげるよ優真君、今の君は私でも十秒とかからず殺すことが出来るほど弱い」

「……………」

「そんな君に、吸血鬼としての力のない君に、一体何が出来ると言うんだい？」

撫子の言いたいこと。何故そんなことを言うのか。それが分かるからこそ、優真は拳を強く握りしめる。
彼女はただ嫌みを言いたいのではない。

純粹に、ただただ優真の身を案じているだけなのだ。

だからこそ、言い返せない。

彼女の言うことに嘘偽りは一切ない。確かにこれが続けていけば強くはなれる。が、それはあくまでも一般人よりも強い。と言うだけで、それでしかない。

魔物と戦うなど無理に決まっている。無謀にもほどがある決意だ。

「……そうですね。僕は弱い」

優真は自らを否定するようなことはしない。
自分が弱いことなど、百も承知。それを否定してしまうことは、自分自身の存在自体を否定してしまうに等しい。

「……でも、最近思うようになったんです」

目を閉じたまま優真は言葉が続ける。

いつの間にか、握りしめた拳は開かれている。

「他人と関わることも悪くないって。守られるだけは嫌だって」

楽じゃない、と優真は言葉を続ける。

撫子は黙って優真の話を聞き続ける。割って入る余地がないからではない。彼女の真意がそこにあるからだ。

他人に関わらない。関わらせない。

無駄な人間関係は作らない方が自分のため。

そう考えていた優真は、事実そう行動し現在まで生きてきた。他者に関与せず、自分の領域に踏み込ませず、たった一人の世界で、生きてきた。

その彼が紡ぐ言葉は、あまりにも力を持つ。

「最近分かるようになったのかもしれませんが、『寂しい』って事が。『辛い』って事が」

そこで再び目を開ける。

何とか体を起こし、撫子と目を合わせる。

目を合わせると言うことは、繋がるということ。

両者の間にある感情こそ違えど、目を合わせた二人に繋がりが出来ることに例外はない。

それを優真は自ら行う。

「僕は彼女を守りたい。そのためなら何でもするって決めたんです」

「そうだね。ごめんよ優真君、試すようなことを言ってしまったね」

話を聞き終えた撫子は、頭を下げた。

彼女がその短い生涯で一体何度したことのある行為なのか。優真にはそれを知る術がなく、また知りたいとも思わなかったが、それが決して軽くないことだけは分かった。

直感と言ってもいい。だがいつも軽く頭を下げているからこそ、重い気持ちで頭を下げたことがないからこそ、優真には分かることが出来た。

他人に頭を下げるという行為の重さを、撫子がそうするに至った思いを。

凡人には決して出来ないような事、ではない。天才ではないものには出来ないもの、ではない。
本当に当たり前で、ありふれている事を、優真は初めて経験していた。

「……いえ、その――」

「私はこれで失礼することにするよ。あっそうだ、優真君」

「……何ですか？」

頭を上げた撫子の表情はいつもと何ら変わらない。微笑を浮かべ自然とこちらも和らいでしまいそうな、そんな顔。

その表情を見ても眉ひとつ動かさない優真へと去り際に一言だけ、たった一言だけ言い残す。

優真が言われたことのない言葉。

望んだところでもらえるはずのない言葉。

「頑張れ」

「えっ？ ああ、はい」

「はあ……。ここまで意識されないとさすがに泣きそうになるね」

「何の話を――」

「優真君には関係のない話だよ。それじゃあね」

優真の質問に答えるどころか、まともな返事をすることもなく撫子は背中を向けて歩いていく。

その背中を呼び止めることはもちろん簡単だ。ただ名前を呼べばそれだけで彼女は振り向くだろう。

だが、優真はそれをしなかった。

心に疑問が残っているにもかかわらず。
変なところで物事をはっきりさせたがるにもかかわらず。

そのまま彼女の背中を見送り、頭の中では既に違うことを考えていた。

（啖呵を切ったはいいけどなあ……）

状況は、何一つとして改善していない。否、前に進んでいることさえしていない。

優真が弱いことは、変わっていないのだ。

あまりにも普通で、あまりにも凡庸で、出来ることなど限られている。

が、思考を止めることだけはしない。

それは、諦めるということだから。

何もかもを、捨てるということだから。

だからこそ、考える。

自分に何が出来たのかを。何をしなければならぬのかを。



三日。

それがラヴの示した優真が気絶をしなくなるまでにかかる期間だった。

もちろん、レベルは『普通の人間』と戦う場合においての話だ。

魔物はその存在自体が既にめちゃくちゃで、ただの一般人にしてみれば戦う前から負けているようなものなのだ。

尤も、魔物が人間よりも食物連鎖において上位にいるため当たり前

たとえば当たり前の話だ。シマウマではライオンには勝てない。否、逃げ切ることが出来た時点で勝負はシマウマの勝ちではあるのだが、今はそういう話ではない。

単純に力の差の問題だ。

人間では魔物には勝てない。否、魔物でなくとも一対一ならば凶暴で大型の犬にさえ負ける可能性はある。それほどまでに弱く、脆い存在。

ただ唯一対抗出来るものとして備わっている頭脳すら、自然災害のような強大過ぎる力の前では無力と化す。

その人間である優真が三日間やったことと言えば、ラヴとひたすら戦うだけだった。

常に『存在否定』を持ち、広大すぎる天童寺家の敷地内を歩き回る。ラヴと出会えば即戦闘を開始し、全力をもって倒す。ただそれだけだった。

だが、単純すぎるともとれるこのやり方は極めて効果的だった。まづもって、優真は刀の扱いさえ全くの素人。

持ち歩くことさえ難しいのだということを実感することとなったからだ。

刀を持ち、常に周りに気を張らなければならないため——ラヴに先に見つけられた場合、当然のようにラヴは問答無用の攻撃を仕掛けてくる——精神的にも消耗は早かった。

だが、そこで終わるわけにはいかなかった。

エリスのために。

ただそれだけが優真を突き進めていた。

しかし、世界はそこまで甘いものではない。

仲間との友情を育み、敵に勝つために修行をし、努力をし、その力をもって敵に勝利する。

そんな夢物語は、現実では存在しない。

たった三日で、何かが変わるわけがない。変わる事など、あってはならないのだ。

そんなことは、ほんの一握りの者にしか出来ない。それこそ最強の主人公ではなければ無理だろう。

当然、優真にそのような力が備わっているわけがなく現状は初日と何ら大差無かった。

「がはっ……」

「なんだ！？　もう終わりか！！　貴様の覚悟はその程度のものだったのか！？　だとすれば、とんだ茶番だったな。その程度の男だったと言うことだ。貴様では何一つ守れん！！」

叩き伏せられる優真。見下ろすラヴの表情は分からない。

力が抜ける。

足が動かない。

頭も正常に動いていない。
意識が途切れそうになる。

ラヴの声が遠い。

何もかもが、意識の外から感じる。

「一つだけ言っておこう。小僧、貴様が眠る時はあの娘が死ぬ時だと思え。あれを殺すことなど、俺にとっては簡単なことだと言うことを忘れるな」

――殺す。

優真の頭にその言葉だけがやけにはっきりと聞こえてくる。薄れかかった意識の中で、ぼやけた感覚の中で、何かが囁く。

これでいいのかと。

このままでもいいのかと。

その問いに、答えを考える時間など必要なかった。

それは分かっていたから。

昔ならば、そうではなかった。時間をかけ、完璧な答えを探し、見つけたその答えすら絶対の信頼を置くことはしない。だが、今となつては違う。そんなこと、考えるまでもなく優真の心の中に出てくるものだった。

「……や、めろ……」

優真が再び起き上がろうとしていること。

それだけでラヴの顔には楽しそうな笑みが浮かんでくる。

次は何をしてくれるのか。どんな馬鹿なことをしでかすのか。
楽しくて仕方がなかった。

「いいだろう!! 今日特別だ。来るがいい!! 貴様が眠るまで潰してやろうではないか!!」

「やめろ……」

ラヴの声など聞こえていなかった。
ただ、その言葉にだけは反応することが出来た。

「さあ!! 始めるぞ!!」

「あの人に手を出すな!!」

刀を持ち直し、ただラヴに向かって突き進んでいく。

距離にして約三メートル。二人の間にある距離など、お互いが同時に動けば零に等しくなる。

優真は刀を。ラヴは拳を。それぞれにぶつけ合うために前に出る。

「やれやれ。二人とも、その辺りにしてくれないかい？」

が、その攻撃はぶつかることなく終わりを告げることとなる。

優真が躲したわけではない。

ラヴが躲したわけでもない。

誰一人として傷を負っている者はいなかった。

二人の間に割って入った人物がいたからだ。

そんな人物はこの家において、否、どこの家を見ようとも、どの世界を見たところで一人しかない。

「緊急事態だ。優真くんには申し訳ないけれど、終わりにしてもらえるかい？」

鮮やかに二人の間に割って入った撫子は、しかしながら何か特別なことをすることはなかった。

ただそこにいる。

それだけで、二人の攻撃はぶつかることなく、どころか撫子に当たることもなく、その被害は近くの木々や地面を抉っただけに留まった。

「そんな……」

当然、そんな現象が起きて冷静でいられる様に人間は出来ていない。目を丸くすると同時に、優真の中に大きな塊が生まれてくる。

——恐怖。

あまりにも強すぎる力を目の前にして、優真は言葉を失ってしまったのだ。

だが、そんな優真に気が付いているであろうにもかかわらず撫子は優真には何も語ろうとしない。用事があるのはラヴと言うことだろう。内心穏やかでなかったが、恐怖していたこともあり口を挟もう

とはしなかった。

「完全に私の責任だ。……やつらが攻めてきた」

「目的は？」

「ラヴさんは話が早くて助かるよ」

そこで一旦話を切った撫子は、改めて優真に向き直る。その表情に、いつもの微笑は含まれていない。

どちらかというと切羽詰まったかのような、いつもの彼女であれば絶対に見せることのないであろう表情。

優真の背中に冷たい汗が流れる。

つい先程まで動いていたからというものとは、また別物の汗。

撫子に恐怖を感じたものそれとは、また決定的に違う何か。

危険だと、優真の本能が理解する。

それを聞いたら駄目だと、何かが訴えているかのように感じる。

「魔物の狙いは、恐らく彼女だ」

「……彼女？」

最後の抵抗を試みる。

知らない振りをする。忘れていたように振る舞う。自分自身に嘘を吐いて、必死に事実から目を背ける。

そうすれば、悲しくなくなるから。
余計なことを考えないようにして、ありのままを受け入れられるから。

しかしその時間は決して長くはない。

自分自身を完全に騙せることの出来る人物などいはいはしない。
せいぜい人よりも長い間その時間が続くだけだ。

そしてその嘘は、一度崩れてしまうと積み上げる気力さえも奪って
いってしまう。

「吸血鬼の娘にして人間の娘。境界者の女の子。そして世界的に見
ても伝説クラスの魔物であり、君の大切な存在だ」

「……何で、何で彼女なんですか！？ 何をしたって言うんですか
！！」

冷静に、極めて冷静に話す撫子に問いかける優真。

撫子は魔物ではない。魔物の考えていることなど分かるわけがない。
そんなことが分からない優真ではない。これは言わば八つ当たりで
もあった。

何故彼女が狙われなければならないのか。

しかも、彼女が眠っているこのタイミングで。

やり場のない気持ちを目の前の人物にぶつけているだけ。別に撫子
だからと言うわけではない。

「優真君、今はそんな事を言っている場合じゃない。君も逃げた方がいい。結界がいつまで保つか分からない」

「なっ!?! 何ですか!! 僕だって――」

「今の優真君は役立たずだ。私たちだって、殺される時は殺されるんだよ。そんな状態で君を守りきれるかどうかな……」

撫子の言うことは理解できる。

吸血鬼の力はおろか、力の強い一般人にも負けてしまうであろう優真では戦力外以前の問題だ。

生き残れるかどうかさえ怪しいと言うのであれば、魔術師たちの集まりである天童寺家において優真ほど弱点となるものはない。

自分自身の無力さは、優真自身が一番よく分かっている。

何の力がないことは分かっている。ピンチになれば新たな力に目覚めるといった夢物語を信じているわけでもない。

「僕も……」

出来ることなどほとんどないことを認めている。役立たずであることも分かっている。

だが、そんなことが理由では優真がこの場を退く理由にはならない。

その程度の事は、既にこの三日間で何度もぶち当たった壁なのだ。

「守ってもらわなくて結構です。僕は、僕のしたい事をします」

「優真く——」

「いいだろう!! ならば行くといい!! 勝手に行って、勝手に死んでこい!! 多少は共に過ごした者として、墓にはあの女と共にに入れておいてやろう」

はつきりとした決別。

撫子がこういう提案をすることは分かっていた。あまりにも優しい、優しすぎる彼女だからこそ、優真の身を案じるだろう。

そんなものは望んでいない。

今更馴れ合う気など毛頭ない。

言うが早く、優真は振り返ることなく走り出す。

唯一の武器は、エリスが残していた刀一本のみ。

魔物と正常な状態で戦ったことのない優真にとって心もとない事には変わりない。否、例え銃器を持っていたとしても、扱う人間が人間だけに役に立たないこともある。

「……優真君……」

「我が愛しの君よ。何故あんな事を言った? あのような言い方をすれば、あの男がああなることは分かっていたであろう?」

「……そうだね。優真君が頑固なことは前からだったね」

撫子の弱々しげな笑みに、ラヴはそれ以上何も言えなくなってしまった。

それは今まで見たことのない表情だった。決して微笑を崩すことの

ない彼女の初めて見せた全く新しい表情。

（ふんっ、この程度ではまだ俺の負けではない）

背中を追いかけることなく、しかしながら見つめる視線の先に彼を捉えながら、ラブは一人呟く。声として認識されることのないその声は、一番近くにいた撫子にさえ届くことはない。

ただラブの中でその炎は消えることを知らないかのように燃え盛っていた。



「はぁ……はぁ……エリスさん!!」

一切迷うことなく部屋に着いた優真は勢いよく扉を開け放つ。

走っている最中、幾度となく爆音が鳴り響いていたため最悪の状況を覚悟していたが、幸いにも部屋の中で眠っているエリスには何の変化もない。

いつものように静かに目を閉じて眠っている。小さく、だが確実に上下に動いている胸だけがエリスの生存を教えてくれる。

撫子の説明によれば、この部屋自体が魔方陣としての役割を担っているらしい。

無理矢理彼女をどうしようとする、迎撃するように術式を組み込んでいるらしい。

「よかった……何ともなくて……」

エリスの無事を確認しただけで、とりあえずは落ち着きを取り戻している自分がいることに気づく。が、余計な事は頭の中から消してしまう。

今考えるべき事は、この後の事だった。

とりあえず、現状ではエリスの身が変わった様子はない。

尤も、撫子の言うことが本当であるとするならば、今はまだエリスの身を心配する必要はない。魔術とは理論を理解し、環境を整え、手順さえしつかりと踏めば誰でも行使することが出来るものだ。

故に特別な事を優真がしなくとも、とりあえずエリスの身の安全は保障されているだろう。

問題はこの後。つまり優真自身がどうやってこの場を生き抜くのか、と言うことだ。

幸い今はまだ敵が攻めてくるには時間がある。が、だからといって優真に出来ることなど実は何もないのだ。

撫子の――実際は違う人である可能性もある――魔術によってエリスは無事だ。だが、この迎撃魔術は敵味方の判別がない。

それは、優真にももちろん効果を発揮する。どんなものが待ち受けているのか、怖くて確かめなかったが、恐らくは相当な何かが待っているはずだ。

だからこそ動けずにいるのだが……。

「――!?」

と、そこまで考えたところで一旦意識を目の前の扉に向ける。

――誰かがいる。

三日間、ラヴと戦っていたからこそ分かったのかもしれない。誰かが向こう側に立っている。優真の直感がそう告げていた。

だが、何もすることは出来ない。

『存在否定』の強力さ、凶悪さは、既に撫子の口から聞き及んでいた。だからその力が何であるかは知っているし、使う覚悟ももちろんある。
が、そこにいるのが誰だか分からない。

（こんな時、あの人たちなら……）

と、考えても無駄にしかならないことが、嫌でも頭の中に浮かんでくる。

向こう側に誰がいるか分からない以上、その凶悪な武器を使うわけにはいかない。

この時、優真は決定的に選択肢を間違えた。

そんなもの関係なかったはずなのだ。

今までの優真であったならば、自分の都合以外は考えない。

相手が誰であろうとも、自分の仕事を最優先に考える。だからこそ

的確な、的確すぎる判断を下すことが出来ていたのだ。

しかし、もう今の優真は昔の彼とは徹底的に違う存在となっていた。
他人の事まで計算に入れて考えるようになってしまっていたのだ。

（どうする！？ 時間はもう……）

本来悪いことではない。

他人も計算に入れて考えることが出来るのであればそれに越したことはない。仲間との連携を考えるのであれば、むしろ必須といっても過言ではないようなスキルである。

そう、主人公であるならば持つていてもおかしくはなく、否、持つているべきスキルだった。

「おや？ ここで合っていたようですね。どうやら私は運が良いらしい」

その力を必要とする者には絶大な効果を発揮する。が、それにはもう一つ必要なものがあった。

「これはこれは。あなた一人ですか？ 随分と寂しいですね」

信頼。

勇気。

希望。

愛。

そして――仲間。

「あなた一人で私の相手をしてくれるのですか？　それはそれで構いませんが……あなたでは些か役不足ですね」

「くっ……」

刀を抜いて身構える優真。

間合いなどといったことはない。ただ漠然と相手の出方を伺っているだけだった。何の策もない。

「どうして……？」

「はい？　どういう意味でしょうか？」

「どうして彼女を狙うんだ？　彼女が何をしたと言うんだ！？」

ただの時間稼ぎ。相手が乗ってくれる確率の方が低いような、賭。だが、結果的に言えば、優真はこの賭に勝つことが出来た。黒のスーツを着た男の笑い声という、欲しくもないオマケと共に。

「あっはははは！！　あなた、何も知らないのですか？　そんな風にして近くにいるにもかかわらず？　あっはははは！！　これは傑作だ！！」

「……………」

男にいくら笑われようとも、優真がそれで気分を害することはない。慣れ親しんだものに嫌悪感を抱く者がいないように、その程度のことで優真は何も思わない。

男の爆笑が生理的に受け付けない事を発見しながらも、あくまで顔に出すことはせず冷静に努めた。

「教えてあげましょう。彼女こそ、我らが王、終わり亡き夢の娘にして、世界を導く鍵となるものです」

「終わり亡き夢……」

「あなたにこの高尚な考えを理解してほしいとは言いませんよ。但し、邪魔をするのであれば容赦はしませんがね」

選べ、と男は優真に選択を迫る。

抵抗しなければ自分の身は安全かもしれない。だが、確実にエリスはこの男に連れ去られてしまうだろう。跡形もなく、芸術のように鮮やかに、全てをやったのけそうなオーラが隠されることなく広がっている。

だが抵抗したところでどうなる？

なにかが変わるといえるのか？

男に負けて無様に死を晒すだけではないのか？

そもそも勝負にすらならないのではないか？

瞬間的にそんなことが頭の中を駆け巡る。

（弱気になるな、前を見ろ、決めたはずじゃないか）

刀を握り直すと、その剣先を男へと向ける。

交渉決裂。それを示すのに、これ以上の動作など必要ではなかった。

「いいでしょう。少し痛み付けてあげましょう」

「……………」

エリスは大丈夫。その安心があったからこそ優真は素早く前に出る

ことが出来た。

既に抜かれている刀、『存在否定』は凶悪な武器だ。一撃当たれば勝てる。

などと甘いことを考えていたわけではない。今の自分の実力であれば、相手にとって躲す事は造作もないことだろう。

ならば、その隙をつく。

「おっと。その刀、危険ですね」

難なく躲す男の表情に焦りの色などは全く見えない。どころか、その表情には見覚えがある。ここ三日間、ずっと目にしてきた表情。

すなわち、ただこのやり取りを楽しんでいるだけの表情。

踏み込んだ優真の先にいる男は紙一重のところであつて、全ての攻撃を躲していく。それはあえてそうすることで優真と自分のレベルを調整しているようにもとれる。

振り下ろし、横に薙ぐ。

全て紙一重であるにもかかわらず、その攻撃が当たるイメージをすることが出来ない。

何をしたところで躲される。そんな幻想さえ見えてきそうなほどだ。

「にしても奇妙ですね。何故あなたは彼女を守るのです？ あなた達人間には邪魔な存在でしょう？」

「……………」

笑いながら、挑発するように話しかけてくる男の言葉には一切答え

ない。そんな戯言に付き合うほど優真に余裕はない。

だが、それでもやはり話の内容は嫌でも耳の中に入ってくる。

「今でこそ、このようになっていますが……彼女はあなた達を食らいますよ？ いずれ、必ず。断言してもいい」

「そんなことは関係ない。彼女が何をしようと、彼女が連れていかれるような理由には、何一つとしてならない」

「では質問を変えましょう。あなたは何のためにそこにいるんです？ 別に、あなたは必要ないでしょう」

その言葉に、一瞬反応してしまう。

楽しい時間ではないはずなのに。

殺し合いの時間であるはずなのに。

敵の言葉に耳を傾けてしまう。

それが決定的な、致命的なミスであるにもかかわらず、優真の意思とは別にその答えを知りたがっている別の自分がいる。

本当に自分が必要なのか。本当は邪魔をしているだけで全くいらない存在ではないのか。彼女の足を引っ張っているだけで、恩を返すという行為そのものが、気持ちそのものが、邪魔なものになっていくのではないのか。

「ああなるほど。愛と言うやつですか？ 人間は好きですね。心の底からお互いを信じ合おうとする。そう出来ると信じて疑わない。全く、反吐が出る」

「……愛？」

「ん？ 違うのですか？ では何が理由なのです？ まあ、聞いたところで理解できるとは思いませんがね」

それは聞いてはいけない言葉だった。

意味を理解することは構わない。何の問題もない。だが、今の優真は聞いてはいけなかった。

命を救われた恩を返したい。

落ち続けている自分の闇を背負わせた事に対する感謝をしている。少しでも彼女の力になりたい。

それ以上の事は気付いてはいけなかった。

好意を持っているだけならばまだいい。

だが、LikeとLoveでは全く違う。

全く異なる関係になってしまう。

愛すると言う意味が分からないわけではない。ラブを見ていれば嫌でも分かるというものだ。尤も、これに関して言えば、彼の逸脱したあの好意と行為を素直に『愛』と呼べるのであればの話である。

そこまで優真は子供ではない。愛すると言うことがどういうことなのか。漠然としたものではあるが——経験もせずに完璧に理解することは無理だろう——ということなのかを分かっている。

それがどういう意味を持つのかも、もちろん。

「――!!」

振り払う。

気付くべきではなかった事実を前にして、優真の動きは明らかに鈍っていた。

恩人ならば恩を返せばいい。

感謝しているのならば、そういう態度をとればいい。
力になりたいと思っているのなら、力になればいい。

だが、『好きだから』では駄目だ。

ただの自分の都合だ。それもただの好意ではなく愛するということになれば、今までの関係性が一気に崩れ去ってしまう。

好きになるということは、愛するということは、ただ一方的に思いをぶつけているだけだ。

想いというのは、その形がどうあれ、どんなものであれ――重い。

愛となれば、その重さは最大限にまで大きくなってしまう。

「優真君!!」

「お話はこの辺りにしておきましょうか。こちらも、そろそろ慌ただしくなってきた」

「――っ!? 待て!!」

失礼しますよ。とだけ言って男はの姿が闇に包まれていき、ついには姿を消してしまう。

後に残されたものはその場に立ち尽くした優真と撫子、そして役割を終えたように動かない空のベッドだけだった。

「……ああ……」

「優真君、落ち着くんだ。彼女はまだ無事だ」

撫子の言葉は耳に入ってこない。

目の前にあるものは、ただの事実のみ。

エリスが連れ去られた。

そして——自分がエリスを好きになっていたということ。

弱い自分に、人を好きになる資格などないはずなのに。人とか関わる資格などないはずなのに。

そうやって周りに振り撒き、自分自身を偽ってきたはずなのに。

「あゝあゝあゝあゝああ!!」

「優真君、それ以上はいけない。戻れなくなってしまふ!!」

優真の咆哮。

あげた叫び声に混じる悲痛なる想い。

たった一つで良かったはずの願いは、しかしながら遂げることはいない。

魔物による突然の襲撃。

この地一帯で一番の勢力を誇る天童寺家に襲いかかったこの危機で
の被害者はほんの少数だった。

しかも怪我人は皆、魔物に傷を負わされたわけではなかった。
原因はたった一人。斉梨優真。

元、吸血鬼の力を有していた彼。
現、境界者の眷族である彼。

彼の暴走は屋敷を半壊させ、封印されるまで止まることはなかった。

変わっていく想い（後書き）

遅くなってしまう申し訳ありません。

14話です。

弁解のしようもありません。

次こそは早めに更新出来るように頑張ります。
どうか見捨てないでくださいね！！

次回予告。

消えてしまった少女、気付いてしまった少年。

自らの闇に向き合い、真実を知ることとなる。

それを知って尚、彼は前に進むことを初めて考える。

他人のせいにするのではなく、場に流されてするのではなく。

自分のために。

僕の物語

――暗い。

僕の気分が落ちているとか、そういう神秘的な心情を言いたいんじゃない。ただ単に、日の光が入ってこない、というだけの理由だ。

天童寺家に存在している地下牢獄。

一体どこの誰を収容するために作られたのか分からないけれど、僕がここにいるという事実がこの牢獄の存在を証明している。

たとえこれまでに必要なかった、どうでもいい部屋だったのだとしても、僕がこうして入っていることで、牢屋に入れられる罪人として存在していることで、この部屋は自らの存在を証明し、肯定している。

僕には出来ないことを、この部屋は平然とやってのける。

かなり大きな屋敷と土地を持つ天童寺家だけど、さすがに牢獄までは広くない。というより、小さな部屋を大量に設置しているといった感じだ。

僕がここに入れられてどれだけ経っただろう。正確な時間は分からない。というのは入れられた時に意識がなかったから、という理由なじゃない。

ただ単に面倒くさくて数えていないだけだ。

そう、僕は意識を保ったままこの部屋に入った。

誰の命令でもなく、自分の意思で入ったんだ。

「おはよう、優真君。まだ出る気にはならないのかい？」

何をするでもなく、ただぼーっとしているだけの僕にこうして天童寺生徒会長は毎日会いに来る。

正直鬱陶しいと思うほどのしつこさだ。僕は何を言われたところで、自分の意思を曲げるつもりはない。誰かを傷付けるような危険性をむやみに上げたくはない。

「本当に……頑固だね。何度も言うけれど、あれは君のせいじゃない。油断していた私たちの責任だ」

もう何日か前の事。

エリスさんは魔物たちに連れ去られてしまった。

嚴重に守りを固めていたにもかかわらずあっさりと、最早一種の感動さえ覚えるほど手際よく、魔物たちは自らの目的を達成した。

それ自体本当に情けないことで、守ると、戦うと、決意した僕はあっさりとやられてしまったわけだけれど。

別にそれがこの状況の直接的原因じゃない。

もともと僕に出来ることなんて限られていたんだ。いや、殆んどないと言ってもいい。それほどまでに弱かった。

「僕のせいじゃない？ そんなことは分かっていますよ。僕じゃどうしようもなかった」

「なら――」

「でも、その後は違います」

僕の言葉に天童寺生徒会長は口を閉ざす。

当たり前だ。この完璧な生徒会長は、完璧であるがゆえに僕のこの言葉に対する返答を持っていないんだ。

何故なら、それが事実だから。

この人の唯一の攻略方法だ。最近それが分かった。こんな状況になって初めて理解したというのは些か恥ずかしいけれど。

力だけでは敵わない。

どんな力をもつてしても、全てをいなす事が可能だろう。そういう方法は、僕のような者に対して絶大な効果を発揮する。

言葉だけでは敵わない。

どんな戯言を並べようとも、彼女の前ではその真意を発揮することは出来ない。そういう方法は、初めてやられるからこそ絶大な効果を発揮する。

完璧に弱点はない。

あるとすれば、より強い完璧で塗り替えることだけだ。

だからこそ、僕は事実だけを述べる。

強すぎる真実はそれだけで力になる。それこそ、僕がこうして天童寺生徒会長と言ひ合ひが出来るようになるほどの力に。

「力が戻り、エリスさんが消えた。順序は逆ですね。エリスさんが

消えたという事実を、守れなかったという事実を、突き付けられた直後に力を取り戻したんですし」

そう、僕の力は元に戻っていた。

それが誰のせいで、何でなのかは分からない。

何も分からない。けど、それ自体を悪い事だとは思わない。

分からないことなんて世の中にはごまんとある。それを全て解明しなければならぬ道理など何処にもない。

「僕は悔っていました。危険視などまるでしていなかった。だからこそ、あんなことになった」

何も否定しない天童寺生徒会長。

あの日、僕は力を暴走させた。戻った吸血鬼の力を余すことなく使った。

その結果、あろうことか傷つけてしまった。

守ろうとしてくれた人達を。

たとえ命令だったのだとしても、力になってくれた人達を。

この手で、この体で、この力で、傷つけてしまった。

「僕は殺されたって文句は言えません。恩を仇で返すとはまさにこの事です」

「概ね君の言うことに間違いはないよ。でもね、優真君。だからといって殺されていい理由にはならないよ」

絶対にね。と、彼女は強い口調で付け加える。

そうなのかもしれない。

確かに僕は誰も殺してはいない。傷付けたといっても人数は少なかったし――被害が拡大する前に天童寺生徒会長とラヴさんが押さえ付けてくれた――その人たちも傷薬をつけ絆創膏を数日貼るという軽傷だった。

その代わりにいくつかある天童寺生徒会長の家の一つを全壊させたんだけど。

はあ……。

馬鹿馬鹿しい。何もかもが馬鹿馬鹿しい。

殺されていい理由にはならない？

本当に分かっていない。

この人には、こういう人達には、たぶん分からないことだろう。分かることがいいことなんじゃない。この場合、分からなくて当たり前だ。

分かる方がおかしいんだから。

「何度も言うようですけど、別に僕は殺されたいなんて思ってないですよ。ただ文句は言えないというだけです」

「それは同じことだよ。言い方が違えば意味が変わるとでも思っているのかい？」

だから違うんだって。

殺されたいとか、殺されたくないとかじゃないんだ。

この気持ちはそんなものをとくに通り越している。

――死にたいという気持ちは、そんな次元の話じゃない。

天童寺生徒会長は毎日会いに来る。

来てもらったって僕はここを出る気はないし、出る意味だってない。

それはもう思い知らされた。

あの時、あの場所で、あの魔物に。

余計な事と一緒に、気付かされてしまった。

別にそれが悪い事だとは思わない。そんな感情は、敵に施しを受けるのを悪だとは思わない。貰えるものなら、それが僕に必要ならば、なんだって貰う。

でも、これだけは余計だった。全く欲しくなかった。

「僕はいてもいなくても変わりません。なら、こうしていることが最善です」

「……………」

「こう言った方がいいですね。僕はここにいたいんです」

この気持ちに嘘偽りはない。

僕はここにいたい。余計な事など、何一つしたくない。

だけど、天童寺生徒会長は引き下がってくれない。

何故だろう。いつもならこのあたりで退席するはずなのに。今日はやけにここに残っている。

意味のないことに、貴重な時間を使っている。

何かしたいのか。残念ながら僕にそれは分からない。分かれば苦勞

なんてしない。

「優真君……」

「……!?!」

僕は言葉を発せなかった。思わず目を大きく開き、『それ』に注目してしまう。

天童寺生徒会長が取り出したものに、その手に握られている一本の刀に。

僕はその刀を知っている。

名前も。力も。全てを知っている訳じゃないけど、それでも使っていたのだから、使おうとしていたのだから、使えないと分かったのだから。知っているといっいいい。

でも、知っているだけだ。

少しだけ使っただけでは、すぐに諦めてしまっでは、それ以上分かるわけがない。たった一つの事を除いては。

「それがどうしたんですか？　それがあれば僕がここから出てくるか？　僕がそれを使えないのは、僕が一番知っています」

それでも僕は少なからず動揺した。心が動いた。情けない話だけど、現金な奴だと理解しているけど、あれがあれば。あの力を持てば。

何とかなるのではないかと思っている自分がいる。そんなことは、絶対にないって分かっているのに。

今更ながら、希望に縋りたいと思っている。

それに意味がないことは散々理解しているはずなのに。

刀が悪いんじゃない。あの刀は僕が想像しているよりもずっと凄くて、ずっと強くて、希望の光となるようなものなんだ。

でもそれを帳消しにしてしまうほどに僕が終わっているから。落ちているから。プラスの力にはなり得ない。

「優真君はこの刀の名を知っているかい？」

突然話す天童寺生徒会長は僕の返事など待つことなく次々と質問してくる。

能力を知っているかと。刀身を見たことがあるかと。まるで意味のないような事ばかりを、聞いてくる。

一瞬何て答えようか迷ってしまう。

確かに僕は一応知っているけれど、それは他人から聞いているからだ。刀身を見たことはもちろんあるけれど、それ以外の情報を聞いたことはあっても確かめたことはない。

何故なら、他でもない。天童寺生徒会長が教えてくれたからだ。

この人が嘘を吐く理由なんてないし、もし仮に吐かれていたとしても何かが変わるわけじゃない。

吐こうと吐くまいと、僕では使いこなせないことは同じなんだ。

メンタル的な問題ならともかく。そればかりは情報の正否で変化するものじゃない。

「何を言っているんですか？ それは全部あなたが――」

「ごめんよ。今まで言ったことは全て嘘だ。何一つとして真実はないんだ」

そうですか。とは素直に言えなかった。

嘘を吐かれたことに愕然としたからじゃない。そんなことは関係ない。

嘘を吐いた天童寺生徒会長を軽蔑したからじゃない。そんなことは関係ない。

ただ、その一言には引っ掛かりを覚えた。

とてつもない、違和感を感じた。

「『何一つとして』……ですか？」

「そう。全部嘘なんだよ」

「あなたが嘘を吐いた理由はどうでもいいんですけど、全部と言うのは一体どこからですか？」

何一つとして真実はない。確かに彼女はそう言った。それがどこまでの力を持つのか、正直分からない。

普通に考えて存在否定の名前からして嘘だということだろう。あとは、魔術は一切関係ないとか。

或いは……存在していないとか。

僕の表情から全てを読んでいるであろう天童寺生徒会長には、僕の考えなんてお見通しだろう。僕が言いたいことなんて、一言一句間違えずに言われたって当たり前だと思ってしまう。

でも、それでも、僕は聞いた。

分からないことは恐い。知っていたらもしかしたら対策を立てることだって出来るかもしれない。

まあ二つ目は随分と都合のいい夢だけど、少なくとも、一つ目の恐怖は消える。

「それは何なんですか？」

「ただの刀だよ。ただ元魔術という珍しい代物だけだね」

「元魔術……ですか。既に力を失っている物」

「そうだよ。優真君、君が力を取り戻したからだ。君なら分かるんじゃないのかい？ この刀が、一体なんなのか。その正体を、その本質を」

「……買い被りすぎですよ」

渡された刀を手取る。鞘から抜き、刃を見る。

……何も分からない。

と言うより、何を分かればいいのか分からないからどこを見ればいいのか迷う、という方が正しい。

全くもってこの人の真意がつかめない。

もともと分からない人だったけれど、これに関して言えば考える余地さえない。

持った感触もこんな感じだった気がするし、重さも同じだと思う。

そもそも僕がこの刀を使っていたのはほんの少しだけだから、何か違いに気付けという方が間違っている。

特徴を覚えているわけがないじゃないか。

「ちなみにその刀、私は抜けないんだよ」

「えっ！？ そんなはずは……」

天童寺生徒会長の言うことを否定するために何度も僕は刀を抜く。抜いては戻し、また抜いては戻す。何度も何度も繰り返して、その様を見せる。

別に何か変化があるわけじゃない。

抜く度に刀が重くなっていくとか、刀が形を変えるだとか、そんな出来事は一切起こらない。

ただ同じように抜け、同じように納まっていく。

「本当だよ。ラヴさんも抜けなかった。この刀を抜けるのは、この屋敷の中で優真君、君だけだ」

「……そうですか」

再び刀を抜き、隅から隅まで見ていく。

見落としがないように見ていくけれど、それでも変わったところは一つない。

まあ僕の記憶力は当てにならないから、実際は物凄く変わっているのかもしれないけど。

「エリスさんの事は何か分かりましたか？」

いつまでも刀を見たって仕方がない。そう思って話を振った僕だったけれど、天童寺生徒会長の首は横に振れただけで何かを話すことはなかった。ただ、エリスさんの事を探してくれているのかは正直なところ分からない。

自分でやれば確実に、常の僕ならば絶対にそうしているんだろうけど。

如何せん今の僕は役立たずだから、否、いつでも僕は役立たずだか

ら、どうせ見つかることはないだろう。

天童寺生徒会長が探して見つからないというのなら、それはもう見つからないって事なんだ。

「優真君、もう嘘を吐くのは止めないかい？」

「嘘？　僕が何の嘘を吐いているって言うんですか？　確かに僕は嘘つきで、弱い人間で、今となっては人間ではありませんけれど、今この瞬間で嘘を吐いている事なんてありませんよ」

「今日はよく話してくれて嬉しいよ。でもそれが、それこそが、君の嘘なんだろう？」

「訳の分からないことを言わないでください。僕は嘘なんて吐いていませんし、なんだったらこれから先も吐かないと約束してもいいですよ!!」

地下にある牢獄。

閉鎖されたその空間では小さな声でもよく通る。ましてや大声となると自分でも煩いと感じるほどだ。

そんな事実は今知ったような事ではない。とっくの昔に知っていて、もう止めておこうと思っていた。

にもかかわらず、僕は大声で叫んでいた。

鉄製の柵の向こう側にいる天童寺生徒会長との距離は何メートルも離れているわけじゃない。

小声で話してもこの環境ならば聞くことが出来るはずだ。

それなのに……。

「優真君、それが君の本心なんだよ。自分の思いをぶつけたくて仕

方がないんだろう？ 誰かと一緒に話したいんだろう？ そばに誰かがいてほしいんだろう？」

「うるさい！！ 何でも知っているような口調で話さないでください！！ あなたは生徒会長で、僕はただの一般生徒だ。あなたは魔術師で、僕は魔物の眷族だ。敵対する理由こそあれ、仲良くする道理なんてないでしょう！！ 前にも一度言いましたよね？ 筋違いな同情で僕に関わらないでくださいと。偽善者になりたいなら、慈善事業がしたいなら、勝手にしてくれて構いません。でも、その輪の中に僕を入れないでください。僕はそんな事望んでいませんし、これから望む予定もありません。はっきり言って迷惑以外のなにものでもない！！」

言い切った。

自分でも何を言っているか分からない。

いや、嘘だ。何を言ったかぐらい分かる。ただ、その言ったことがあまりにも無茶苦茶で、あまりにも馬鹿らしいだけだ。

言っても意味のないような事を、言っただけでどうにもならないような事を、口にしていた。

「そうかもしれないね。うん、その通りだ」

どれくらい経ったか、たぶんそんなに時間は経っていないけれど、天童寺生徒会長は語りだした。

僕の話を最後まで——一切話を遮ることなく——聞いていた彼女は、最後まで話を理解して、語りだした。

「筋違いな同情、偽善者、慈善事業。確かに私の行いはそうなのかもしれない」

僕の言ったことを全て認めた上で、彼女は語りをやめることはしない。

全てを認めた上で、落ちることのない、弱ることのない力を見せてくる。

「私と優真君は敵同士で、戦う運命で、戦う宿命にあるのかもしれない」

僕は何も言えない、わけじゃない。言わないんだ。

彼女がそうしたように、僕だって聞かなければならない。

彼女が話を遮らなかったなら、僕が遮るわけにはいかない。
意地ではなく、礼儀として。

「私のしていることに意味がなくて、優真君にとっては迷惑な事なのかもしれない。相手に同じ態度を貫き通されるのは、それだけで不快に感じるのが人間だからね」

彼女の言葉からは力がなくなる。

その姿は、弱さを認め自らの行いを否定する姿であるはずなのに。
そうでなければならぬはずなのに。

むしろ逆に、力が増していると勘違いさせる。

それほどまでに、輝いている。

「でもね、優真君。私は止めないよ？ たとえ偽善者だと、慈善事業だと、同情でだと、自分の行いを全て否定されたとしても。自分でそれを認めたとしても。私は止めないよ」

思わず目を外したくなる。

あまりにも光っていて。輝いていて。眩しくて。こうしている事が申し訳無いような気がして。

でも、それは出来ない。しちゃいけない。

自分で言い出したことなんだから。

僕が言ったことなんだから。

今それをしてしまったら、僕は一生自分を許せなくなる。長い長い人生の中でほんの微々たるような時間に起こった出来事であるはずなのに、そんな風に大袈裟に思ってしまう。

「優真君、これだけは信じてくれないかな」

そんな彼女は、輝いている彼女は、自らの言い分を終えて尚語ることを止めようとはしない。僕がそう思っているだけかもしれないけれど、寧ろここからなんだと言いたいのではないかと感じる。

彼女の真剣な表情はいつの間にか変わっていた。

真剣さがなくなったという意味じゃない。真剣さは僕以上にあるだろう。でも、それ以上にその微笑みに可憐さを感じる。

いつも以上に魅力を感じる。

「私が優真君と友達になりたいという気持ち。これだけは決して同情なんかじゃない。私が君を見て、君と話して、君を感じて、心から友達になりたいと思ったんだ」

そうして彼女は、泣いた。

僕の目の前で、涙を流した。

僕の事なんて目に入っていないかのように。違う。僕がここにいるからこそ、僕が目に入っているからこそ、この人は泣いているんだ。誰のために、なんてそれこそ馬鹿馬鹿しい。

「私はね、優真君を見てるのが辛いんだよ。悲しいんだよ。自分から壁を作って、他人を寄せ付けず、他人に関わらずに、君は生きている。それが悪いことだとは言わないよ。世界には、君と同じように生きている人は沢山いるだろうしね」

恥も外聞もない。

ダムが決壊したように、涙は次々と流れていく。頬を流れ、床に落ちていく。

そんな状態になっているにもかかわらず、彼女の笑みは崩れない。

流れる涙がどれほど透き通っていようと、落ちる涙がどれほど輝いていようと、彼女がそれを気にすることはない。

僕もまた、それらに目を奪われることはない。

「でもね、優真君。私は悲しかったんだ。初めて君を見た時から、初めて君と話した時から、私は分かってしまったから。君が寂しがりやなことを、繋がりを求めていることを、誰かに気付いてほしいと願っていることを」

不思議なことだけれど、僕の中にあった苛つきというか、気持ち悪いというか、何だかよく分からないものだけれどそういうものはいつの間にか消えてしまっていた。

自分の事を話されているのに、さっきまで知ったような口を聞くなと怒鳴っていたのに。

解されて、解かれて、締め付けられている鎖を取り除いてくれているような。そんな感じた。

「そして何より、優真君自身がそれに気付かないように自分に嘘を吐いている事が悲しかった。君がたとえどんな時でも涙をながさないことが、悲しみを持たないことが、悲しかった」

だから、と彼女は続ける。

今までの行いを、全て僕に打ち明ける。

『はじめまして。斉梨優真君だね？ 私の名前は天童寺撫子。君、生徒会に入る気はないかい？』

進級して早々そう言った彼女の言葉は今でも覚えている。

誰とも話さないようにしてきた僕に話しかけるような者は一年経つとほとんどいなくなっていた。教師とも事務的連絡程度で会話をしたことなんて一度もない。

それを悲しいことだとは思わなかった。それが僕にとっての日常だったし、それが僕にとっての平和だったから。

でも、知らなかった。

そんな僕を見て、悲しみをほとんど持たないような僕を見て、僕じゃない誰かが悲しんでいたなんて。

はあ……。

やっぱりこの人には勝てない。何をしたところで敵わない。いや、勝てないことぐらい分かっていたんだけど。それでも相打ちになれば、引き分けになれば出来ると思っていたんだけどな。

どうやら僕の考えは甘過ぎたみたいだ。

張り合おうとしたことで、反発したことで、既に僕の敗けは決定していたようなものなんだ。

流石は主人公だ。やってくれる。脇役にもならないような役者を自分のパーティーに組み込むだなんて。

とてもじゃないけど、正気の沙汰とは思えない。

「鍵、開けてもらってもいいですか？」

「えっ……」

「甘えていてすみませんでした。僕は、逃げているだけですよね」

僕の言葉が理解出来なかったのか、天童寺生徒会長は暫く表情が固まった。

初めて見るその表情は、常が常だけにあまりにも幼く見えてこっちが笑えてくる。

必死に笑いを堪えていたのを悟ったのか、天童寺生徒会長の顔がみるみる内に赤く染まっていく。

生徒会長なんて役職についているから、この人に恥じらいなんてものは縁遠いものなんだと勝手に思っていたけれど、そんなことはない。

あれは業務だったから平然としてただけで、本当の彼女はそんな事はないんだ。

「ゆ、優真……君？」

「我が儘を言ってすみません。僕にもやれることはあると思いますし

て」

恥ずかしがる天童寺生徒会長が落ち着けるように、僕は早々にその話題から話を逸らした。

けど、僕はまた嘘を吐いている。正直、僕に出来ることというのは本当はない。

天童寺生徒会長が本気を出した結果見付からないというのならば、僕では見つけることは出来ないだろう。そんな事は分かっている。

でも。

「自分の事、もっとちゃんと考えてみます」

口では何とでも言える。

でも、先にも言った通り僕は嘘を吐いていた。自分の事なんて考える気はない。

僕には、既に成し遂げたい、成し遂げなければならぬ戯言が残っている。

それを解決するまでは、達成するまでは、一先ず自分の事は置いておこう。

でもこれはほったらかしにするってわけじゃない。

僕はもう気付いてしまっている。

僕がエリスさんに恋慕の念を抱いているかもしれないという事実を。人を好きになるという感情を。

だから、これは自分のためにもなるんだ。いや、もう人のせいにするのは止めようと思ったばかりじゃないか。本当に自分の意思の弱さに呆れ返ってしまう。

もう他人に動機は求めない。

僕が僕の事を考えていない事であんな涙を見なければならぬというのなら、僕はいくらでも自分の事を考える。

それで誰かを悲しませなくて済むというのなら。たった一人でも笑顔に出来るというのなら。

その一人のために僕は自分の事を考えよう。

「鍵はないよ。君の力なら壊すことぐらい簡単だろう?」

「……壊そうとして壊れるなら牢獄の意味がないんですけど」

「いや、ね。ここは私が作ったわけじゃないし。それに両親もまさかここを私が使うとは思っていなかっただろうしね」

私が使うとは思っていなかっただろうしね、か。

ふと頭を過った事があるけれど、それを僕は声に出して言うことはなかった。

だってそうだろう?

こんな時に、こんな場所で。

『誰なら使うんですか?』なんて聞けるはずもない。

今は別にいいじゃないか。細かいところに突っ込んだって、何の解決にもならない。

「ふははははっ!! 話は聞かせてもらったぞ!! 小僧、ならばこの俺が鍛えてやろう!! この間は手加減してやったが今回はそうはいかんぞ!! いいか!! やるからには徹底的にだ!! 中途半端に強くなるならば死んだ方がましだ!! いいか!! さっさと強くなれ!! そうすることで初めて、俺は貴様を殺す意味がある!!」

僕も結構叫んだ方だけど、その更に上をいく大きさの声が僕達の耳に届く。
いつからそこにいたのか知らないけれど、そこには見慣れた全身白のスーツ。

……って呑気に解説しているけど、正直本当に耳が痛い。
ただでさえよく聞こえる場所と耳が揃っているにもかかわらず、その上大声となるとたまったもんじゃない。

何だか天童寺生徒会長は方を震わせているけれど……まあ僕に關与できることではないだろうし、ここは彼女に任せておこう。

「よいしょ、っと……」

力任せに格子を広げると、想像以上に簡単に形を崩してしまった。
……いいのかな?

壊した後になって罪悪感が湧いてくる。一度屋敷をぶち壊している身としては、あまり壊すようなことはしたくなかったんだけど。
仕方がないか。

人生こんなもんだろう。達観してる、なんて言い方をされたいわけ

じゃないし、悟っている、なんて言い方をされたいわけじゃない。

ただ、始めてもいいのかもしれないと思う。僕の物語を。
僕だけの、物語を。

脇役にもならないような役者であることはわかっている。
役者を名乗ることさえ、おこがましいのかもしれない。

それでも。

たった一人の友達のために。友達と呼んでくれる彼女のために。
たった一人の主人のために。僕を許してくれた彼女のために。

主人公になりたいだなんて思わない。
でも始めることにしよう。

僕が登場する、物語を。

僕の物語（後書き）

主人公がいなければ、物語は成り立たない。
脇役がいなければ、主人公が引き立たない。
観客がいなければ、物語の意味がない。

誰に届ける物語にも共通するもの。

絶対に必要なもの。

揃って初めて、意味を持つ。存在できる。

15話です。

分量が短いくせに更新が遅いです。

気長に待っていただければ嬉しいです。

次回予告。

力を失った武器は、たった一人の主人を求めた。
力を取り戻した眷族は、たった一つの光を求めた。

暴走する力に怯えながら、少年は自らの力の舵をとる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8717u/>

約束の詩

2011年10月14日08時57分発行